

びゅう ばる
別 府 原 遺 跡

にし が さこ
西 ケ 迫 遺 跡

びゅう ばる
別 府 原 第2遺 跡

東九州自動車道建設(西都～清武間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XVII

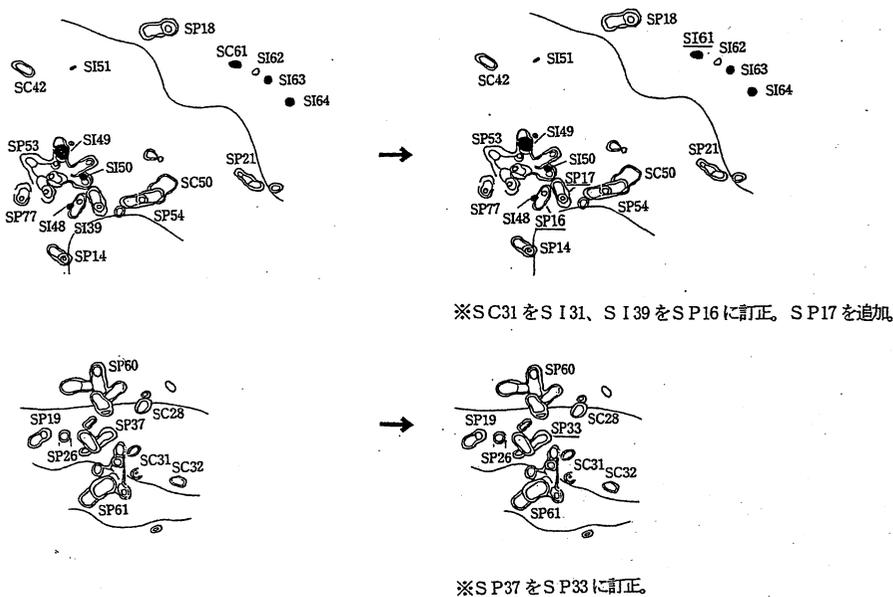
2002

宮崎県埋蔵文化財センター

『別府原・西ヶ迫・別府原第2遺跡』正誤表

ページ・図番号	誤	正
例言 2	現地調査に関する実測および写真撮影は日高広人、木本剛、…………	現地調査に関する実測および写真撮影は日高広人、青山尚友、木本剛、…………
p14-4	どちらも遺物の出土はみられない。	遺物はSA2で土器片や石鏃・磨石等の石器が床面より若干浮いた状態で確認されている。
p31 第20図	SI60	SI62
p33 第2表 SA2 出土遺物	—	土器(口IIa1、胴IIⅢ、胴IV類)、石器(石鏃、剥片、磨石等)
p33 第2表 SA2 備考	ビットあり。長方形プランか	ビットあり。長方形プランか。SP65-4と接合(IIa1類土器)
p33 第3表 No.36	2つ重複	一方を削除してください
p36 第3表 下	※SI24以前については旧石器時代の所産	※SI24以前、およびSI84については旧石器時代の所産。またSI57・77・78・80～83は欠番
p36-20	(SP48-1、SP56-4……)	(SP48-1、SP56-1……)
p36-23	(SP56-4等多数)	(SP56-1等多数)
p37-13	(SP3、SP56-4)	(SP1、SP2等)
p37-13~14	(SP1、SP63-4等)	(SP3、SP63-4等)
p37-18~19	(SP40-1・2、SP62-4・5)	(SP44-1・2、SP66-1~3等)
p37-21~22	(SP50-1・2、SP64-29・38)	(SP50-1・2、SP67-29・38等)
p37-26	切り合いがブリッジ崩壊の要因の一つ	ブリッジ崩壊が切り合いの要因の一つ
p38-5	(SP1、SP39、SP48-5、……)	(SP1、SP15、SP48-5、……)
p38-13	(SP18)	(SP15)
p43 第26図 SP57	方位	109° 反時計回り
p46 第29図 切り合い関係図	SP42	SP45
p53 第36図 SP58	方位	101° 反時計回り
p58 第41図 断面図	B B'	B' B
p74 第4表 No.30 出土遺物	土器(口IIa1、胴IIⅢ、胴IV類)、石器(石鏃、剥片、磨石等)	—
p74 第4表 No.30 備考	SP65-5と接合(IIa1類土器)	SP65-4と接合(IIa1類土器)
p87 第60図 60	(SP30、SP65-5)	(SA2、SP65-4)
p92 第92図 スケール	数字なし	0 10cm
p99 第5表 No.60 出土位置	A区 SP65-5 SP30	A区 SP65-4 SA2
p106 第71図	228(SP67)	228(SP67-35)
p108 第73図	266(SP69・70・SA6)	266(SP69・70・SC46)

15・16頁 第6図



びゅう ばる
別 府 原 遺 跡

にし が さこ
西 ケ 迫 遺 跡

びゅう ばる
別 府 原 第2遺 跡

東九州自動車道建設(西都～清武間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XVII

2002

宮崎県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深い御理解をいただき厚く御礼申し上げます。

宮崎県埋蔵文化財センターでは、東九州自動車道西都～清武間建設事業に伴い、別府原・西ヶ迫・別府原第2遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

別府原・西ヶ迫・別府原第2遺跡の3遺跡は、ともに旧石器時代～縄文時代早期の遺構と遺物が伴う複合遺跡で、特に別府原遺跡では縄文時代早期の炉穴が約300基も確認されるなど、縄文時代早期の集落構造を考えていくうえでも注目される遺跡です。

こうした先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料が得られたことは、大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成14年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 矢野 剛

例 言

1. 本書は、東九州自動車道建設（西都～清武間）事業に伴い実施された、宮崎県西都市大字鹿野田字別府原及び宮崎郡佐土原町大字上田島所在の別府原遺跡、西ヶ迫遺跡、別府原第2遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地調査に関する実測および写真撮影は日高広人、木本剛、大坪博子、稲岡洋道、太川裕晴が主に行い、一部をセンター職員の協力を得た。また炉穴の実測の一部については南九州サポート協同組合に委託した。
3. 空中写真については（株）スカイサーベイに委託した。
4. 自然科学分析については古環境研究所、残存脂肪酸分析を株式会社ズコーシャにそれぞれ委託した。
5. 土層断面および土器の色調については「新版標準土色帖」に拠る。
6. 遺物の整理および実測・トレースについては宮崎県埋蔵文化財センターにて整理作業員の補助のもと、主に日高が行い、石器実測およびトレースについては藤木聡、松本茂、重留康弘、金丸武司（田野町教育委員会）の協力を得た。なお、石器実測およびトレースの一部については（株）エーテック、大成エンジニアリング株式会社にそれぞれ委託した。
7. 陶磁器の実測およびトレース・写真撮影については柳田晴子が行った。
8. 遺構計測および土器観測表（西ヶ迫遺跡・別府原第2遺跡）・石器計測表作成は主に日高が行い、柳田、辻弥生、日高敬子の協力を得た。また別府原遺跡の土器観測表作成は菅付和樹が行った。
9. 石器の石材同定については日高が行い、松田清孝の協力を得た。同定基準については、宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第50集等で使用されている石器石材分類表を基に同定を行っている。詳細については、それらを参考にしていきたい。
10. 本書に使用した方位は磁北であり、座標は国土座標第Ⅱ系に拠る。またレベルは海拔絶対高である。
11. 西都市教育委員調査地と接する遺構については、西都市教育委員会のご厚意により掲載させていただいた。
12. 遺物写真については、別府原遺跡のものを小山博が行い、他は日高が行った。
13. 本書に使用した位置図は、国土地理院発行の5万分の1図をもとに作成した。
14. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
SA＝竪穴、SC＝土坑・配石土坑・陥し穴状遺構、SG＝道路状遺構、
SI＝集石遺構・配石遺構、SP＝炉穴
15. 挿図の縮尺は各図に示している。
16. 本書の執筆は主に日高が行い、他に第Ⅰ章・第3節を小山、第Ⅱ章・第3節・2（2）は柳田が行った。編集は日高が行った。
17. 出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序文	
例言	
第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査体制	1
第3章 遺跡の位置と環境 (小山 博)	3
第4章 調査の方法と経過	7
第Ⅱ章 別府原遺跡	11
第1節 調査の概要	11
第2節 遺跡の層序	12
第3節 調査の成果	13
1. 縄文時代早期の遺構と遺物	13
(1) 遺 構	13
(2) 遺 物	80
2. 中・近世の遺構と遺物	128
(1) 遺 構	128
(2) 遺 物 (柳田晴子)	128
3. 時期不明の遺構	132
第4節 自然科学分析	133
1. 別府原遺跡における放射性炭素年代測定	133
2. 別府原遺跡における熱ルミネッセンス年代測定	134
3. 別府原遺跡における炉穴内出土炭化材の樹種同定	137
4. 別府原遺跡における炉穴内出土炭化物の同定	138
第5節 まとめ	140
第Ⅲ章 西ヶ迫遺跡	148
第1節 調査の概要	148
第2節 遺跡の層序	149
第3節 調査の成果	150
1. 旧石器時代の遺物	150
(1) 遺 物	150
2. 縄文時代早期の遺構と遺物	152
(1) 遺 構	152

(2) 遺構内出土遺物	162
(3) 包含層出土遺物	162
3. 時期不明の遺構	168
(1) 遺 構	168
第4節 まとめ	168
第Ⅳ章 別府原第2遺跡	172
第1節 調査の概要	172
第2節 遺跡の層序	173
第3節 調査の成果	175
1. 旧石器時代の遺物	175
(1) 遺 物	175
2. 縄文時代早期の遺構と遺物	176
(1) 遺 構	176
(2) 遺 物	178
3. 時期不明の遺構	180
第4節 まとめ	180

報告書抄録

挿 図 目 次

第Ⅰ章 はじめに	第12図 別府原遺跡 配石土坑(SC)実測図(2)	22	
第1図 遺跡位置図	5	第13図 別府原遺跡 集石遺構(SI)実測図(1)	24
第2図 周辺地形と調査区	6	第14図 別府原遺跡 集石遺構(SI)実測図(2)	25
第3図 調査区配置図	10	第15図 別府原遺跡 集石遺構(SI)実測図(3)	26
第Ⅱ章 別府原遺跡	第16図 別府原遺跡 集石遺構(SI)実測図(4)	27	
第4図 別府原遺跡 層別の調査範囲	11	第17図 別府原遺跡 集石遺構(SI)実測図(5)	28
第5図 別府原遺跡 基本層序	12	第18図 別府原遺跡 集石遺構(SI)実測図(6)	29
第6図 別府原遺跡 縄文時代遺構分布図	15	第19図 別府原遺跡 集石遺構(SI)実測図(7)	30
第7図 別府原遺跡 竪穴(SA)実測図	17	第20図 別府原遺跡 集石・配石遺構(SI)実測図	31
第8図 別府原遺跡 土坑(SC)実測図(1)	18	第21図 別府原遺跡 配石遺構(SI)実測図(2)	32
第9図 別府原遺跡 土坑(SC)実測図(2)	19	第22図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(1)	39
第10図 別府原遺跡 土坑(SC)実測図(3)	20	第23図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(2)	40
第11図 別府原遺跡 配石土坑(SC)実測図(1)	21	第24図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(3)	41
		第25図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(4)	42

第26図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (5) ……………	43	第62図 別府原遺跡 出土縄文土器実測図 (8) ……………	89
第27図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (6) ……………	44	第63図 別府原遺跡 出土縄文土器実測図 (9) ……………	90
第28図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (7) ……………	45	第64図 別府原遺跡 出土縄文土器実測図 (10) ……………	91
第29図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (8) ……………	46	第65図 別府原遺跡 出土縄文土器実測図 (11) ……………	92
第30図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (9) ……………	47	第66図 別府原遺跡 出土縄文土器実測図 (12) ……………	93
第31図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (10) ……………	48	第67図 別府原遺跡 出土縄文土器実測図 (13) ……………	94
第32図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (11) ……………	49	第68図 別府原遺跡 出土縄文土器実測図 (14) ……………	95
第33図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (12) ……………	50	第69図 別府原遺跡 出土縄文土器実測図 (15) ……………	96
第34図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (13) ……………	51	第70図 別府原遺跡 出土縄文土器実測図 (16) ……………	97
第35図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (14) ……………	52	第71図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (1) ……………	106
第36図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (15) ……………	53	第72図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (2) ……………	107
第37図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (16) ……………	54	第73図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (3) ……………	108
第38図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (17) ……………	55	第74図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (4) ……………	109
第39図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (18) ……………	56	第75図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (5) ……………	110
第40図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (19) ……………	57	第76図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (6) ……………	111
第41図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (20) ……………	58	第77図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (7) ……………	112
第42図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (21) ……………	59	第78図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (8) ……………	113
第43図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (22) ……………	61	第79図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (9) ……………	114
第44図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (23) ……………	62	第80図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (10) ……………	115
第45図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (24) ……………	63	第81図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (11) ……………	116
第46図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (25) ……………	64	第82図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (12) ……………	117
第47図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (26) ……………	65	第83図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (13) ……………	118
第48図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (27) ……………	66	第84図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (14) ……………	119
第49図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (28) ……………	67	第85図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (15) ……………	120
第50図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (29) ……………	68	第86図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (16) ……………	121
第51図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (30) ……………	69	第87図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (17) ……………	122
第52図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (31) ……………	71	第88図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (18) ……………	123
第53図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (32) ……………	72	第89図 別府原遺跡 縄文時代石器実測図 (19) ……………	124
第54図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (33) ……………	73	第90図 別府原遺跡 近世および時期不明遺構分布図 ……	128
第55図 別府原遺跡 出土縄文土器実測図 (1) ……………	82	第91図 別府原遺跡 道路状遺構 (SG) 実測図 ……………	129
第56図 別府原遺跡 出土縄文土器実測図 (2) ……………	83	第92図 別府原遺跡 陶磁器実測図 ……………	130
第57図 別府原遺跡 出土縄文土器実測図 (3) ……………	84	第93図 別府原遺跡 竪穴 (SA) および陥し穴状遺構 (SC)	
第58図 別府原遺跡 出土縄文土器実測図 (4) ……………	85	実測図 ……………	132
第59図 別府原遺跡 出土縄文土器実測図 (5) ……………	86	第94図 等価線量測定 の T L ……………	136
第60図 別府原遺跡 出土縄文土器実測図 (6) ……………	87	第95図 スプラリアの補正測定 の T L ……………	136
第61図 別府原遺跡 出土縄文土器実測図 (7) ……………	88	第96図 等価線量を決定するための生長曲線 ……………	136

第Ⅲ章 西ヶ迫遺跡		第Ⅳ章 別府原第2遺跡	
第97図	西ヶ迫遺跡 周辺地形と調査区 …………… 148	第113図	西ヶ迫遺跡 時期不明遺構分布図 …………… 167
第98図	西ヶ迫遺跡 基本層序 …………… 149	第114図	西ヶ迫遺跡 土坑(SC)実測図 …………… 167
第99図	西ヶ迫遺跡 旧石器時代遺物分布図 …………… 150	第115図	別府原第2遺跡 周辺地形と調査区 …………… 172
第100図	西ヶ迫遺跡 旧石器時代遺物実測図(1) …… 151	第116図	別府原第2遺跡 基本層序 …………… 173
第101図	西ヶ迫遺跡 旧石器時代遺物実測図(2) …… 152	第117図	別府原第2遺跡 層別の調査範囲 …………… 173
第102図	西ヶ迫遺跡 縄文時代早期遺構分布図 …… 153	第118図	別府原第2遺跡 旧石器時代遺物分布図 …… 174
第103図	西ヶ迫遺跡 集石遺構(SI)実測図(1) …… 154	第119図	別府原第2遺跡 旧石器時代石材別遺物分布図 … 174
第104図	西ヶ迫遺跡 集石遺構(SI)実測図(2) …… 155	第120図	別府原第2遺跡 旧石器時代遺物実測図(1) …… 174
第105図	西ヶ迫遺跡 集石遺構(SI)実測図(3) …… 157	第121図	別府原第2遺跡 旧石器時代遺物実測図(2) …… 175
第106図	西ヶ迫遺跡 集石遺構(SI)実測図(4) …… 158	第122図	別府原第2遺跡 縄文時代早期遺構および遺物 分布図 …………… 177
第107図	西ヶ迫遺跡 遺構内出土遺物 …………… 158	第123図	別府原第2遺跡 集石遺構(SI)実測図 …… 177
第108図	西ヶ迫遺跡 縄文時代早期出土遺物分布図 … 160	第124図	別府原第2遺跡 縄文時代早期土器実測図 …… 178
第109図	西ヶ迫遺跡 縄文時代早期遺物(1) …… 161	第125図	別府原第2遺跡 縄文時代早期石器実測図 …… 178
第110図	西ヶ迫遺跡 縄文時代早期遺物(2) …… 163	第126図	別府原第2遺跡 溝状遺構(SE)実測図 …… 180
第111図	西ヶ迫遺跡 縄文時代早期遺物(3) …… 164		
第112図	西ヶ迫遺跡 縄文時代早期遺物(4) …… 165		

表 目 次

第Ⅰ章 はじめに		第Ⅲ章 西ヶ迫遺跡	
第1表	調査工程表 …………… 9	第10表	別府原遺跡出土炭化物の同定結果 …………… 138
第Ⅱ章 別府原遺跡		第11表	西ヶ迫遺跡 旧石器時代石器計測表 …………… 152
第2表	別府原遺跡 竪穴(SA)および土坑・配石土坑(SC) 一覧表 …………… 33	第12表	西ヶ迫遺跡 集石遺構(SI)一覧表 …………… 159
第3表	別府原遺跡 集石遺構・配石遺構(SI)一覧表 … 34	第13表	西ヶ迫遺跡 縄文時代早期土器観察表 …………… 166
第4表	別府原遺跡 炉穴(SP)一覧表 …………… 74	第14表	西ヶ迫遺跡 縄文時代早期石器計測表 …………… 166
第5表	別府原遺跡 縄文時代早期土器観察表 …… 98	第15表	西ヶ迫遺跡 土坑(SC)一覧表 …………… 168
第6表	別府原遺跡 縄文時代早期石器計測表 …… 125	第Ⅳ章 別府原第2遺跡	
第7表	別府原遺跡 陶磁器観察表 …………… 131	第16表	別府原第2遺跡 旧石器時代石器計測表 …… 176
第8表	別府原遺跡における炉穴(SP67-29)焼土の熱 ルミネッセンス(TL)年代測定結果 …… 135	第17表	別府原第2遺跡 集石遺構計測表 …………… 179
第9表	別府原遺跡出土炭化材の樹種同定結果 …… 137	第18表	別府原第2遺跡 縄文時代早期土器観察表 …… 179
		第19表	別府原第2遺跡 縄文時代早期石器計測表 …… 179

図 版 目 次

第Ⅱ章 別府原遺跡

図版 1	139	S P 50 (西より)	
別府原遺跡出土炭化材の顕微鏡写真		S P 51 (西より)	
別府原遺跡SP39出土種実		S P 51-3・4・7 (北より)	
別府原遺跡SP48-5 (炉穴下部) 出土炭化物		S P 63 (北より)	
図版 2	141	S P 67	
別府原遺跡A区遠景 (南より)		S P 65 (西より)	
別府原遺跡A区南側遠景 (西より)		S P 65-4出土遺物 (西より)	
別府原遺跡B区 (西より)		図版 6	145
土層堆積状況		S P 44 (北より)	
礫群検出状況 (西より)		S P 68 (南より)	
S A 1・S P 58 (東より)		S P 66 (南より)	
S A 2・S C 74・S P 30 (西より)		S P 72・73 (南より)	
図版 3	142	S G 1 (北より)	
S C 47 (南より)		S G 2 (西より)	
S C 52 (西より)		図版 7	146
S C 22 (西より)		縄文時代早期土器 (1)	
S C 62 (西より)		縄文時代早期土器 (2)	
S C 63 (西より)		縄文時代早期土器 (3)	
S C 28 (南より)		縄文時代早期土器 (4)	
S C 61 (北より)		縄文時代早期土器 (5)	
S C 67 (北より)		縄文時代早期土器 (6)	
S C 68 (南より)		縄文時代早期土器 (7)	
図版 4	143	石 鏃	
S I 54 (西より)		図版 8	147
S I 63 (東より)		尖頭器・スクレイパー	
S I 64 (北より)		石錐・楔形石器	
S I 67・68 (西より)		打製石斧・局部磨製石斧・礫器	
S I 85 (南より)		礫 器 (2)	
S I 62 (北より)		敲 石	
S P 4 (北より)		磨 石	
S P 31 (西より)		凹石・石錘	
図版 5	144	装飾品	
S P 49 (南より)		陶磁器	

第Ⅲ章 西ヶ迫遺跡

図版9 169

西ヶ迫遺跡遠景（北より）

調査区（A・B区）

土層堆積状況

調査風景

S I 1（南より）

S I 2（一面除去後、南より）

S I 4（北より）

図版10 170

B区 礫群南側（北東より）

B区 礫群北側（北より）

B区 礫群完掘状況（北東より）

S I 16（北より）

C区 集石遺構検出状況（S I 15・16・18～20）

A区 縄文時代早期遺物分布状況（南より）

S C 1

S C 2

図版11 171

旧石器時代遺物

縄文時代早期土器（1）

縄文時代早期土器（2）

縄文時代早期石器（1）

縄文時代早期石器（2）

縄文時代早期石器（3）

第Ⅳ章 別府原第2遺跡

図版12 181

別府原第2遺跡遠景（南西より）

調査風景

旧石器時代遺物出土状況（北より）

縄文時代早期遺構および遺物出土状況（北より）

S I 1（北より）

S E 1（北より）

旧石器時代遺物

縄文時代早期遺物

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道延岡～清武間は平成元年2月に基本計画がなされ、そのうち西都～清武間については平成13年12月に整備計画路線となっている。その後、平成5年11月に建設大臣から日本道路公団へ施工命令が出され、公団では平成6年から事業に着手している。その間、宮崎県教育委員会文化課では、平成3年度に西都～清武間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき、埋蔵文化財保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響が出る部分については工事着手前に発掘調査を実施することになった。調査は平成7年度が文化課、平成8年度からは宮崎県総合博物館から分離・独立した宮崎県埋蔵文化財センターで実施している。

西都市大字鹿野田字別府原及び宮崎郡佐土原町大字上田島字西ヶ迫周辺では、以前より遺物が容易に表採される場所であり、本調査に先立ち、平成8年8月20日に確認調査を実施し、縄文時代早期の礫群と土器片等を確認した。遺跡名については遺跡詳細分布図に掲載されている遺跡名をそのまま用い、小路～佐土原線より以北の平坦地及び南に突き出した部分を「山内・桜原遺跡」、谷を挟んで南西側の丘陵部2ヶ所を「西ヶ迫・黒貫遺跡」とし、発掘調査を平成8年8月26日～平成9年12月8日まで実施した。調査中、新たに市道都於郡一佐土原線の付け替え工事による迂回路部分と工事用道路部分の調査を行うことになり、併行して調査が行われている。

なお、遺跡名は調査終了後、「山内・桜原遺跡」「西ヶ迫・黒貫遺跡」としていたものを、小字名を用い、「別府原遺跡」「西ヶ迫遺跡」「別府原第2遺跡」に変更している。

第2節 調査の組織

別府原遺跡、西ヶ迫遺跡、別府原第2遺跡の調査組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

調査長

田原 直廣（平成8年度）
岩切 重厚（平成9年度）
笹山 竹義（平成10～12年度）
岩切 正憲（平成13年度～）

文化課長

江崎 富治（平成8年度）
仲田 俊彦（平成9～11年度）
黒岩 正博（平成12年度～）

埋蔵文化財係長

面高 哲郎（平成8年度）
北郷 泰道（平成9～11年度）
石川 悦雄（平成12年度～）
（調整担当）

主 査 永友 良典（平成8年度）
主 査 柳田 宏一（平成9年度）
主任主事 重山 郁子（平成10～11年度）
主任主事 飯田 博之（平成12年度～、平成13年度より主査）

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	(整理担当)
藤本 健一 (平成8～9年度)	主 査 菅付 和樹 (平成9～11年度)
田中 守 (平成10～11年度)	主 査 倉永 英季 (平成12年度)
矢野 剛 (平成12年度)	主任主事 小山 博 (平成13年度)
副参事	(調査担当)
木幡 文夫 (平成8年度)	主 事 日高 広人 (別府原遺跡、西ヶ迫遺跡、別府原第2遺跡)
副所長	
岩永 哲夫 (平成8～9年度・12年度)	主 査 青山 尚友 (別府原遺跡)
江口 京子 (平成10～11年度)	主任主事 木本 剛
菊池 茂仁 (平成12年度～)	(平成9年度、西ヶ迫遺跡1次調査)
調査第一課長	主 事 大坪 博子
面高 哲郎 (平成12年度～)	(平成9年度、別府原遺跡)
調査第一係長	調査員 稲岡 洋道
岩永 哲夫 (平成8年度、兼務)	(平成8年度 現宮崎市教育委員会)
面高 哲郎 (平成9～11年度・12年度、兼務)	太川 裕晴 (平成9年度、別府原遺跡、西ヶ迫遺跡2次調査 現東郷町教育委員会)
谷口 武範 (平成13年度)	
(調整担当)	
主 事 飯田 博之 (平成8年度)	(報告書担当)
主 査 菅付 和樹 (平成9～11年度)	主任主事 日高 広人

なお、次の方々に調査及び報告書作成の御指導・御協力をいただいた。記して謝意を表したい。

(順不同、敬称略)

賀川光夫(別府大学、故人)、橘 昌信(別府大学)、鈴木忠司(京都文化博物館)、蓑方政幾(西都市教育委員会)、伊東 但(清武町教育委員会)、栗畑光博(都城教育委員会)、金丸武司(田野町教育委員会)、木島崇晴(大阪府貝塚市教育委員会)、井上隆広(当時鹿児島大学学生、現綾町教育委員会)、代田博文(南郷町教育委員会)、宮田栄二、八木澤一郎、桑波田武志、黒川忠広(鹿児島県立埋文化財センター)、西都市教育委員会

第3節 遺跡の位置と環境

九州山地にその端を発し、宮崎平野の中央部を東流する一ツ瀬川は、その中流域から下流域にかけて広い沖積低地を形成する。沖積低地はそれを取り囲む（台地）丘陵の裾部まで広がりを見せ、古来より人々の生業の地としてあまたの歴史を見つめてきた。同様に、その沖積低地を取り巻く（台地）丘陵上にも旧石器時代から綿々と続く各時代の遺跡が数多く点在し、この地が悠久の時の流れの中にあつて、常に人々の生活の場として、また時には政争の場として長い歴史を刻んできたことを物語っている。

今回報告する別府原・西ヶ迫・別府原第2遺跡の3遺跡は、沖積低地を見下ろす標高100m前後の丘陵上に展開する。地形の変化が緩やかで平坦な地形を呈する丘陵上は、現在その大半が農耕地として活用されている。しかし、さほど大きな地形の改変を受けているとは思われず、古来より人々の生活空間として適した地であったことは想像に難くない。また、この付近の丘陵斜面に数多く見られる開析谷により形成された「迫」と呼ばれる地形は、湧水や伏流水の水源に富み水の確保という観点からも生活に適した土地であったと思われる。

これらの遺跡では、旧石器時代から縄文時代早期の遺構や遺物が確認されており、他に別府原遺跡では近世のものも確認されている。中でも3遺跡に共通して確認されている旧石器時代から縄文時代早期については近年の東九州自動車道や各種事業に伴う調査等により確認例が増加し、この地域一帯の当該期の様相が明らかになりつつある。ここでは当該期の主要な遺跡について時代ごとに概観していきたい（第1図）。

旧石器時代の主な遺跡としては、3遺跡が立地する都於郡・仲間原台地には黒貫遺跡、小判屋敷遺跡（西都市大字鹿野田）が立地する。これら2遺跡は当時学生であった金丸武司氏らの踏査によって確認された遺跡（金丸・小谷1995）で、そのうち小判屋敷遺跡では神子柴型石斧が表採されており、県内でも神子柴文化の影響が看取できる数少ない資料である。

また都於郡・仲間原台地の南に形成される標高84～87mの船野台地には指標細石核である船野型細石核を出土したことで著名な船野遺跡第1地点・第2地点（佐土原町大字西上那珂）があり、ナイフ形石器文化から細石器文化へと移行する過渡期に遺跡は形成されたと考えられている。さらに同台地上やその周辺に形成された台地上には上ノ原遺跡、下屋敷遺跡、南学原第1・第2遺跡、長蘭原遺跡、上ノ迫遺跡（佐土原町大字西上那珂）、内城跡（内城第1遺跡、佐土原町大字東上那珂）等が確認され、なかでも上ノ原遺跡、下屋敷遺跡、長蘭原遺跡、上ノ迫遺跡の4遺跡では礫群とともにブロック（石器集中部）が良好な状態で数多く検出されており、多くの接合資料（石器）も確認されている。時期的には上ノ原遺跡ではナイフ形石器群が始良Tn火山灰の上下2時期と細石刃石器群の合計3時期、下屋敷遺跡と長蘭原遺跡ではナイフ形石器群（始良Tn火山灰上位）と細石刃石器群の2時期、上ノ迫遺跡がナイフ形石器群（始良Tn火山灰上位）の1時期がそれぞれ確認されている。なお、上ノ原遺跡では細石刃石器群の時期の陥し穴状遺構が確認されており、当時の生活を考えていくうえでも興味深い。

縄文時代の遺跡としては集石遺構や土坑が検出された隠山遺跡（佐土原町大字上田島）があり、草創期に比定されており、遺物は隆帯文土器が出土している。

早期では、上ノ原遺跡、下屋敷遺跡、長蘭原遺跡、内城跡等で確認されている。これらの遺跡では共通して集石遺構や散礫が確認されているほか、上ノ原遺跡、長蘭原遺跡、内城跡では炉穴が確認されお

り、その多くは切り合って検出されている。また同時代の陥し穴状遺構が下屋敷遺跡や長藪原遺跡で確認されている。そのうち長藪原遺跡では底面に付設されている小穴内に逆茂木を固定したと考えられる「礫の意図的な配置状況」が確認されおり、注目される。なお出土遺物は上ノ原遺跡が吉田式系土器や貝殻文系土器、押型文土器、中原Ⅱ式土器、桑ノ丸式土器、下屋敷遺跡では吉田式系土器や押型文土器、長藪原遺跡では貝殻文系土器、吉田式系土器、中原Ⅱ式土器等、内城跡では前平式土器や知覧式土器、中原式土器、下剥峰式土器、押型文土器、平楯式土器等がそれぞれ確認されている。

約6,400年前の鬼界カルデラの火山活動によるアカホヤ火山灰降灰を境に、周辺の遺跡数が激減する。このことは県内をみても同様の傾向が看取できる。現在までのところ上ノ原遺跡において中期の船元式土器や春日式土器をはじめ、後期の土器から晩期の孔列文土器等、複数の時期の遺物が確認され、他に隠山遺跡でも孔列文土器が確認されている等、数遺跡に限られる。

近世では佐土原藩領となる。佐土原城（佐土原町大字上田島）を中心に城下町が形成され、佐土原城下には浄土宗高月院、法華宗本門流の吉祥寺などの多くの寺院が建立され、臨済宗妙心寺派の大光寺は中世から現存している。藩主である島津氏が仏教に深く帰依し保護しており、廃仏毀釈で現存していないが、藩内には多くの寺院が点在していたとみられる。『日向地誌』には、古迹として多くの寺院名が列挙されており、本遺跡の周辺にも僧侶や檀家の墓と見られる近世墓や寺院があったとの伝承が残っている。

(参考文献)

佐土原町教育委員会1991「佐土原町遺跡詳細分布調査報告書」『佐土原町文化財報告書第5集』

佐土原町教育委員会1993「隠山遺跡概要報告書」『佐土原町文化財報告書第8集』

金丸武司・小谷桂太郎1995「宮崎平野の旧石器時代遺物」『ぢかたび』第35号

宮崎県埋蔵文化財センター1997「平成8年度 東九州自動車道関係埋蔵文化財調査概要報告書(西都～清武)」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第6集』

宮崎県埋蔵文化財センター1998「平成9年度 東九州自動車道関係埋蔵文化財調査概要報告書Ⅱ(西都～清武)」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第12集』

宮崎県埋蔵文化財センター1999「平成10年度 東九州自動車道関係埋蔵文化財調査概要報告書(西都～清武)」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第20集』

佐土原町史編纂委員会1982『佐土原町史』

平凡社1997「宮崎県の地名」『日本歴史地名大系』第46巻



- | | | | | |
|--------------|-----------|--------------|------------------------|-------------|
| 1. 別府原遺跡 | 2. 西ヶ迫遺跡 | 3. 別府原第2遺跡 | 4. 小判屋敷遺跡 | 5. 黒貫遺跡 |
| 6. 都於郡城跡 | 7. 佐土原城跡 | 8. 隠山遺跡 | 9. 内城跡 (内城第1遺跡、内城第2遺跡) | |
| 10. 上ノ原遺跡 | 11. 下屋敷遺跡 | 12. 船野遺跡第1地点 | 13. 南学原第1遺跡 | 14. 南学原第2遺跡 |
| 15. 船野遺跡第2地点 | 16. 長蘭原遺跡 | 17. 上ノ迫遺跡 | | |

第1図 遺跡位置図 [S=1/50,000]



第2図 周辺地形と調査区 [S=1/3,000]

第4節 調査の方法と経過

別府原・西ヶ迫遺跡の周辺では、以前より遺物が容易に表採される場所であり、畑地の畦に遺物が山積みにされた状態で置かれている光景をよく目にすることができた。調査対象範囲が南北に約400mにもおよび、あらかじめ遺跡の範囲と内容をおさえる必要があることから、調査可能な範囲については事前に確認調査を行うことにし、未買収地については踏査を行い、必要な範囲については用地買収後にあらためて確認調査を行うことにした。

確認調査は、都於郡一佐土原線と小路一佐土原線に挟まれた平坦部（別府原遺跡、旧山内・桜原遺跡）を平成8年8月20日に実施し、縄文時代早期の礫群と遺物が確認されたが、ゴボウ栽培によるトレンチャー跡が幾条も入り、そのトレンチャー内から旧石器時代の遺物（三稜尖頭器）も認められ、遺存状況が悪いものの、最低2枚の文化層があると判断された。また踏査の結果、都於郡・佐土原線より以北の急崖に接する部分については、植木の植林等により、大半がアワオコシスコリア層付近まで削平を受けていることが確認できたため、本調査から除外している。

本調査では、工事の兼ね合いや未買収地の問題等から遺跡を分割して調査を行うことになり、基本的には1班集体（当時2名）で対応するため、2遺跡を並行して調査を行う可能性がでてきた。

遺跡は一連の丘陵上に形成されているため、2遺跡の境界をどのように区切るか等の問題が生じた。そのため調査では2遺跡を区別せずに遺跡群として扱うことにし、国土座標に準じた10m×10mグリットを単位とし、調査対象範囲全域を覆うように設定し、東西方向にアルファベット（西よりA、B、C…）を付し、南北方向に数字（北より1、2、3…）を付すことにした（第2図）。また設定した調査区の呼称を両遺跡共通のものにして、区名にアルファベットを用いた（第3図）。

調査は、平成8年8月26日に確認調査を行った範囲（A区）より始めた。公団との協議では、その部分に工事用道路を建設することから、調査を4ヶ月間に限定して行うことになった。重機による表土剥ぎを行った段階で南側と中央部の一部にアカホヤ火山灰層（Ⅲ層）が残存するのみで、他はその下の黒色土層（Ⅳ層）まで削平を受けていた。またトレンチャー跡が予想以上に幾条も入り、大半が小林降下軽石風成二次堆積層（Ⅵb層）中もしくはその下層まで達し、深いところでは始良Tn火山灰層（Ⅸ層）まで深削される部分もみられた。一旦、その面で遺構確認をした後、グリットごとに1層ずつ掘り下げを行った。当初の予定では、期間の関係上、縄文早期包含層（Ⅴ層）までは全面的に掘り下げを行い、その後は土層確認用のベルトを残した状態で、グリットをさらに4つに分割し、千鳥掘りを行うことを基本にし、遺構・遺物が確認された時点でその周辺を拡張して掘り下げることにした。

縄文時代早期の調査では、予想以上に時間を費やした。特に焼礫が調査区一面にみられ、掘り下げもままならない状況が続いた。また散礫中及びその下からは集石遺構等の遺構が多数確認され、実測に手を焼いた。どうにか縄文時代早期の調査が終わりに近づき、残りの期間で旧石器の調査を行った。Ⅵ層の掘り下げ中、部分的に黒いにじみが多数確認出来、検出作業を行ったが、周辺の土色よりもわずかに暗色のため作業に困難をきたした。にじみの幾つかは非常に浅いため、遺構と認定できないものもみられたが、残りのものは掘り下げる段階で埋土がさらに黒くなり、土質も非常に硬質で、赤褐色粒（焼土粒）を多く含んでいた。完掘した状態では、土坑の一端に焼土を伴い、平面形では焼土と焼土を持たない部分との境が若干内側にくびれる形状を呈していた。のちに炉穴と判明したが、当時、調査員に若干

の混乱がみられたのも事実である。期間との兼ね合いもあり、Ⅵ層でどうしても検出できないものについては、1層下のⅦa層上面でもう1度検出を試みた。Ⅶa層はⅥ層と正反対に軟質で、土色も暗褐色に変わり、容易に確認できるようになった。しかし、いよいよ期限がなくなり、炉穴の調査と旧石器時代の調査を並行して行った。また、調査中にA区に隣接する南西側丘陵（旧西ヶ迫・黒貫遺跡）の買収が完了し、確認調査を行っている。丘陵部は削平が著しく、丘陵端部でアカホヤ火山灰層が一部確認されたのみで、その他では表土を剥ぐと始良岩戸軽石層（約5万年前?）や、その下層の赤褐色土（阿蘇4火砕流堆積物層）がみられ、遺構・遺物等は確認されなかったことから調査から除外した。なお、この頃に西都市教育委員会が市道都於郡一佐土原線の拡幅工事に伴い、発掘調査¹⁾を行っている。

1月からは新たに市道都於郡一佐土原線の付け替え工事による迂回路部分の調査を行うことになった。迂回路は市道都於郡一佐土原線と小路一佐土原線の分岐点から弧状を描くように、両路線に挟まれた平坦地の中央を分断するように通る。そのため将来的に調査区がさらに分断され、調査に支障をきたす恐れがあることから、迂回路部分と用地内のそれに隣接する以北部分の調査をまとめて行うことにした（A区西(1)・A区東(1)・旧C区）。なお、A区東(1)と旧C区の間については確認調査の結果、天地返しがおこなわれていたため、調査から除外した。また前回の調査を踏まえ、当時確認例が少ない炉穴の調査に重点を置いた。

平成9年度からは、調査体制を再編し、4月まで前述した部分の調査を行い、5月よりその南側部分（A区西(2)・A区東(2)）及び市道小路一佐土原線に接する南側丘陵部分（旧B区）、11月から用地にかかるその市道部分（旧H区）の調査を順次行った。

またA区より谷を2つ挟んだ南西側丘陵（西ヶ迫遺跡、旧西ヶ迫・黒貫遺跡）の買収が完了したのを受け、確認調査を行っている。確認調査では丘陵端部およびその南に延びる丘陵緩斜面に縄文時代早期の遺構・遺物が確認され、別府原遺跡と並行して本調査を行うことになった。

本調査は工事の進捗に合わせ、2回に分けて調査を行っている。第1次調査は平成9年4月16日から5月9日まで丘陵緩斜面東側部分（旧D区）および南側部分（旧E区(1)）、第2次調査を平成9年6月9日から7月20日まで丘陵緩斜面南側部分（旧E区(2)）と丘陵端部（旧F区）の範囲をそれぞれ行った。

6月には公団より、工事の進展上、計画の一部を変更してA区の北西約200m先に位置する北西側丘陵端部に新たに工事用道路を建設することから、文化財の有無についての照会がなされた。遺跡詳細分布地図上²⁾では遺跡の範囲に含まれていなかったが、周辺で遺物が表採されているため確認調査を行うことになり、平成9年6月26日に実施した。確認調査は2ヶ所にトレンチを設定し、重機により表土を剥がした後、人力で掘り下げを行った。

その結果、そのうち1ヶ所（トレンチ1）より縄文時代早期の集石遺構が確認されたことから、公団と協議を行い、そのまま本調査に入ることになった。対象範囲が狭いことから、排土を置くスペースがあまり確保出来ないため、2回に分けて調査することにし、一旦、トレンチ2を埋め戻してからトレンチ1を含む南側を調査区（旧G区）に設定した。

調査は層ごとに掘り下げを行い、Ⅷ層の暗褐色土（旧石器包含層）の調査が終わった段階で、公団から再度、工事変更の要請があったために、同年7月2日に終了した。

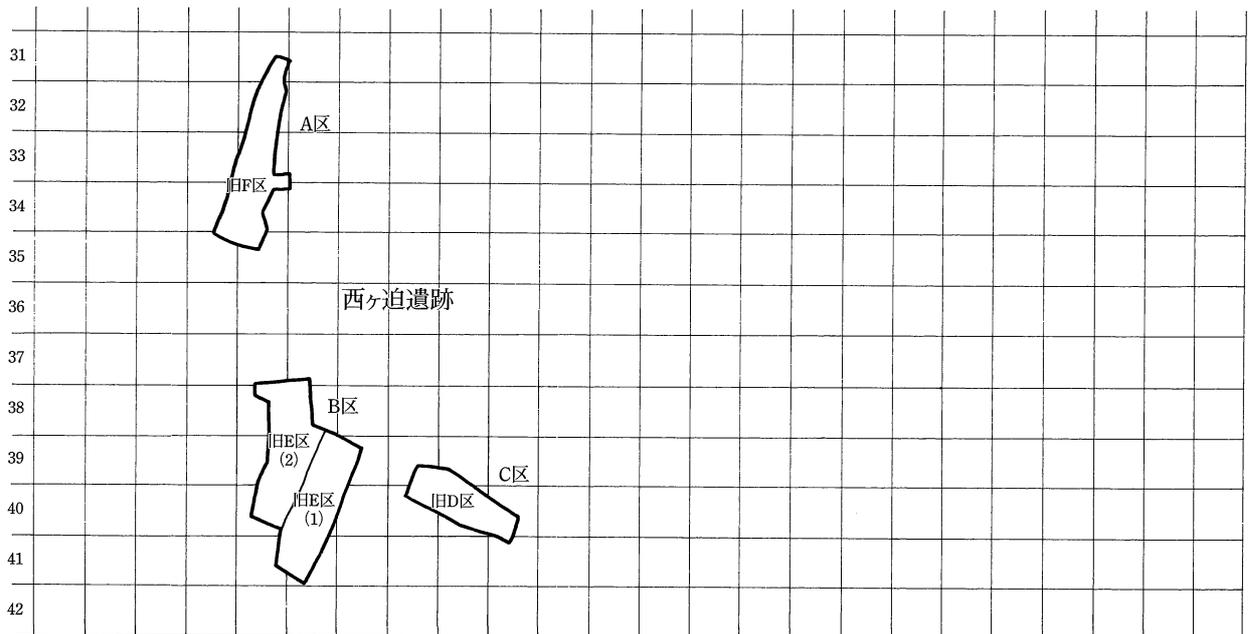
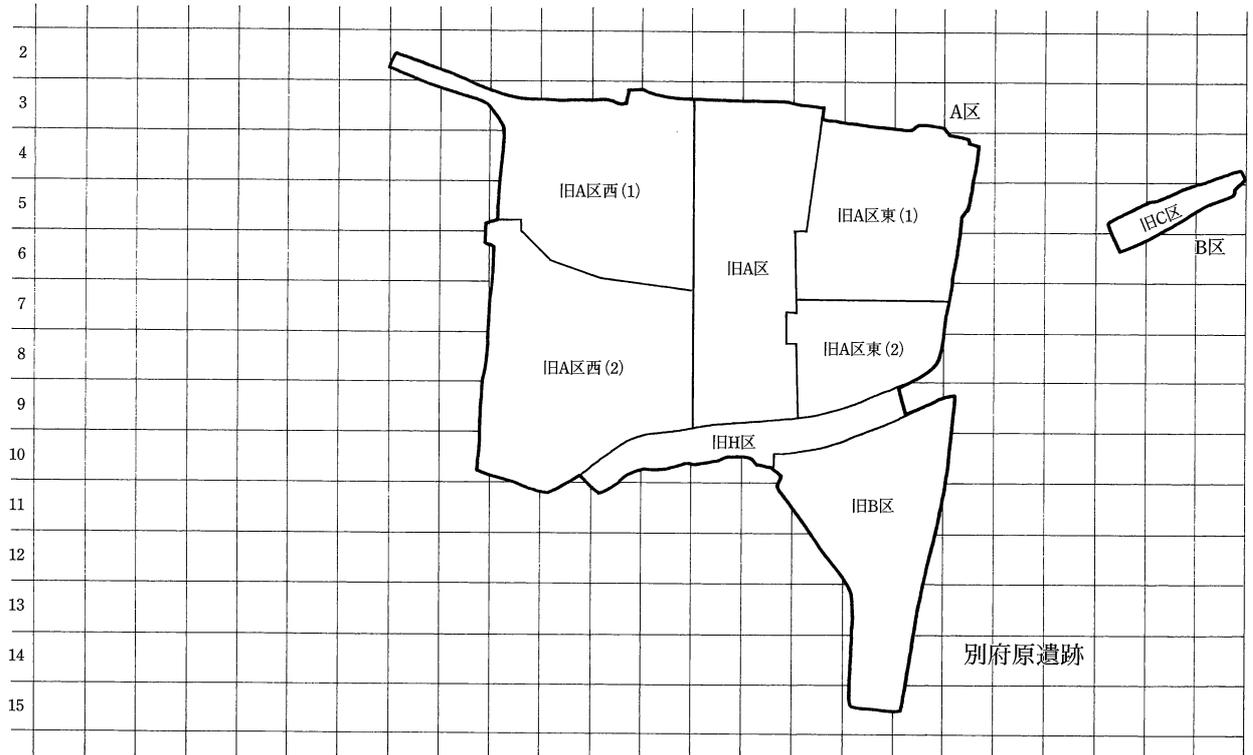
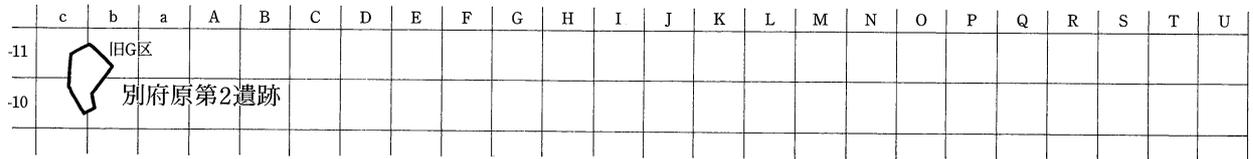
平成9年12月8日には、調査範囲すべてが完了した。その後の整理で、遺跡名については基本的に小字名を用いることにし、「西ヶ迫・黒貫遺跡」については宮崎県佐土原町大字上田島字西ヶ迫に所在することから「西ヶ迫遺跡」とし、調査中に使用していた調査区（旧D～F区）をA区～C区に変更した。また「山内・桜原遺跡」では西都市大字鹿野田字別府原から宮崎県佐土原町大字上田島字西ヶ迫までを含むが、遺跡の中心と調査区の大半が別府原に含まれることから「別府原遺跡」に変更し、旧A区・旧A区西・旧A区東・旧B区・旧H区をA区にまとめ、旧C区をB区とした。なお、旧G区は西都市大字鹿野田字別府原に所在するため、概要報告書時³⁾には「別府原遺跡」に含めたが、西側丘陵部に遺跡が含まれることから、それとは区別し、「別府原第2遺跡」と名称を変更している。

(註)

- 1) 西都市教育委員会1997「平成8年度 西都原古墳研究所・年報」第13号
- 2) 宮崎県教育委員会1992「東九州自動車道関連遺跡詳細分布調査報告書(西都～清武間)」
- 3) 宮崎県埋蔵文化財センター1998「平成9年度 東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書〔(西都～清武)〕」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第12集」

第1表 調査工程表

遺跡名	地区名	旧地区名	平成7年		平成8年															
			8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
別府原	A	A	8/26.....12/26																	
		A東(1)	1/7.....4/30																	
		A西(1)	1/23.....4/30																	
		A東(2)	4/21.....8/7																	
		A西(2)	5/12.....10/27																	
		B	4/24.....10/31																	
		H	11/10.....12/8																	
B	C	2/13.....4/25																		
西ヶ迫	B	F	6/9.....7/20																	
		E(1)	4/24.....5/9																	
		E(2)	6/9.....7/20																	
C	D	4/16...4/23																		
別府原第2		G	6/26...7/2																	



第3図 調査区配置図 [S=1/1,500]

第Ⅱ章 別府原遺跡

第1節 調査の概要

別府原遺跡は西都市大字鹿野田字別府原および宮崎郡佐土原町大字上田島字西ヶ迫に所在する。遺跡の立地する丘陵は、その北側で急崖となり、南にみられる複雑に入り込んだ開析谷と相応して、丘陵の北東側では狭隘な地形を呈している。丘陵上には北側(101.8m)と南西側(102.4m)の2ヶ所に微高地がみられ、そのうちの北側微高地上に遺跡が立地している。また谷下には湧水点がいくつか見ることができ、遺跡の立地条件を満たしている(第2図)。

調査はA区およびB区の2地区を行い、そのうちA区については第1章第4節でも触れているとおり、工事の兼ね合い等の問題よりさらに7分割して調査を行っている。調査の結果、旧石器時代が3時期と縄文時代早期の合計4枚の文化層を確認した。以下、時期別に概要を説明していきたい。

第1石器群ではⅩ層上位～中位において、A区G10・H9～10・I9グリッド等で礫群5基とともに二次加工剥片や剥片、碎片、石核等約80点が確認されている。

第2石器群ではA区のⅦ層において礫群14基、配石遺構1基、ブロックが7ヶ所で確認されている。そのうちブロックについてはさらに細分される可能性がある。遺物はナイフ形石器や三稜尖頭器、スクレイパー、斧形石器、二次加工剥片、剥片、碎片、石核、敲石、台石等が出土している。



第4図 別府原遺跡 層別の調査範囲 [S=1/1,200]

第3石器群ではA区においてVIa層～VIb層にかけて陥し穴状遺構18基、土坑4基、礫群1基、配石遺構2基が確認されている。遺物は細石刃や細石核、スクレイパー、二次加工剥片、石核等が確認されている。

縄文時代早期では、A・B区あわせて竪穴2基、土坑63基、配石土坑12基、集石遺構48基、配石遺構11基、炉穴307基、ピット等が確認されている。遺物は貝殻条痕文土器とともに打製石鏃や磨製石鏃、尖頭器、楔形石器、打製石斧や局部磨製石斧、礫器等が出土している。

その他、中近世では近世の道路状遺構を2条確認し、中世～近世の陶磁器等が遺構内および攪乱土中より出土している。また時期不明の遺構が竪穴1基、陥し穴状遺構1基が確認されている。

なお、旧石器時代については整理途中であり、遺構についても現在検討中のものも含まれるため概要報告書で用いた基数をそのまま使用している。別稿で報告する段階では多少の変動があることをご了承いただきたい。

第2節 遺跡の層序

本遺跡の層序は、宮崎平野部において比較的典型的な層序であり、鍵層としてⅢ層にアカホヤ火山灰層、Ⅵ層には霧島小林降下軽石風成二次堆積層、Ⅸ層では始良Tn火山灰層、Ⅻ層ではアワオコシスコリア層が確認されている。以下層ごとに説明していきたい(第5図)。

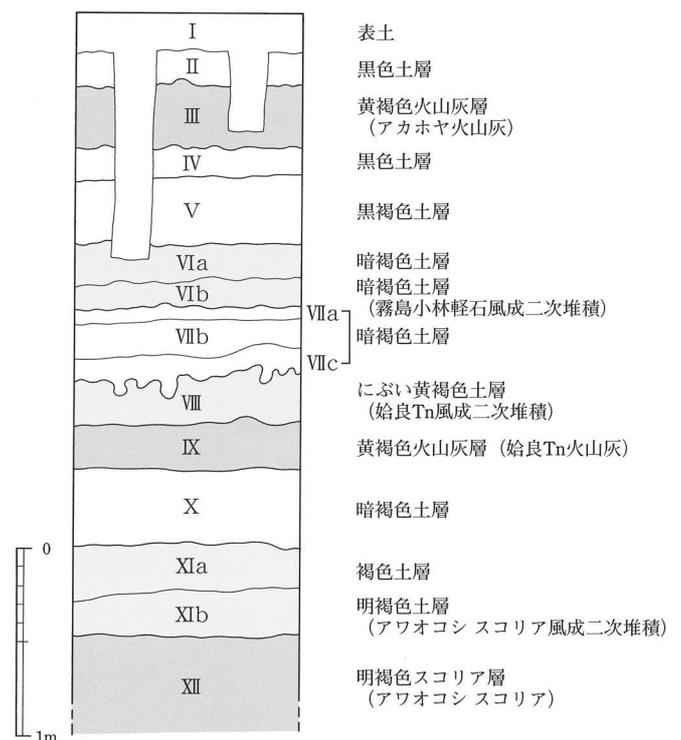
I層 表土・耕作土

Ⅱ層 黒色土層 細粒で粘性があり、部分的にⅢ層をブロック状に含有する部分も認められた。A区北西側(E2・3グリッド)や南東側(M・N11グリッドより以南)、B区の一部で確認されている。

Ⅲ層 黄褐色火山灰層 アカホヤ火山灰層。粒子が細かく、下部には火山豆石が確認されている。削平等によりA区中央および北西部分や南東側(M・N11グリッドより以南)、J・K9グリッド北側等の一部やB区で残存する。層厚は約30cmを測る。

Ⅳ層 黒色土層 やや硬質でしまりがあり、径0.1mm前後の白色粒等を含む。層下位で縄文時代早期の遺物が出土している。層厚は約10～15cmを測る。

Ⅴ層 黒褐色土層 やや硬質でしまりがある。径1mm前後の白色粒や灰褐色粒等を含む。また部分的に色調



第5図 別府原遺跡 基本層序 [S=1/40]

が明るくなる場所も認められた。焼礫や縄文時代早期の遺物を多量に包含する。約25～30cmの堆積が認められた。

Ⅵ層 暗褐色土層 霧島小林降下軽石の風成二次堆積層。軽石の含有量により2層(a・b)に分層でき、下層のほうが明るく、軽石の含有が多い。また非常に硬質でよく締まっている。Ⅵa層はほぼ全域で認められるのに対し、Ⅵb層は調査区南側傾斜地で堆積が薄くなり、ブロック状に堆積する部分もみられた。旧石器時代の遺物(第3石器群)をⅥa層～Ⅵb層上位で確認しているが、一部で縄文時代早期の遺物と混在する部分も認められる。層厚はⅥa層が約20cm、Ⅵb層が約5～15cmを測る。

Ⅶ層 暗褐色土層 水気を含み、粘性を帯びる。色調および土質により3層(a・b・c)に分層した。Ⅶa層は層厚が約10cmを測り、径1～2cm大の黒褐色土をブロック状に含む。またⅦb層は色調の違いにより斑状を呈し、層厚約20cmを測る。Ⅶc層は層厚が10cm程度で他の2層より色調が明るく軟質である。また部分的にⅧ層がブロック状に混入する。旧石器時代の遺物(第2石器群)が上層～下層にかけて確認されている。

Ⅷ層 にぶい黄褐色土層 ATの風成二次堆積層。粒子が粗く、斑状の模様が入る。N14～O14グリッド以外で認められ、30～40cm程度堆積している。一部で旧石器時代の遺物を包含する。

Ⅸ層 黄褐色火山灰層 始良Tn火山灰層である。L10～O11グリッドより以北で確認されているが、部分的にブロック状に堆積する部分もみられた。層厚約10～30cmを測る。

X層 暗褐色土層 白色粒を多量に含み、硬質でしまりがある。クラックが発達している。旧石器時代の遺物(第1石器群)が上位～中位にかけて確認されている。層厚は35～40cmを測る。

XI層 褐色～明褐色土層 アワオコシスコリアの風成二次堆積層。色調やスコリアの含有量により2層(a・b)に細分される。XIa層が約35cm、XIb層が約20cmを測る。

XII層 明褐色スコリア層 アワオコシスコリア層

第3節 調査の成果

今回の調査では旧石器時代～縄文時代早期、中・近世の遺構や遺物が確認されており、そのうち縄文時代早期の調査成果を中心に報告していきたい。また遺構については整理検討を行った際、名称の変更や概報段階で漏れていたものを新たに追加しているため、概報時のものと遺構の種類や基数に変動があることをご了承ください。

1. 縄文時代早期の遺構と遺物

(1) 遺構

縄文時代早期では、A・B区あわせて竪穴2基、土坑63基、配石土坑12基、集石遺構48基、配石遺構11基、炉穴307基、ピット等(B区：土坑2基、集石遺構3基、炉穴24基)が確認されている(第6図)。

竪穴(SA) (第7図、第2表)

竪穴はA区で2基確認されている。どちらもⅥb層上面で検出し、SA1は調査区中央の最高所より

南東側平坦地（J7・K7グリッド）、SA2は調査区南側の急な傾斜部分（M11グリッド）にそれぞれ位置する。どちらも土坑や炉穴に切られているが、SA1は $3.75\text{m} + \alpha \times 2.70\text{m}$ 、SA2は $2.90\text{m} + \alpha \times 2.15\text{m} + \alpha$ とどちらも隅丸長方形プランになると考えられる。そのうちSA1では柱穴が認められないが中央床面に炉跡と考えられる赤変部分がみられ、またSA2では床面に柱穴が認められる。どちらも遺物の出土はみられない。

土坑（SC）（第8～10図、第2表）

土坑はA・B区あわせて63基（うち、B区2基）確認され、一部を除き、主にV層下位～VIb層上面で検出している。その分布には調査区の北西側（G3・G4グリッド付近）や西側（G7～I7グリッド付近）、南西側（G9～I9・G10付近）等でまとまりをみせる。ここでは紙面の都合により、そのうちの34基について図を掲載している。

土坑には幾つかの形態がみられ、円形を呈するもの（SC59等）や楕円形を呈するもの（SC42等）、長楕円形（SC53等）、隅丸長方形（SC47等）等が認められる。その中には比較的大型でSC45～47・49～51・53・54のように長径が2mを超えるものやSC51のように3mを超えるものが認められ、竪穴に含めてもよいものも認められるが柱穴や炉跡等が確認されていないため、ここでは土坑に含めた。

また土坑にはSC22・23・25・55のように土坑の一端にピットをもつものも確認されている。いずれも楕円形を呈し、全長1m規模を測る。時期は異なるが類例として、滑川第1遺跡や山田第2遺跡（ともに清武町）等で確認されている。

配石土坑（SC）（第11～12図、第2表）

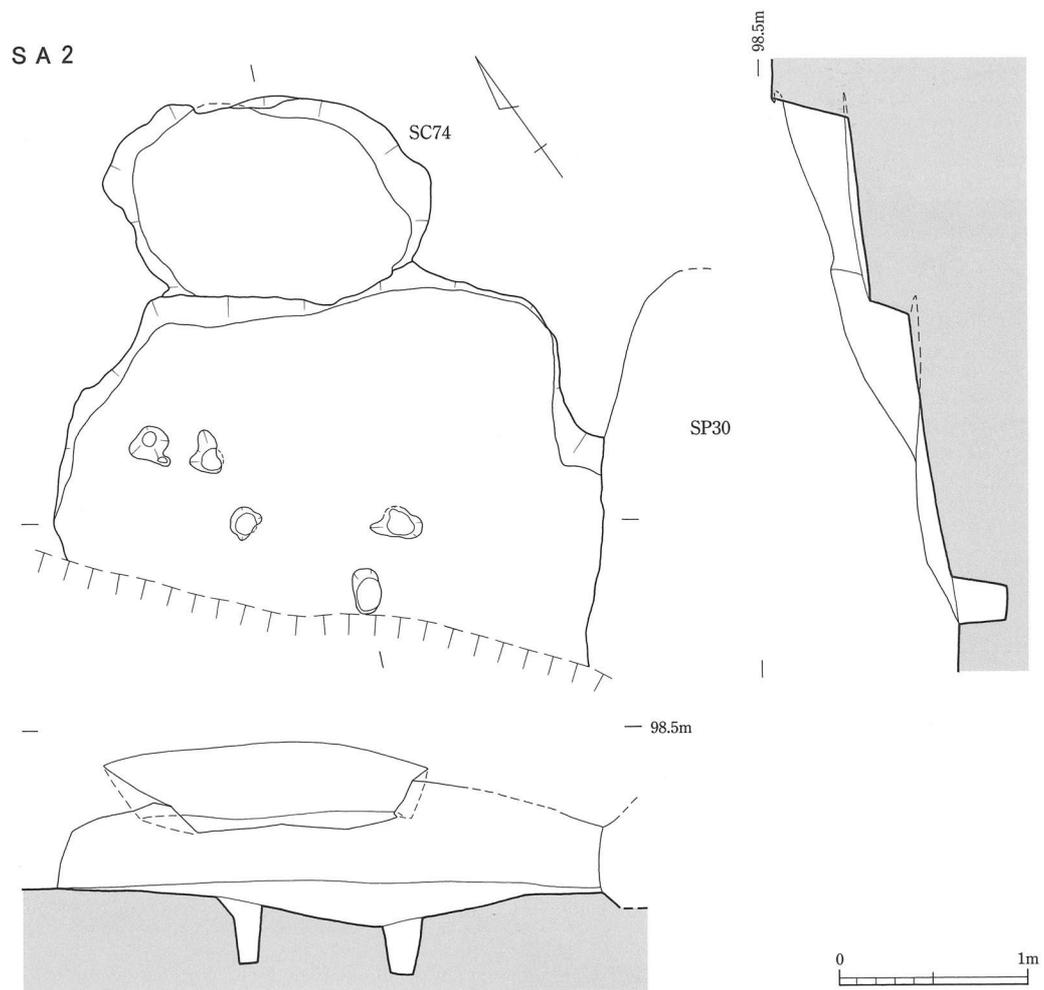
配石土坑はA区で12基（SC38・39・43・60～68）確認されている。多くは地山と埋土の区別が明瞭に判別できなかったため、結果的に配石のみ確認したものもあった。そのため、それらについては石の配列で掘り込みの可能性があるものも、本項に含めた。

分布をみるとSC60～63・65～67の約半数が調査区南西側に位置し、そのうちSC61・62・65・67はG10～H10グリッドでまとまって確認されている。土坑は全長0.72～1.48mの楕円形を呈するが、そのうちSC68の底面には3段のテラスをもつ。また深さは10～64cmを測るが、浅いものについては検出面が低かったため、本来はもう少し深さがあったものと考えられる。遺物はSC65の配石上で土器片や石核・剥片が、またSC68では埋土中位で剥片がそれぞれ出土している。

これらの多くには10～15cm程度の比較的大形の扁平礫（自然礫）を使用して、底面に水平になるように敷き詰められており、その特殊性から墓等の可能性も考えられるが、人骨や副葬品などが認められないことや規模も全長0.72～1.48m・幅0.4～0.89mと小型のものが多いため、検討を要する。

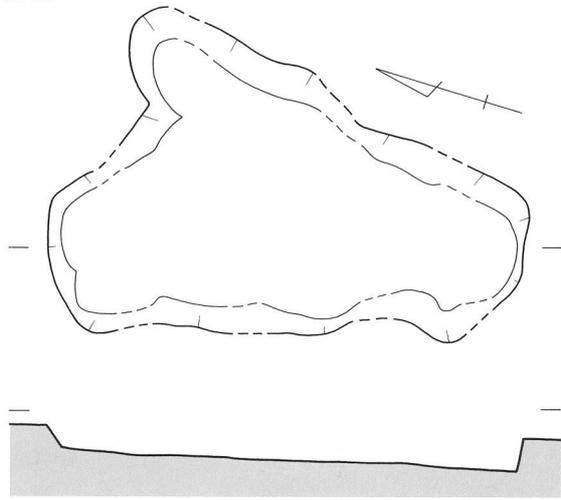


第6図 別府原遺跡 縄文時代早期遺構分布図〔S=1/500〕及び礫分布図〔S=1/1,500〕

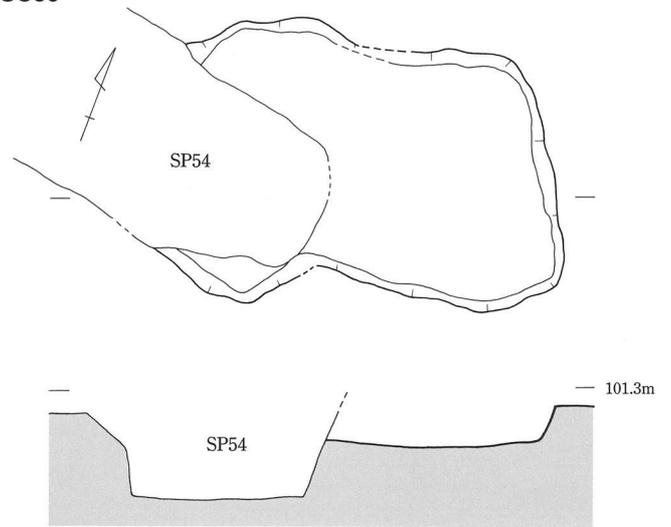


第7図 別府原遺跡 竪穴 (SA) 実測図 [S=1/40]

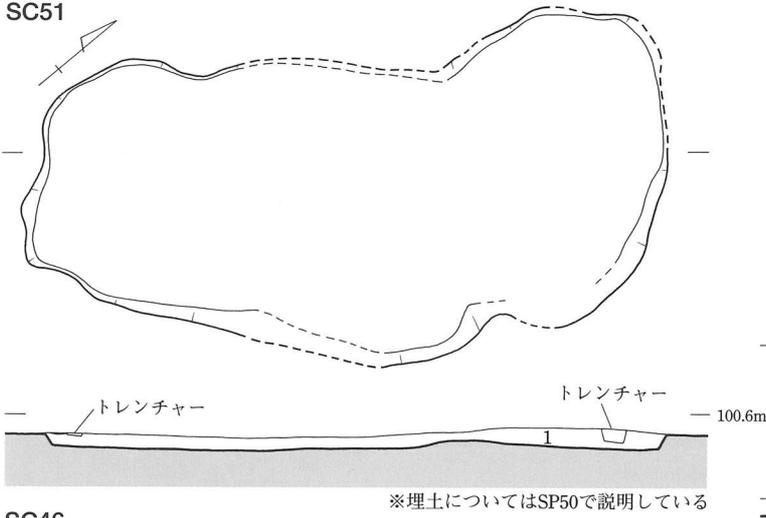
SC49



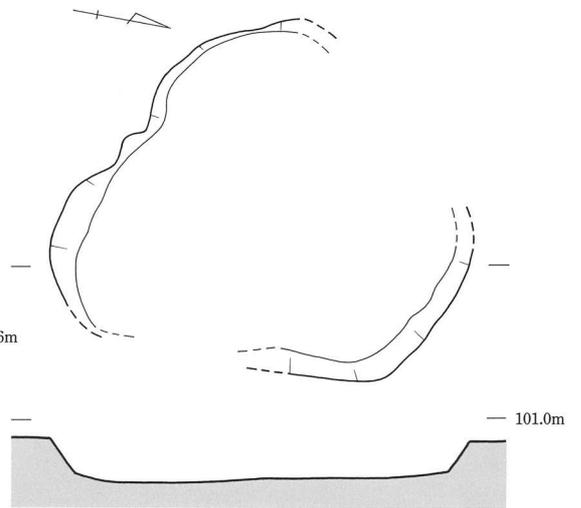
SC50



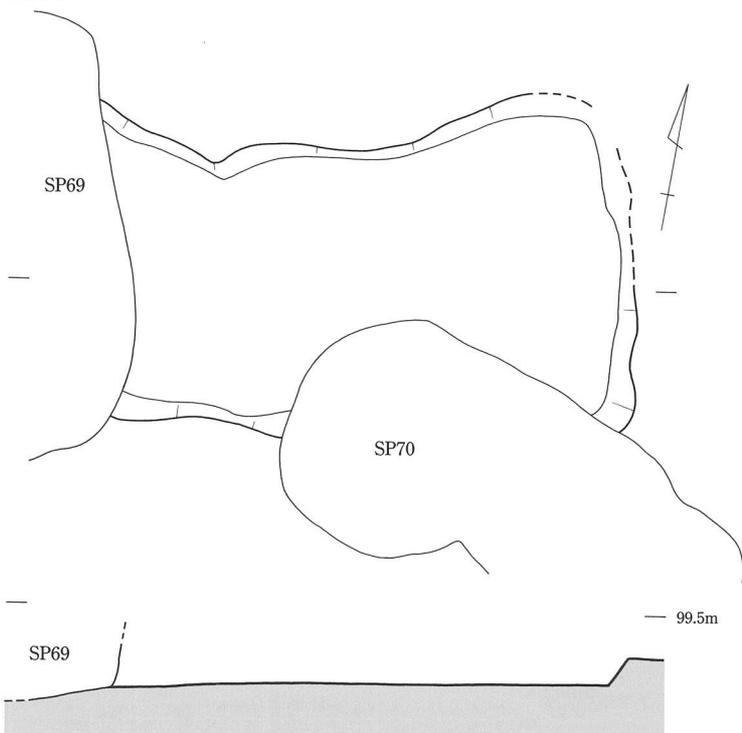
SC51



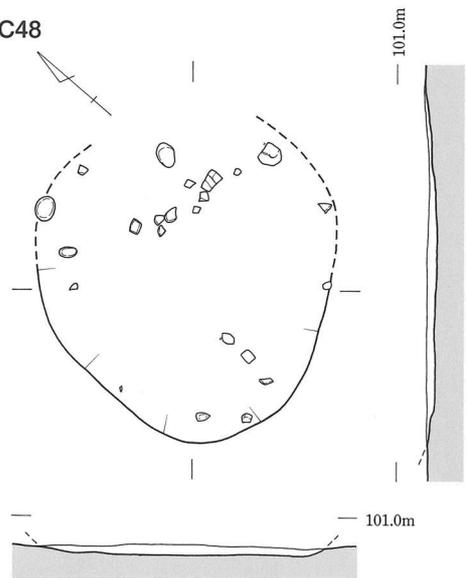
SC45



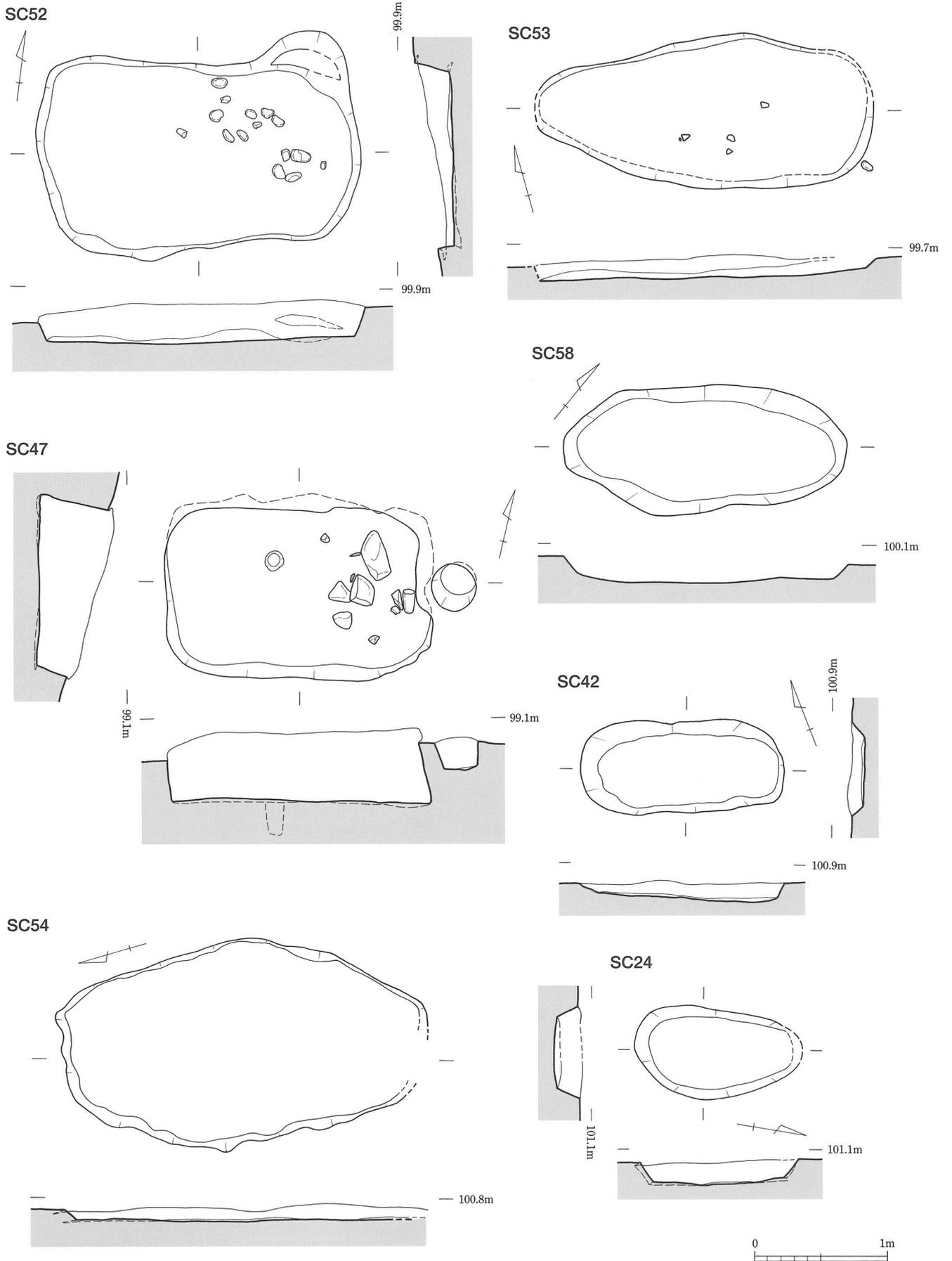
SC46



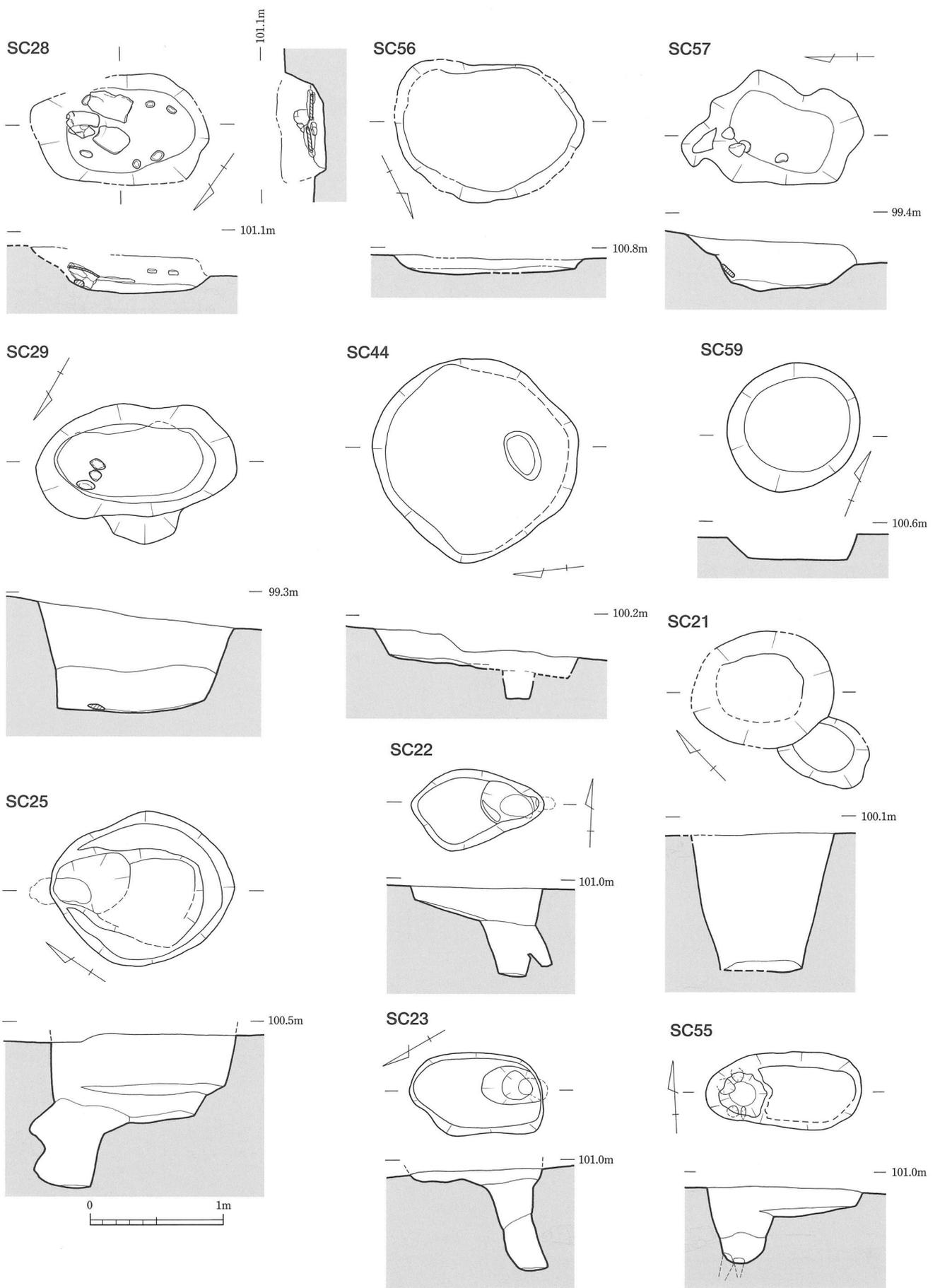
SC48



第8図 別府原遺跡 土坑(SC)実測図(1) [S=1/40]

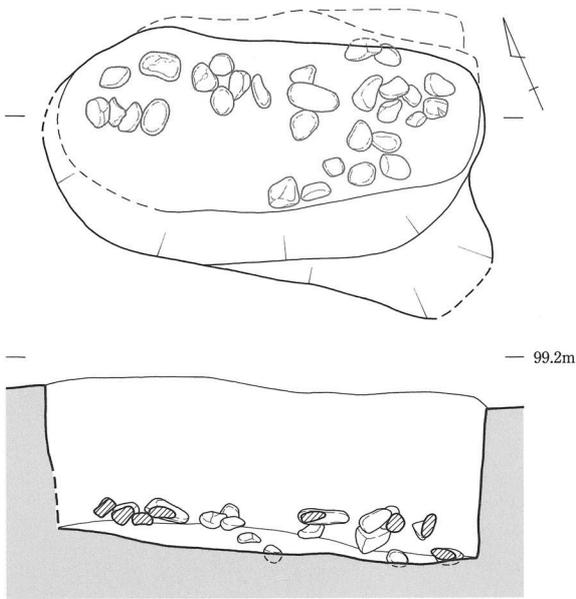


第9図 別府原遺跡 土坑(SC)実測図(2) [S=1/40]

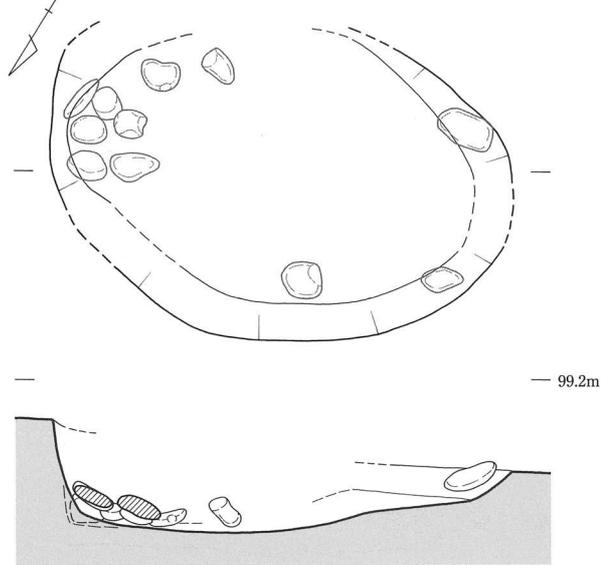


第10図 別府原遺跡 土坑(SC)実測図(3) [S=1/40]

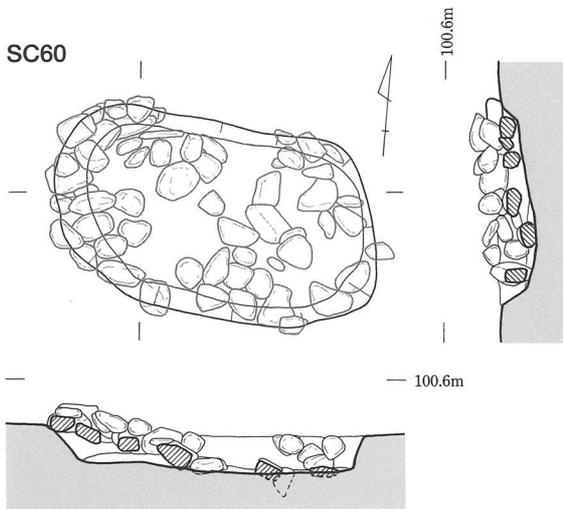
SC43



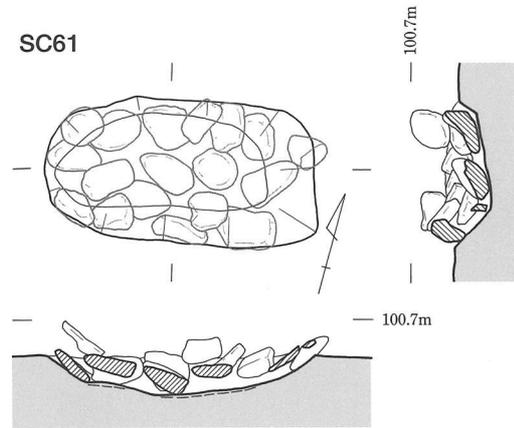
SC38



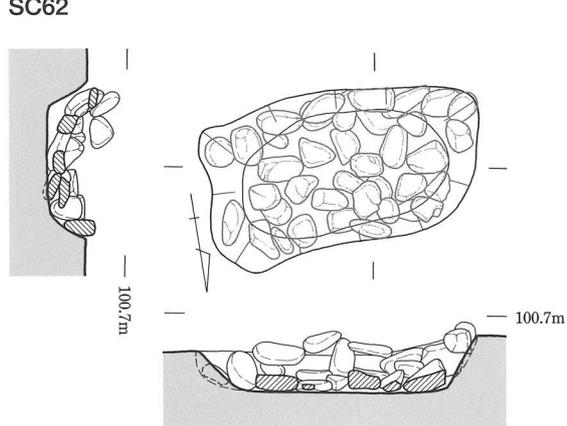
SC60



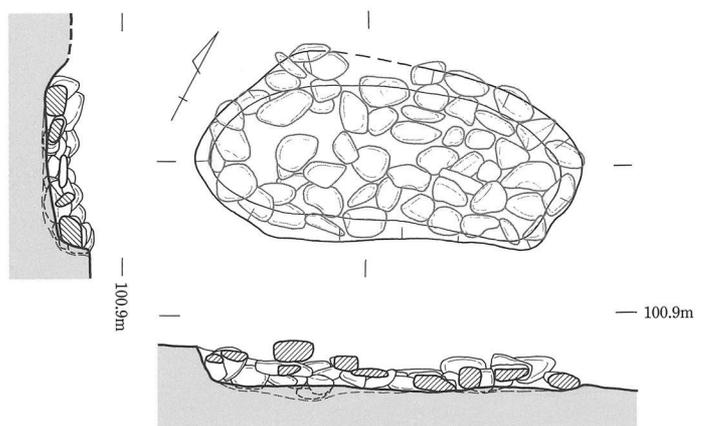
SC61



SC62

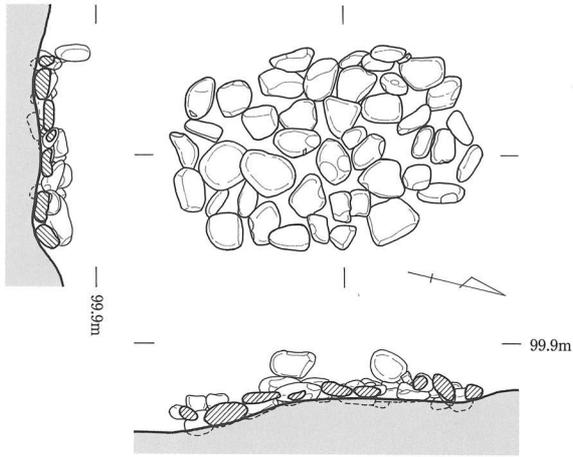


SC63

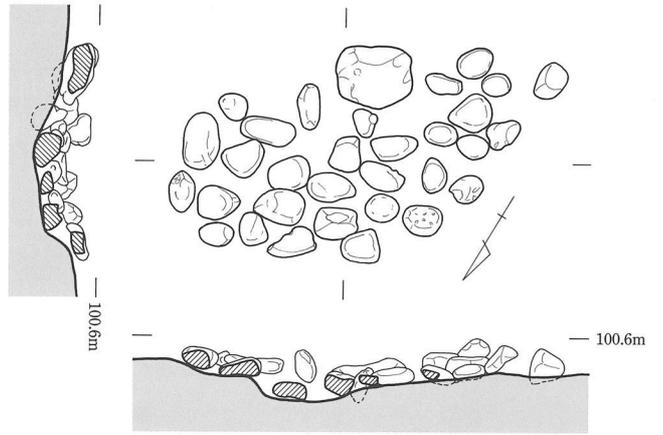


第11図 別府原遺跡 配石土坑(SC)実測図(1) [S=1/20]

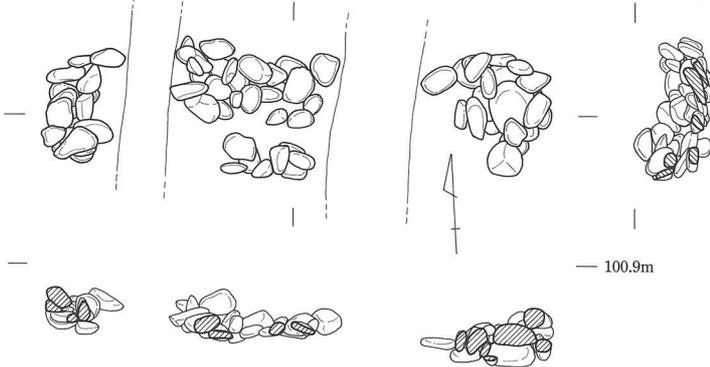
SC64



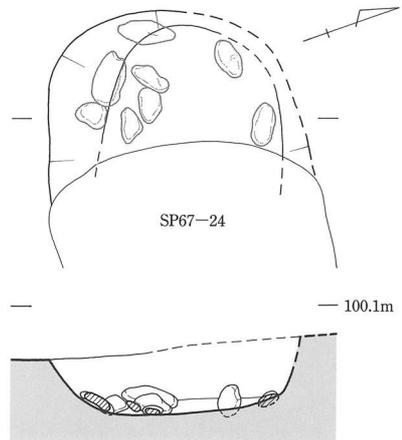
SC65



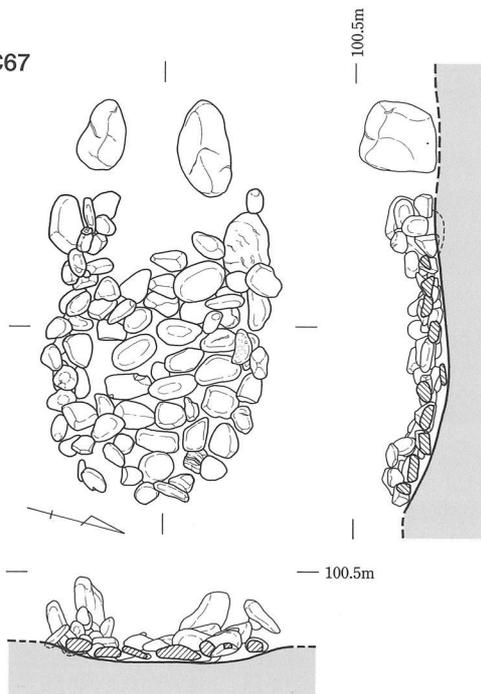
SC66



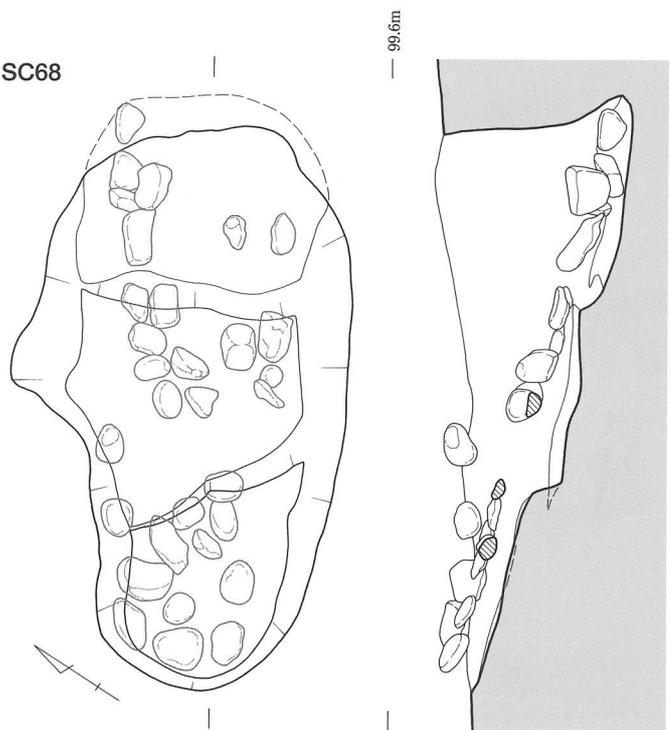
SC39



SC67



SC68



第12図 別府原遺跡 配石土坑 (SC) 実測図 (2) [S=1/20]

集石遺構（S I）（第13～20図）

集石遺構はA・B区合わせて48基（うち、B区3基）が確認され、主にV層下位～VIa層上面で検出している。その分布をみるとA区中央の最高所を取り囲むように傾斜のあまりない平坦部に構築され、そのうちの約7割が最高所より北側から西側にかけて分布する。反対に最高所より南西側にはほとんどみられず、わずかに数基が確認されている程度である。また7基（SI48～50・58・60・70・87）については炉穴や土坑と切り合いがみられ、いずれもそれらが自然埋没した後、その上で構築されている。集石遺構は掘り込みの有無により大別でき、礫の配置および密集度、礫の状態により以下のように分類できる。

I類は掘り込みを有し、敷石状に石を配するものでS I 32が該当する。約0.4m規模の小型の土坑内に約10～20cm大の完形に近い礫で構成されている。

II類は掘り込みを有し、礫が密集するもので17基（S I 26等）が確認されている。掘り込みは円形にちかいもの（S I 41等）や楕円形のもの（S I 53等）がみられ、規模はS I 49のように約1.8m（深さ12cm）を測る大型のものも認められるが、ほとんどが0.5～1mの範囲（0.7m規模が多く認められる）に含まれる。深さは7～21cm（平均13cm）を測り、なかにはS I 39等のように皿状のものも認められる。遺構を構成する礫は破碎礫の割合が高いが、S I 41・67等のように完形に近い礫の割合が高いものもある。

III類は掘り込みを有し、礫があまり密集しないものでS I 52・89の2基がみられる。

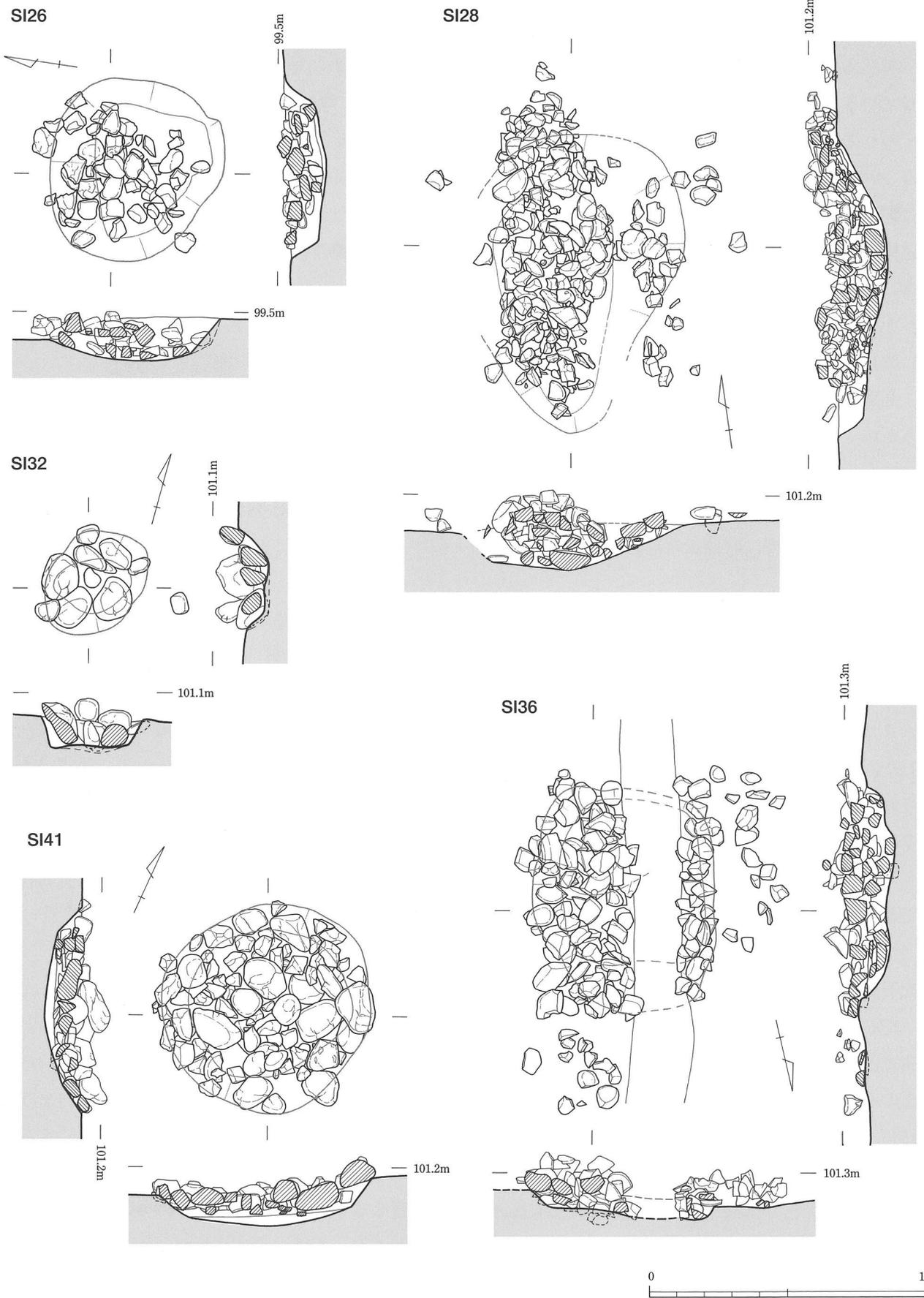
IV類は掘り込みをもたず、構成する礫が密集するもので21基（S I 29等）が該当し、中央に大型の礫を配し、周辺に小型の礫で構成されるもの（S I 27・63）等が認められる。

また上記の特徴をもつが、赤変（被熱）がみられない一群（S I 55・72・75）も認められ、IV類とした。これらは約40～70cmの範囲に礫が密集する。その多くが配石遺構や配石土坑が集中する範囲のみみられ、他の集石遺構と分布が異なることから、それらに含まれる可能性も考えられるが、使用されている礫に小形のもの（5～10cm）が多いため、ここではいわゆる「準備」礫の可能性を考えて含めた。

V類は掘り込みをもたず、構成する礫が散在を呈するもので4基（S I 31・34・40・59）が確認されており、そのうちS I 31・34・59は礫の大半を破碎礫で占める。

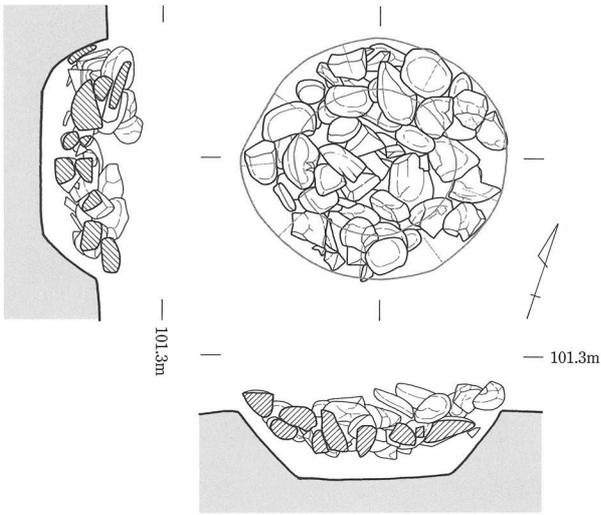
配石遺構（S I）（第20～21図）

配石遺構はA区で11基（S I 24・25・61・62・68・74・76・79・85・90・91）が確認され、約半数が調査区南西側の比較的平坦な地形に分布する。比較的大型で扁平な礫（完形の自然礫）を使用しているものが多く、環状（S I 68等）や弧状に巡るもの（S I 61等）等が認められる。なかにはS I 85のような15～30cm大の厚みのある大型礫を配置しているものもみられた。また構成礫の一部には赤変が薄く入るものも認められるが、そのうちS I 76・79の礫について熱ルミネッセンス法で分析した結果、加熱されていない可能性が指摘されている。また調査区南西側に位置するS I 74・76・79・91については配石土坑の近くに立地しているため、それらとの関連性も考えられるが、土坑が確認されていないことや礫が密に配置していないこと等から本項に含めた。

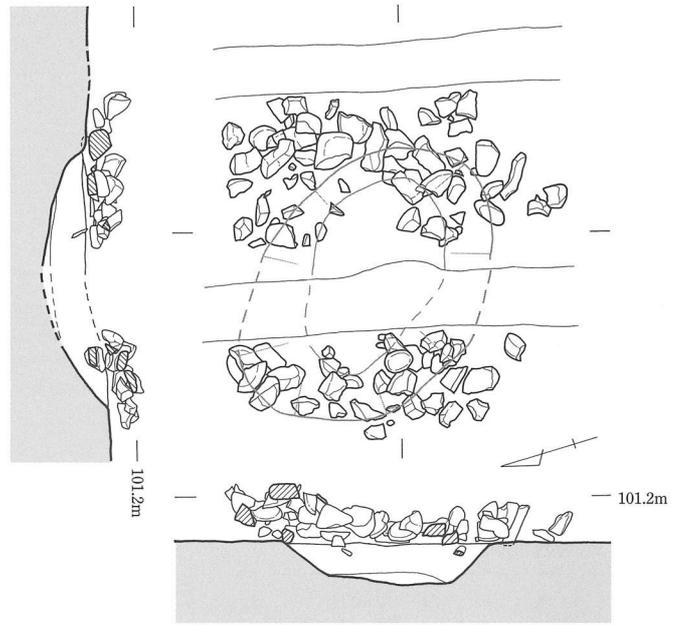


第13図 別府原遺跡 集石遺構(SI)実測図(1) [S=1/20]

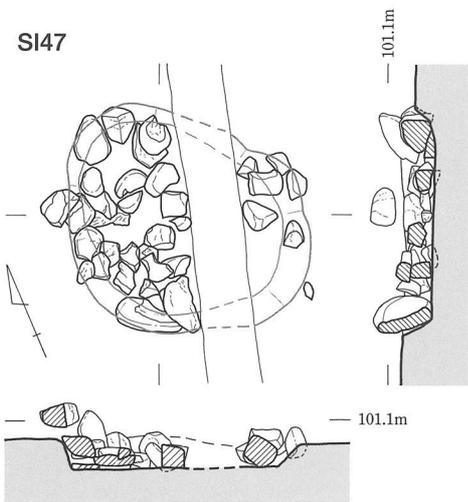
SI42



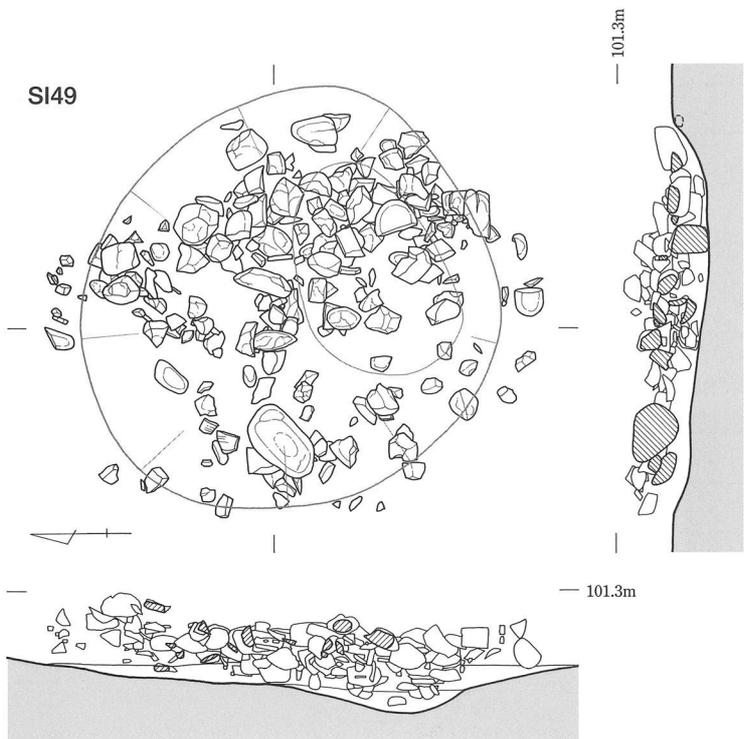
SI44



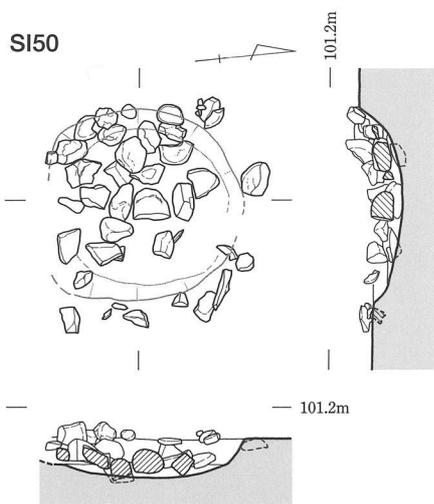
SI47



SI49

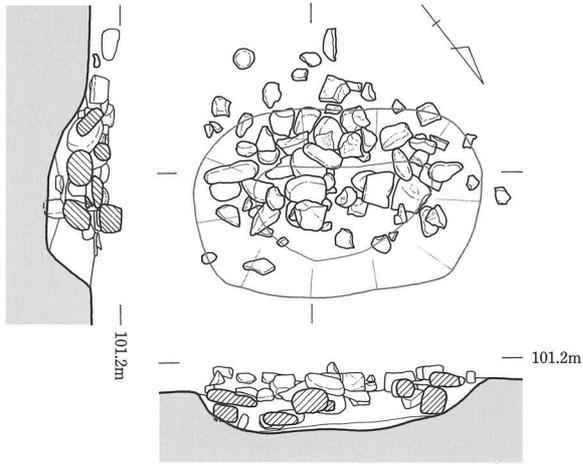


SI50

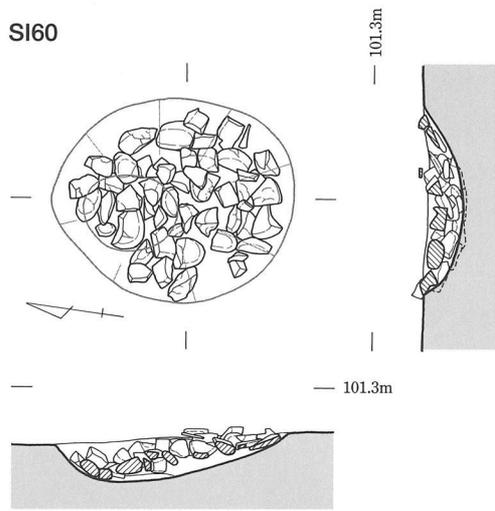


第14図 別府原遺跡 集石遺構(SI)実測図(2) [S=1/20]

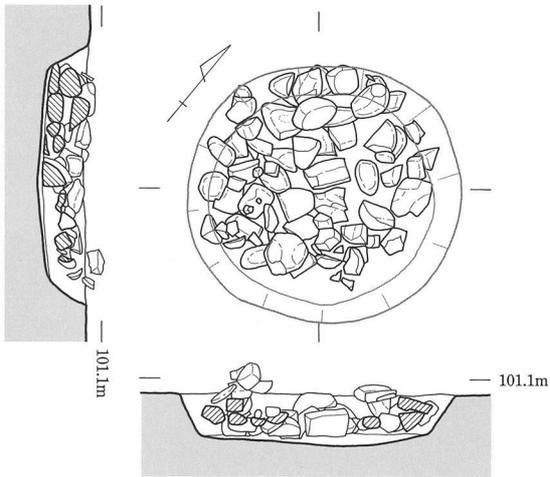
SI53



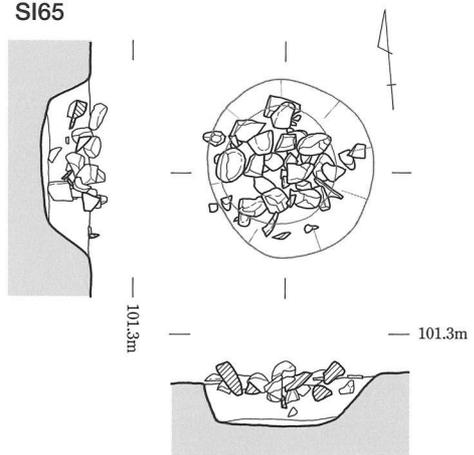
SI60



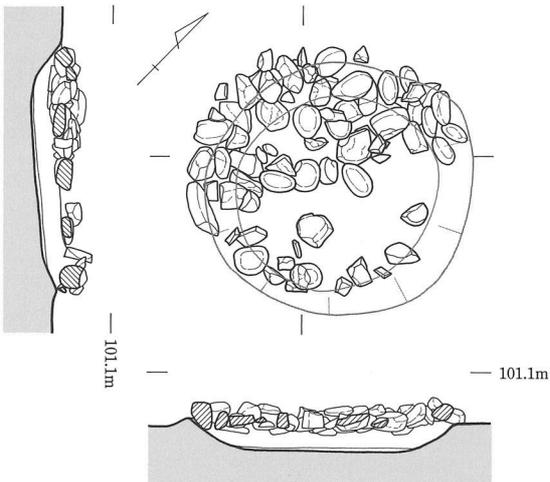
SI64



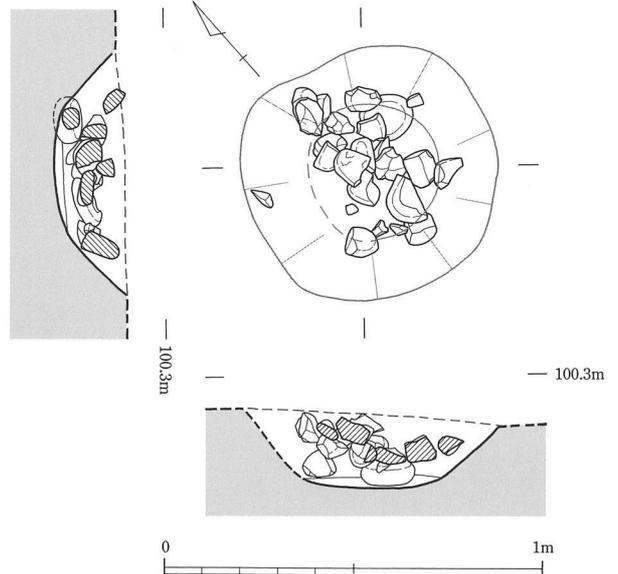
SI65



SI67

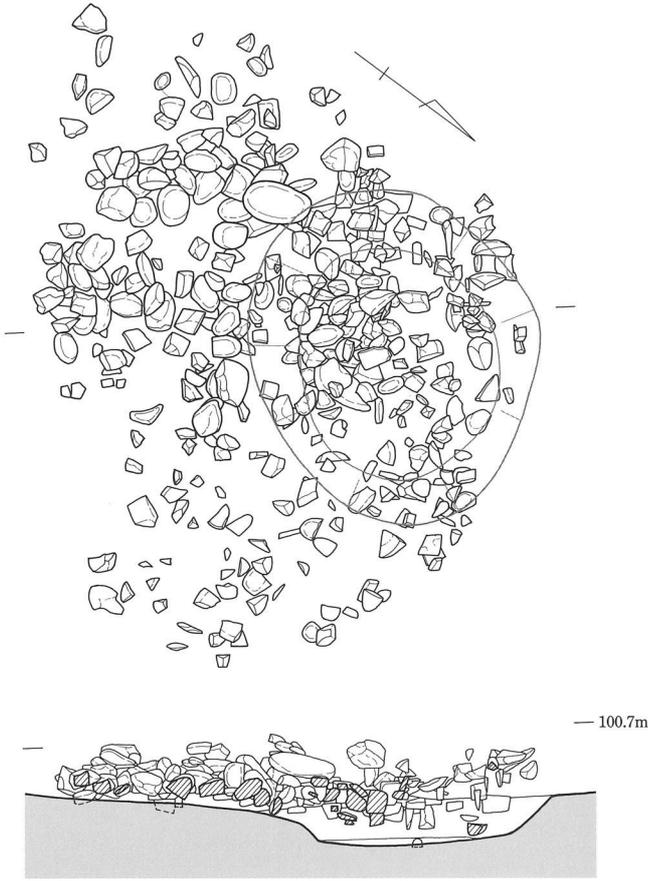


SI89



第15図 別府原遺跡 集石遺構(SI)実測図(3) [S=1/20]

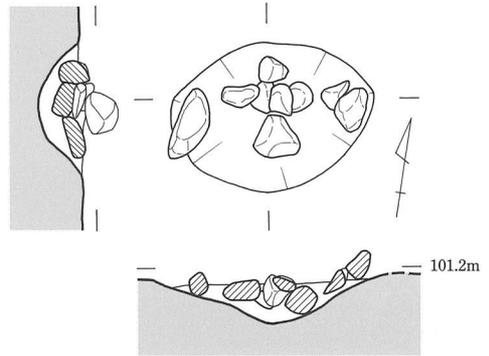
SI87



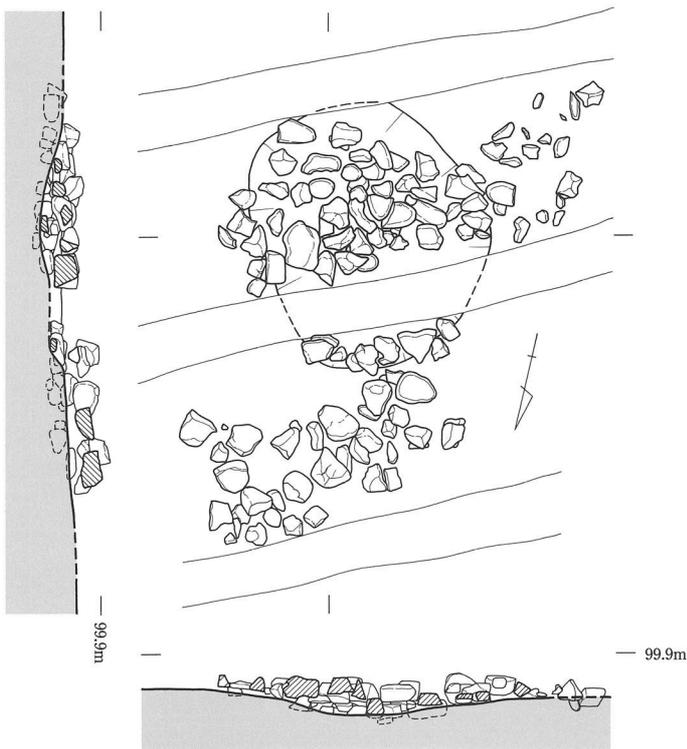
SI39



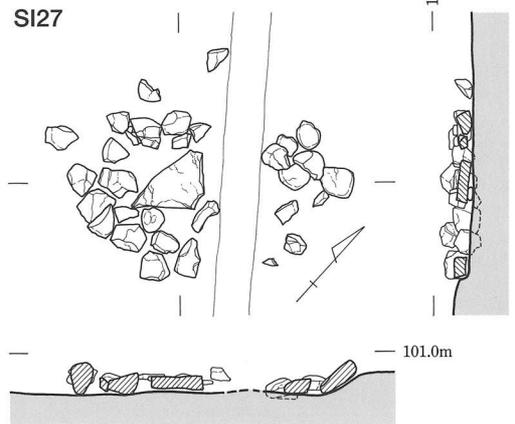
SI52



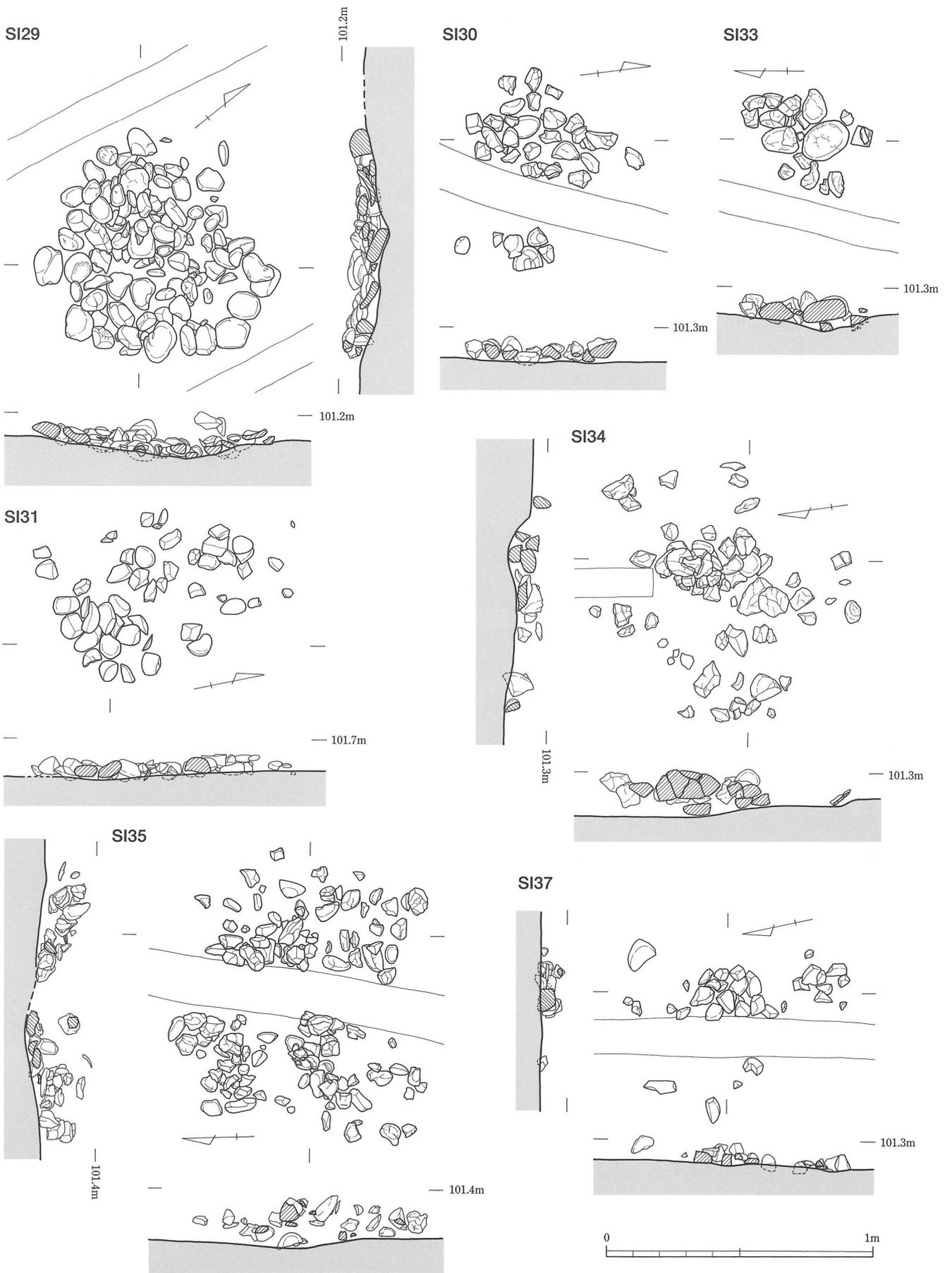
SI70



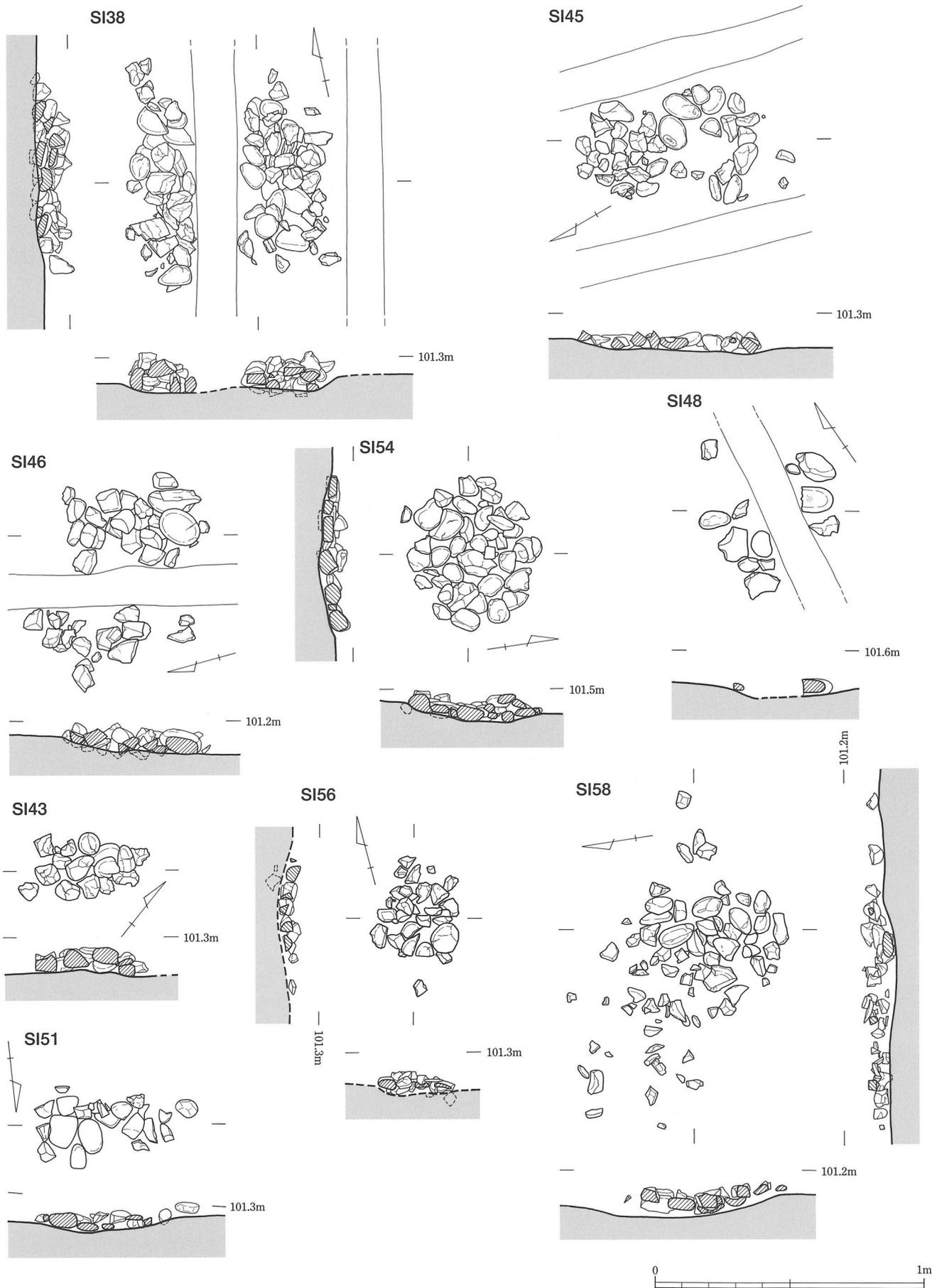
SI27



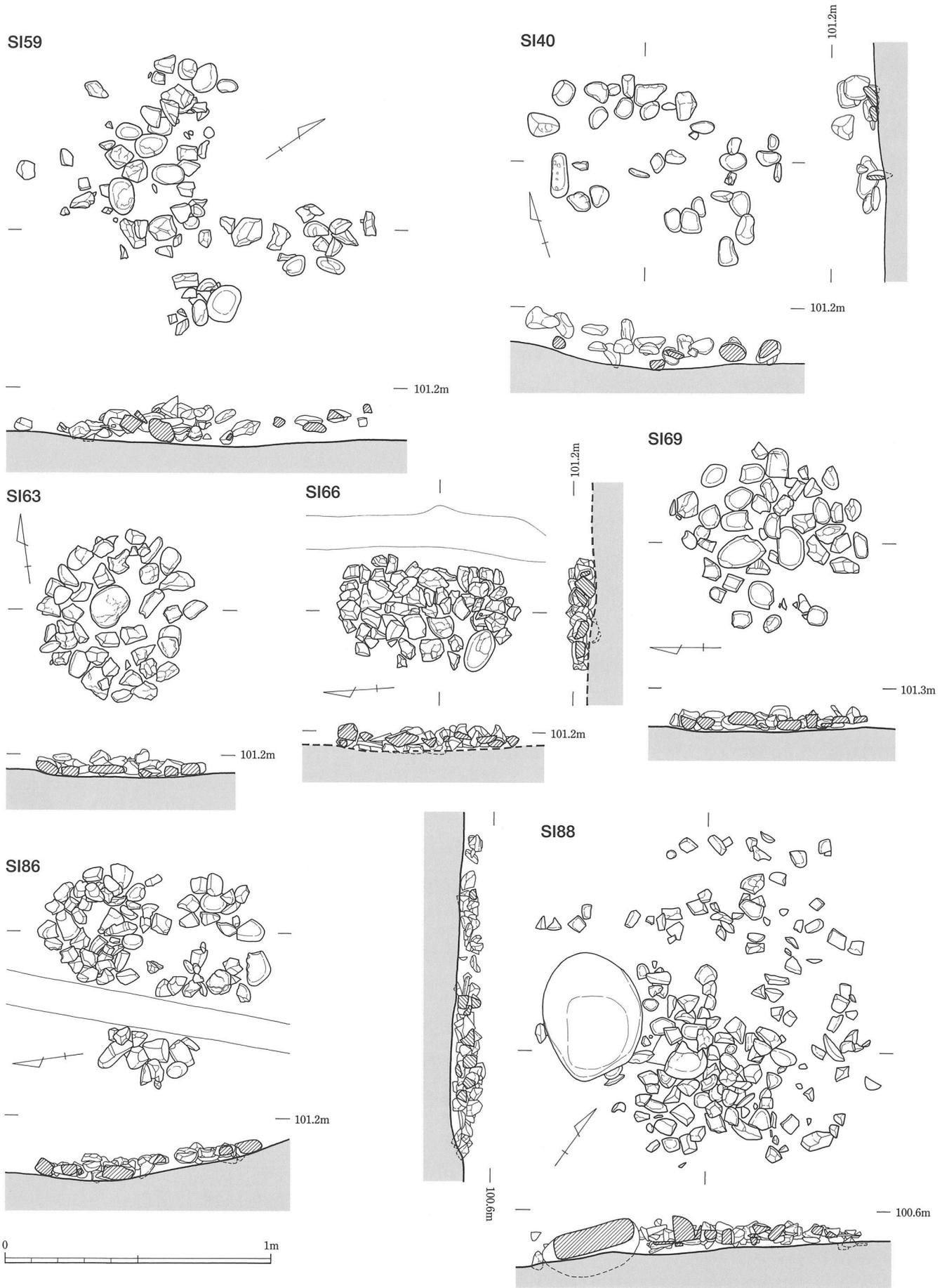
第16図 別府原遺跡 集石遺構(SI)実測図(4) [S=1/20]



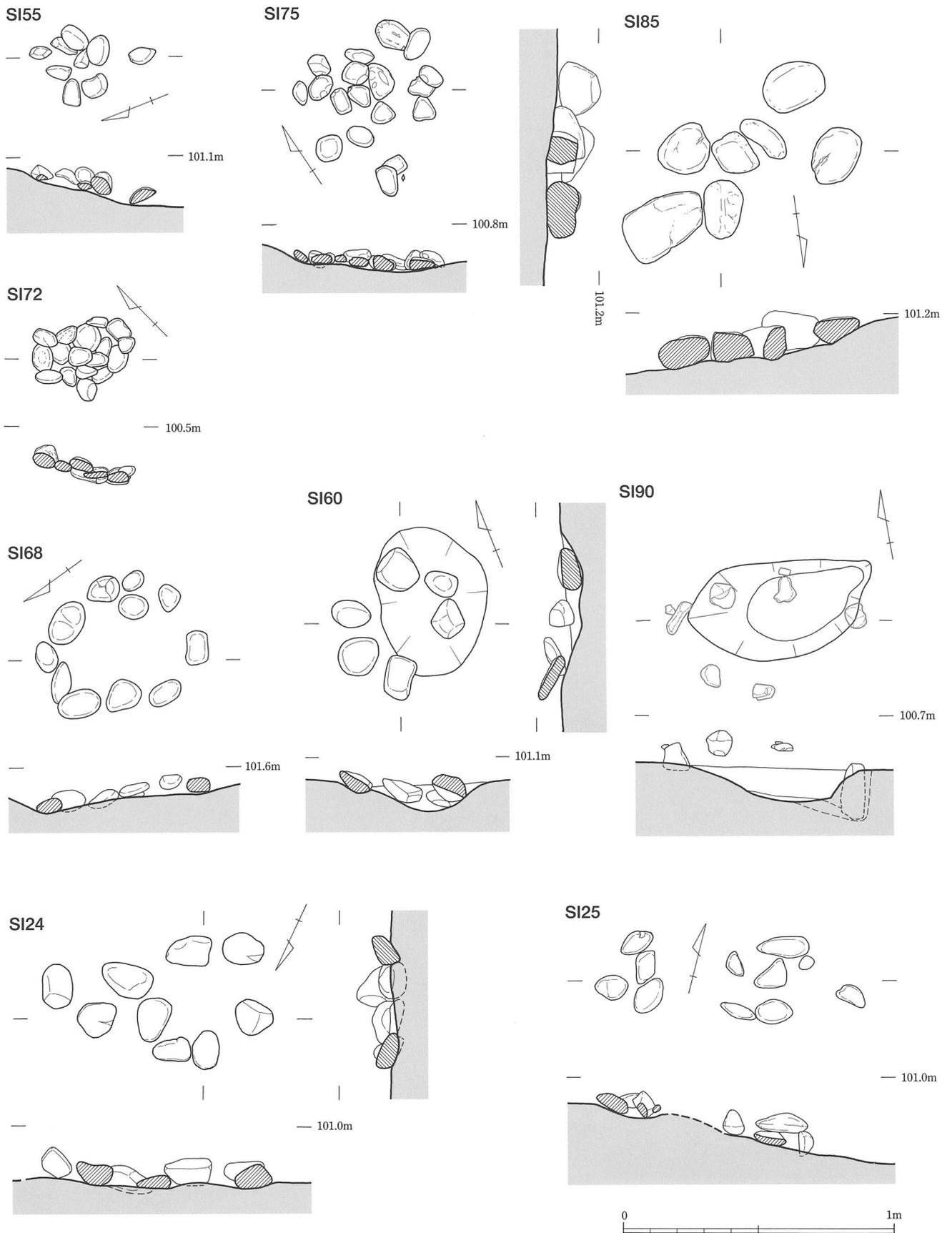
第17図 別府原遺跡 集石遺構(SI)実測図(5) [S=1/20]



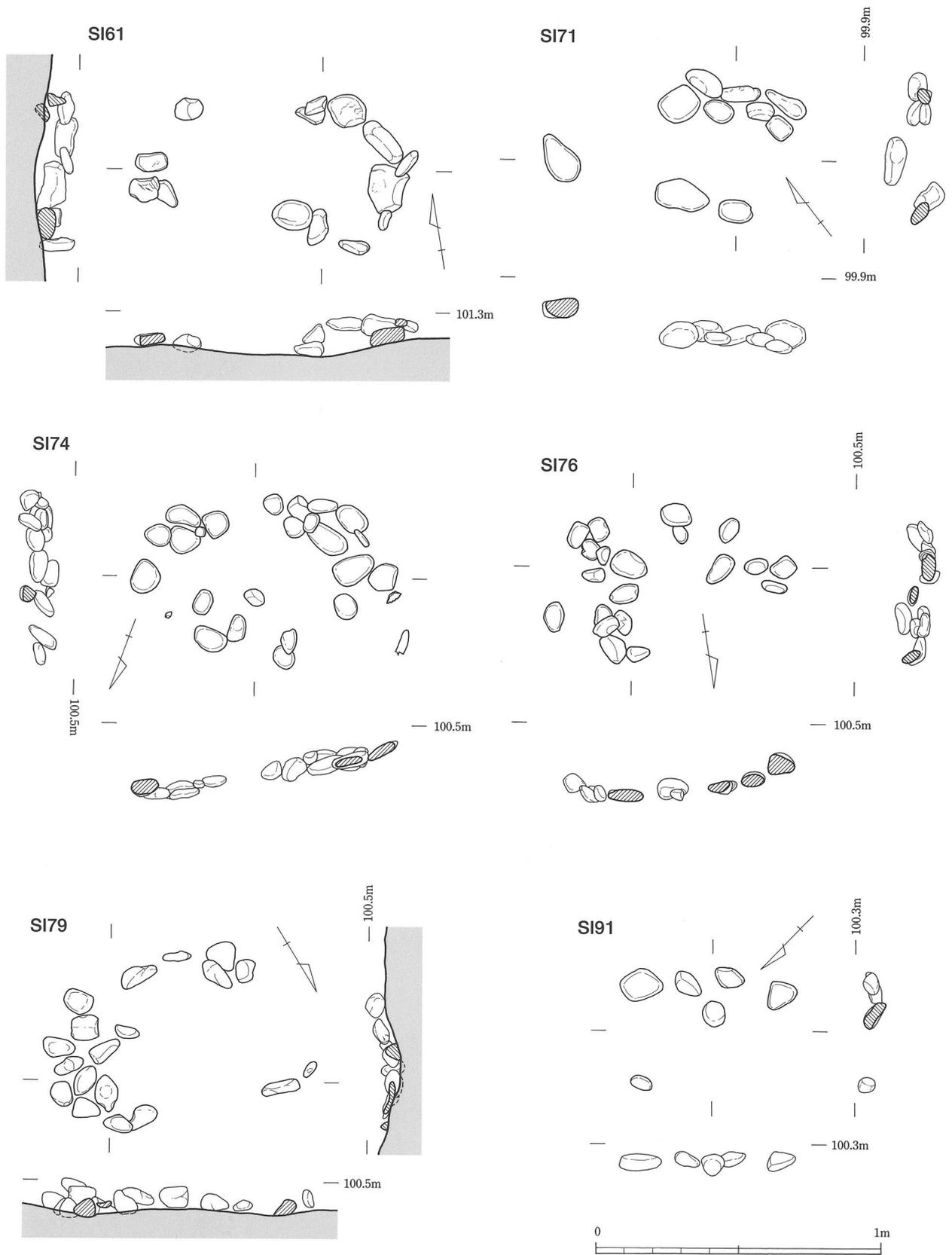
第18図 別府原遺跡 集石遺構(SI)実測図(6) [S=1/20]



第19図 別府原遺跡 集石遺構(SI)実測図(7) [S=1/20]



第20図 別府原遺跡 集石・配石遺構 (SI) 実測図 [S=1/20]



第21図 別府原遺跡 配石遺構(SI)実測図(2) [S=1/20]

第2表 別府原遺跡 竪穴(SA)および土坑・配石土坑(SC)一覽表

遺構番号	遺構種類	検出位置	検出面	上場(m)	下場(m)	深さ	出土遺物	備考
SA1	竪穴	A区 J7 K7	Ⅵb	3.75+α×2.70	3.70+α×2.45	0.40	—	SP58に切られる。赤変部分あり。 隅丸長方形プランか
SA2	竪穴	A区 M11	Ⅵb	2.90+α×2.15+α	2.88+α×1.22+α	0.45	—	ピットあり。隅丸長方形プランか
SC21	土坑	A区 O11・12	Ⅵa	1.07×0.88	0.65×0.34	1.05	—	楕円形プラン、ピットを切る。
SC22	土坑	A区 O4	Ⅶa	0.99×0.62 ピット:0.4×0.3	0.24×0.18	0.15 ピット:0.69	—	楕円形プラン、一端にピットを伴う。
SC23	土坑	A区 N4 O4	Ⅶa	1.00×0.63 ピット:0.44×0.26	0.22×0.16	0.15 ピット:0.76	—	楕円形プラン、一端にピットを伴う。
SC24	土坑	A区 L7・8	Ⅵa	1.26×0.72	1.07×0.55	0.2	土器(胴ⅡⅢ類) 石器(石核、磨石、石皿)	楕円形プラン
SC25	土坑	A区 G10	Ⅵa	1.38×1.17 ピット:0.56×0.4	0.47×0.17	0.65 ピット:1.14	土器(口Ⅱa1、胴ⅡⅢ、底①a、底③a類)、 石器(ナイフ形石器)	楕円形プラン、一端にピットを伴う。
SC28	土坑	A区 M8	Ⅵa	1.33×0.80	0.95×0.64	0.35	土器(口Ⅲ底②a、口Ⅱa2、胴ⅡⅢ類)、 石器(剥片)	楕円形プラン、トレンチャーに切られる。
SC29	土坑	A区 N12	Ⅵa	1.50×1.06	1.09×0.58	0.84	—	楕円形プラン、底面で礫3点出土。
SC31	土坑	A区 M9	Ⅵb	0.75×0.45+α	0.45×0.35+α	0.1	土器(口Ⅲ、胴ⅡⅢ、底②a類)	トレンチャーにより東半分が消失
SC41	土坑	A区 G6	Ⅵb	1.25+α×0.56	1.26+α×0.45	0.21	土器(口Ⅴ類)	SP2・ピットに切られる。楕円形プラン
SC42	土坑	A区 L5	Ⅶa	1.53×0.73	1.36×0.57	0.15	土器(口Ⅲ、口Ⅴ、胴ⅡⅢ類)、 石器(スクレイパー)	楕円形プラン
SC44	土坑	A区 L9	Ⅶa	1.54×1.50	1.36×1.43	0.31	—	円形プラン
SC45	土坑	A区 P5	Ⅵa	2.23×1.93	0.20×1.76	0.24	土器(口Ⅱa1、口Ⅲ、胴ⅡⅢ、底②a、底③b類)、 石器(スクレイパー、石核、礫器)	旧SA3、楕円形プランか
SC46	土坑	A区 I9	Ⅵa	2.83+α×1.82+α	2.71+α×1.58+α	0.15	土器(口Ⅱa1、口Ⅱa2、口Ⅲ、胴ⅡⅢ、胴Ⅳ、胴Ⅴ類)、 石器(石鏃、スクレイパー、石核、剥片、碎片等)	旧SA6、隅丸長方形プラン
SC47	土坑	A区 K10	Ⅶa	2.33×1.30	2.00×1.30	0.53	土器(口Ⅱa1、胴ⅡⅢ類)、 石器(石核)	旧SA8、隅丸長方形プラン
SC48	土坑	A区 M7	Ⅶa	1.74×1.59+α	—	0.06	土器(口Ⅱa1、口Ⅲ底②b、胴ⅡⅢ類)、 石器(剥片、碎片、磨石)	旧SA13、楕円形プラン
SC49	土坑	A区 O10	Ⅵb	2.53×1.77	2.40×1.49	0.26	石器(石核)	不整な長楕円形プラン。土坑2基の 切り合いか?
SC50	土坑	A区 M5・6	Ⅵb	2.16+α×1.57	1.99+α×1.46	0.22	—	旧SA4、SP54に切られる。隅丸長方形 プラン
SC51	土坑	A区 H5・15	Ⅶa	3.40×1.52	3.30×1.80	0.08	土器(口Ⅱa1、胴Ⅳ、底?類)、 石器(石核、剥片)	旧SA2、SP50を切る。長楕円形プラン?土 坑2基が切り合っている可能性がある。
SC52	土坑	A区 L9・10	Ⅶa	2.44×1.57	2.30×1.40	0.28	—	長方形プラン、埋土中位で礫・被熱礫 がまとまって出土。
SC53	土坑	A区 K9・10	Ⅶa	2.54×1.18	2.46×1.08	0.17	—	長楕円形プラン
SC54	土坑	A区 J4	Ⅶa	2.79+α×1.62	2.66+α×1.52	0.12	土器(口Ⅱa1、胴ⅡⅢ類)、 石器(石斧)	旧SA1、長楕円形プラン、SC7を切る。
SC55	土坑	A区 K7	Ⅵb	1.16×0.72 ピット:0.62×0.59	0.20×0.18	0.28 ピット:0.57	—	楕円形プラン、一端にピットを伴う。
SC56	土坑	A区 O9	Ⅵa	1.41×1.08	1.29×0.92	0.15	—	楕円形プラン、トレンチャーに切られる。
SC57	土坑	A区 L10	Ⅶa	1.36×0.87	0.78×0.62	0.44	—	不整な楕円形プラン
SC58	土坑	B区 T5	Ⅵb	0.18×1.00	1.94×0.78	0.21	—	長楕円形プラン
SC59	土坑	B区 S5	Ⅵa	0.99×0.97	0.74×0.71	0.20	—	円形プラン
SC69	土坑	A区 H4	Ⅶa	1.18×0.66	1.04×0.39	0.38	—	SP51と切り合い、(SP51-23に切られる)
SC70	土坑	A区 L5 M5	Ⅵb	0.92+α×1.08	0.88+α×0.8	0.14	—	SP53-1に切られる。楕円形プラン?
SC71	土坑	A区 L7	Ⅵb	2.2×1.42	1.8×1.0	0.45	—	SP59-2に切られる。楕円形プラン
SC72	土坑	A区 J10 K10	Ⅶa	1.34×0.75+α	1.2×0.58+α	0.38	—	SP68-3に切られる。隅丸長方形プラン?
SC73	土坑	A区 H10	Ⅵb	1.48×0.7	1.34×0.6	0.25	土器(胴ⅡⅢ類)	SP72と切り合い。楕円形プラン
SC74	土坑	A区 K9	Ⅵb	2.3+α×0.6+α	2.15+α×0.56+α	0.315	—	SP75・SC75との切り合い関係不明。 楕円形プラン
SC75	土坑	A区 K9	Ⅵb	2.1×7.5	1.8×0.62	0.32	—	SP75・SC75との切り合い関係不明。 楕円形プラン

遺構番号	遺構種類	検出位置	検出面	上場(m)	下場(m)	深さ	出土遺物	備考
SC76	土坑	A区 L9	Vb	2.2+α×1.02	2.04×0.85	0.35	—	SP75-3を切る。楕円形プラン
SC77	土坑	A区 L11・12 M11・12	Vb	1.45×0.57	1.34×0.4	0.17	—	SP66-3に切られている。楕円形プラン
SC38	配石 土坑	A区 O12・13	Vb	1.23×0.86+α 礫範囲:1.16×0.58	1.08×0.74+α	0.29	—	楕円形プラン。礫数11点
SC39	配石 土坑	A区 N11	Vb	0.37+α×0.68 礫範囲:0.52×0.34	0.32×0.46	0.21	—	SP67-24に切られる。
SC43	配石 土坑	A区 L10	Va	1.15×0.61 礫範囲:0.97×0.44	1.1×0.52	0.43	—	楕円形プラン。礫数30点(尾鈴酸性岩、砂岩等)
SC60	配石 土坑	A区 I9	Vb	0.84×0.55 礫範囲:0.91×0.63	0.73×0.42	0.13	—	旧SI73、楕円形プラン。礫数59点(尾鈴酸性岩18点、他41点)
SC61	配石 土坑	A区 G10	Vb	0.72×0.40 礫範囲:0.74×0.40	0.53×0.25	0.10	—	旧SI78、楕円形プラン。礫数19点(尾鈴酸性岩11点、砂岩8点)
SC62	配石 土坑	A区 H10	Vb	0.73×0.44 礫範囲:0.71×0.45	0.54×0.32	0.15	—	旧SI77、楕円形プラン。礫数39点(尾鈴酸性岩20点、砂岩19点)
SC63	配石 土坑	A区 I7・8	Vb	1.02×0.52 礫範囲:0.99×0.53	0.93×0.32	0.10	—	旧SI82、楕円形プラン。礫数60点(尾鈴酸性岩、砂岩等)
SC64	配石 土坑	A区 O4	Vb	礫範囲:0.81×0.55	—	—	—	旧SI57、礫数44点(尾鈴酸性岩、砂岩、ホルンフェルス等)、SP56が埋没した後、構築。
SC65	配石 土坑	A区 G10	Vb	礫範囲:1.05×0.81	—	—	土器(口II a1、胴II Ⅲ類)、石器(石核、碎片)	旧SI80、礫数33点(尾鈴酸性岩、砂岩等)
SC66	配石 土坑	A区 J8	Vb	礫範囲:1.34×0.38	—	—	—	旧SI83、礫数69点(尾鈴酸性岩、砂岩等)
SC67	配石 土坑	A区 G10	Vb	礫範囲:1.07×0.63	—	—	石器(剥片)	旧SI81、礫数86点(尾鈴酸性岩17点、砂岩68点、頁岩1点)
SC68	配石 土坑	A区 K10 L10	Va	1.48×0.89 礫範囲:1.05×0.46	1.54×0.57	0.63	—	楕円形プラン。礫数31点(尾鈴酸性岩、砂岩等)

※土坑についてはSC21以前は旧石器時代の所産

第3表 別府原遺跡 集石遺構・配石遺構(SI)一覧表

No.	遺構番号	遺構種類	検出位置	検出面	分類	礫の範囲(m)	土坑の規模(m)	礫の個数	出土遺物	備考
1	SI26	集石	A区 G5	V	II	0.64×0.58	0.67×0.63×0.15	58点(尾鈴酸性岩43点、砂岩10点、頁岩5点)	土器(胴II Ⅲ類)	炭化物を含む。拳大程度の破砕礫が多い。
2	SI27	集石	A区 I6	V	IV	0.81×0.60	—	33点(尾鈴酸性岩19点、砂岩10点、頁岩4点)	—	拳大程度の破砕礫が多い。中央付近をトレンチャーが走る。
3	SI28	集石	A区 J7	V	II	1.29×1.16	1.09×0.7×0.17	300点(尾鈴酸性岩158点、砂岩139点、チャート3点)	土器(胴II Ⅲ類) 石器(石核)	5~20cm大の礫で構成、大半が破砕礫。炭化物を含む。トレンチャーにより、西端と東側を切られる。
4	SI29	集石	A区 K4	V	IV	0.92×0.88	—	107点(尾鈴酸性岩、砂岩等)	—	5~15cm大の破砕礫や完形礫で構成、破砕礫は大ぶりのものが多い。
5	SI30	集石	A区 K4	V	IV	0.76×0.70	—	34点(尾鈴酸性岩、砂岩)	—	拳大程度の破砕礫が多い。中央付近をトレンチャーが走る。
6	SI31	集石	A区 L4	V	V	0.92×0.65	—	45点(尾鈴酸性岩37点、頁岩2点、チャート6点)	土器(胴II Ⅲ類?)	5~15cm大の礫で構成されている。破砕礫がその大半を占める。北西側に向かって散在する。
7	SI32	集石	A区 K4	V	I	0.55×0.37	0.42×0.32×0.11	11点(尾鈴酸性岩3点、砂岩6点、その他2点)	—	約10~20cm大の完形礫で構成、赤変が認められる。
8	SI33	集石	A区 K4	V	IV	0.49×0.40	—	20点(すべて尾鈴酸性岩)	—	全体的に弱い赤変が認められ、炭化物を含む。大半が破砕礫、完形に近いものもひび等が認められる。
9	SI34	集石	A区 K4 L4	V	V	1.01×0.98	—	61点(尾鈴酸性岩)	土器(胴IV類)	5~25cm大の礫で構成、そのほとんどが破砕礫。
10	SI35	集石	A区 K5	V	IV	1.11×1.06	—	142点(尾鈴酸性岩、砂岩等)	土器(口II a3類) 石器(剥片)	中央はトレンチャーに切られる。5~10cm大の礫で構成され、破砕礫がほとんどを占める。
11	SI36	集石	A区 K5	V	II	1.21×0.93	0.83×0.66×0.13	193点(大半が尾鈴酸性岩や砂岩)	土器(風化著しく不明)	5~15cm大の礫で構成、破砕礫が大半を占める。中央にトレンチャーが走る。
12	SI37	集石	A区 K5	V	IV	0.89×0.85	—	32点(尾鈴酸性岩、砂岩)	—	炭化物を含む。中央をトレンチャーが切る。尾鈴酸性岩に比べ、砂岩のほうが赤変が著しい。
13	SI38	集石	A区 K5	V	IV	0.87×0.77	—	84点(尾鈴酸性岩、砂岩の順で多い)	土器(胴II Ⅲ類)	炭化物を含む。中央はトレンチャーに切られる。
14	SI39	集石	A区 K6	V	II	1.10×0.99	0.82×0.82×0.1	108点(尾鈴酸性岩、砂岩の順で多い)	—	10cm大の破砕礫が多い。中央をトレンチャーに切られる。
15	SI40	集石	A区 K6	Va	V	0.95×0.72	—	32点(尾鈴酸性岩、砂岩)	—	5~20cm大の完形に近い礫で構成。赤変が弱い。
16	SI41	集石	A区 K6	Va	II	0.80×0.77	0.76×0.75×0.17	101点(尾鈴酸性岩87点、砂岩6点、頁岩8点)	石器(石斧)	5~20cm大の礫で構成。完形礫同士の間破砕礫が入り込む。炭化物を含む。*C年代:9220±60年BP
17	SI42	集石	A区 L7	Va	II	0.69×0.63	0.70×0.64×0.21	85点(尾鈴酸性岩43点、砂岩37点、シルト岩5点)	—	5~15cm大の完形礫や破砕礫で構成されている。砂岩のものが特によく赤変している。炭化物を含む。*C年代:9200±60年BP
18	SI43	集石	A区 L8	V	IV	0.48×0.25+α	—	14点(尾鈴酸性岩、砂岩)	—	炭化物を含む。両端はトレンチャーに切られる。

No.	遺構番号	遺構種類	検出位置	検出面	分類	礫の範囲(m)	土坑の規模(m)	礫の個数	出土遺物	備考
19	SI44	集石	A区 K8	V	II	0.92×0.91	0.80×0.57×0.12	106点(尾鈴酸性岩、砂岩、頁岩1点)	石器(使用痕剥片)	5~15cm大の破砕礫で構成、炭化物を含む。中央および両端がトレンチャーに切られる。
20	SI45	集石	A区 L8	V	IV	0.81×0.44+α	—	41点(尾鈴酸性岩、砂岩、頁岩)	石器(剥片、破片)	炭化物を含む。両端はトレンチャーに切られる。
21	SI46	集石	A区 K8	V	IV	0.82×0.68	—	51点(尾鈴酸性岩、砂岩)	—	5~25cm大の礫で構成されている。1点のみ完形、他すべて破砕礫。炭化物を含む。中央をトレンチャーが切る。
22	SI47	集石	A区 K8	V	II	0.71×0.60	0.71×0.59×0.08	40点(尾鈴酸性岩38点、砂岩2点)	—	5~15cm大の破砕礫で構成、全体的によく赤変している。炭化物を含む。中央付近はトレンチャーによって切られる。
23	SI48	集石	A区 M6	V	IV	0.59×0.50	—	12点(尾鈴酸性岩7点、砂岩5点)	石器(石斧、凹石)	すべて破砕礫で構成。中央はトレンチャーに切られる。
24	SI49	集石	A区 L5 M5	V	II	2.25×1.76	1.87×1.14×0.12	245点(尾鈴酸性岩100点、砂岩135点、シルト岩6点、チャート4点)	土器(口Ⅱa1、口Ⅲ、口Ⅳ、胴ⅢⅢ類等)、石器(礫器、破片)	ほとんどが破砕礫で構成、土坑の東側に礫が集中する。炭化物を含む。
25	SI50	集石	A区 M5	V	II	0.62×0.58	0.51×0.50×0.11	35点(尾鈴酸性岩、砂岩、頁岩)	土器(口Ⅲ類)	中央をトレンチャーが切る。5~10cm大の破砕礫が多い。
26	SI51	集石	A区 M5	V	IV	0.60×0.31+α	—	22点(尾鈴酸性岩、砂岩等)	—	両端をトレンチャーに切られる。
27	SI52	集石	A区 M6	V	III	0.54×0.27	0.53×0.40×0.13	9点(尾鈴酸性岩3点、砂岩6点)	—	掘り込み内、中央のものは赤変しているが両端のものは赤変していない。
28	SI53	集石	A区 N3・4	V	II	0.81×0.60	0.75×0.50×0.14	78点(尾鈴酸性岩55点、砂岩21点、頁岩2点)	土器(胴ⅢⅢ類)、石器(磨石)	5~10cm前後の礫で構成されている。赤変が著しい。炭化物を含む。
29	SI54	集石	A区 N4	Ⅴa	IV	0.58×0.53	—	41点(尾鈴酸性岩24点、砂岩12点、頁岩5点)	土器(胴Ⅳ類)	5~10cm前後の礫で構成されている。赤変しているが、完形礫が多い。炭化物を含む。
30	SI55	集石	A区 O3	Ⅴa	IV'	0.46×0.30	—	9点(尾鈴酸性岩7点、ホルンフェルス2点)	—	拳大程度の円礫で構成、赤変していない。
31	SI56	集石	A区 O4	Ⅴa	IV	0.52×0.33	—	30点(尾鈴酸性岩18点、砂岩12点)	土器(小片のため不明)	1点以外は10cm未満の破砕礫。
32	SI58	集石	A区 P4	Ⅴa	IV	1.26×0.82	—	80点(尾鈴酸性岩41点、砂岩39点)	土器(胴Ⅳ類)、石器(石斧)	5~15cm大の破砕礫や完形礫で構成されている。西側にやや散在する。
33	SI59	集石	A区 O4 P4	Ⅴa	V	1.35×1.06	—	75点(尾鈴酸性岩36点、砂岩39点)	土器(胴ⅢⅢ類)	5~15cm大の破砕礫や完形礫で構成されている。10cm以上の礫は完形もしくは完形に近い。
34	SI60	集石	A区 N4	Ⅴa	II	0.56×0.51	0.64×0.55×0.13	49点(尾鈴酸性岩22点、砂岩26点、頁岩1点)	土器(口Ⅲ類)	目立った赤変は認められない。炭化物を少量含む
35	SI63	集石	A区 N5	Ⅴa	IV	0.66×0.63	—	41点(砂岩、尾鈴酸性岩、頁岩の順で多い。)	石器(剥片)	中央に20cm大の扁平礫を配置し、その周辺に5~10cm大の破砕礫が囲む。炭化物を含む。
36	SI64	集石	A区 N5	Ⅴa	II	0.63×0.60	0.72×0.69×0.14	70点(尾鈴酸性岩43点、砂岩27点)	土器(口Ⅲ、胴ⅢⅢ類)	破砕礫がほとんど、完形礫は数点に満たない。
36	SI64	集石	A区 N5	Ⅴa	II	0.63×0.60	0.72×0.69×0.14	70点(尾鈴酸性岩43点、砂岩27点)	土器(口Ⅲ、胴ⅢⅢ類)	破砕礫がほとんど、完形礫は数点に満たない。
37	SI65	集石	A区 N5 O5	Ⅴa	II	0.42×0.38	0.48×0.45×0.14	51点(尾鈴酸性岩21点、砂岩30点)	土器(胴ⅢⅢ類)、石器(礫器、磨石)	10cm未満の破砕礫が多い。
38	SI66	集石	A区 O5	Ⅴa	IV	0.69×0.44+α	—	62点(尾鈴酸性岩46点、砂岩16点)	石器(剥片)	両端をトレンチャーに切られる。炭化物を含む。
39	SI67	集石	A区 P6	Ⅴa	II	0.73×0.66	0.71×0.62×0.09	73点(尾鈴酸性岩26点、砂岩46点、頁岩1点)	石器(磨石)	全体的に薄く赤変し、5~10cm大の完形礫や破砕礫で構成。完形のものが多い。
40	SI69	集石	A区 N7	Ⅴa	IV	0.74×0.72	—	41点(尾鈴酸性岩17点、砂岩24点)	石器(スクレイパー、石斧)	中央に完形礫が比較的多く認められる。
41	SI70	集石	A区 O11	Ⅴa	II	1.23×1.11	0.70×0.63×0.07	140点(尾鈴酸性岩89点、砂岩32点、頁岩21点)	土器(胴ⅢⅢ、底①a類)、石器(破片)	構成されている礫は破砕したもののが大半を占める。炭化物を含む。トレンチャーに北側と南端を切られる。
42	SI71	集石	A区 O12	Ⅴb	IV	0.91×0.54	—	10点(尾鈴酸性岩5点、砂岩3点、ホルンフェルス2点)	—	10~20cm程度の扁平な礫で構成されている。赤変していない。
43	SI72	集石	A区 J8・9	Ⅴa	IV'	0.38×0.31	—	17点(尾鈴酸性岩、砂岩、ホルンフェルス)	—	10cm前後の扁平礫で構成、赤変していない。
44	SI75	集石	A区 H9	Ⅴb	IV'	0.65×0.55	—	18点(尾鈴酸性岩9点、砂岩9点)	—	10cm前後の円礫や楕円礫で構成されている。赤変していない。
45	SI86	集石	A区 P4	V	IV	0.87×0.84	—	80点(尾鈴酸性岩、砂岩)	石器(石核、剥片)	5~15cm大の破砕礫や完形礫で構成、そのほとんどが破砕礫。西側はトレンチャーに切られる。
46	SI87	集石	B区 S5	V	II	1.77×1.28	0.91×0.75×0.15	401点(尾鈴酸性岩224点、砂岩177点)	土器(口Ⅲ、胴ⅢⅢ、胴Ⅳ、底②a類)	5~25cm大の破砕礫や完形礫で構成される。よく赤変している。
47	SI88	集石	B区 T5	V	IV	1.64×1.50	—	161点(尾鈴酸性岩101点、砂岩60点)	土器(口Ⅲ、胴ⅢⅢ類)、石器(石皿)	ほとんどが拳大程度の破砕礫で構成、西側に石皿がみられ、一部赤変している。
48	SI89	集石	B区 T5	Ⅴa	III	0.45×0.44	0.67×0.67×0.19	24点(尾鈴酸性岩、砂岩等)	—	中央に礫がやや密集。大半が破砕礫で構成されている。炭化物を少量含む。
1	SI24	配石	A区 L3	V	—	0.85×0.51	—	9点(尾鈴酸性岩8点、砂岩1点)	—	15~20cm大の扁平礫で構成されている。赤変等は認められない。
2	SI25	配石	A区 P5	V	—	0.99×0.35	—	11点(すべて尾鈴酸性岩)	—	10cm前後の扁平礫で構成。赤変していない。
3	SI61	配石	A区 N5	Ⅴa	—	1.01×0.56	—	14点(尾鈴酸性岩、砂岩、ホルンフェルス等)	石器(敲石)	5~15cm大の完形もしくは完形に近い礫で構成されている。
4	SI62	配石	A区 N5	Ⅴa	—	0.57×0.50	0.55×0.42×0.1	6点(尾鈴酸性岩3点、砂岩3点)	—	10cm前後の扁平礫で構成されている。うっすらと赤変している。

No.	遺構番号	遺構種類	検出位置	検出面	分類	礫の範囲(m)	土坑の規模(m)	礫の個数	出土遺物	備考
5	SI68	配石	A区 P6	Ⅵa	—	0.64×0.55	—	11点(尾鈴酸性岩3点、砂岩8点)	—	10~20cm大の扁平礫を円状に配置、ほとんど赤変していない。床面に炭化物粒有り。
6	SI74	配石	A区 H9・I9	Ⅶa	—	0.94×0.62	—	23点(尾鈴酸性岩15点、砂岩8点)	土器(胴Ⅳ類)、石器(剥片)	10~20cm程度の円礫や楕円礫で構成され、楕円形状に巡る。
7	SI76	配石	A区 H9	Ⅶb	—	0.88×0.57	—	20点(尾鈴酸性岩9点、砂岩9点、ホルンフェルス2点)	—	10~20cm程度の円礫や楕円礫で構成されている。わずかに赤変しているものがみられる。(熱ルミネセンス法で加熱されていない可能性が指摘されている。)
8	SI79	配石	A区 G9	Ⅵa	—	0.95×0.67	—	19点(尾鈴酸性岩5点、砂岩14点)	—	7~15cm大の楕円・扁平礫等が楕円状に巡る。わずかに赤変しているものがみられる。(熱ルミネセンス法で加熱されていない可能性が指摘されている。)
9	SI85	配石	A区 K4	V	—	0.88×0.75	—	7点(すべて尾鈴酸性岩)	土器(口Ⅲ類)、石器(剥片、碎片)	15~30cm大の扁平礫で構成されている。赤変等は認められない。
10	SI90	配石	A区 H9	Ⅶa	—	0.74×0.49	0.62×0.37×0.14	8点(尾鈴酸性岩)	石器(碎片)	大半が破碎礫で構成されている。赤変が弱い。炭化物を含む。
11	SI91	配石	A区 H10 I10	Ⅶa	—	0.62×0.44	—	6点(尾鈴酸性岩5点、砂岩1点)	—	数点は、わずかに赤変している。

※SI24以前については旧石器時代の所産

炉穴 (SP) (第22~54図、第4表)

本遺跡では炉穴¹⁾を307基確認している。そのうち単独のもの(39基)と切り合いにより群(39群)をなすもの²⁾がみられ、分布に差があるものの調査区南西部を除き、最高所を取り囲むようにほぼ全面におよぶ。なかでも約半数が南側斜面部に集中している。また地形に対し、急な傾斜部分に構築されたものについては主軸が等高線に直交(炉部が上方に配置)するものが多いが、比較的緩傾斜や平坦に近い地形なると直交するものに加え、並行するものが多くなる。また後者で直交するものの中には地形が低くなる方に炉部をつくる炉穴も増えている。炉穴の規模は1.27~3.68mあり、2m未満については比較的緩傾斜や平坦に近い地形で多くみられるのに対し、3mを超えるものについては南側の斜面にのみ認められる。

前述のとおり、トレンチャーや地山の色調と埋土の色調との差が不明瞭であったために遺構検出についてはかなりの困難を要した。そのため、かなり下げた状態(Ⅶa層)で確認しているものもあり、炉部のみ確認されたものもある。それらについては、他に縄文時代早期の遺物や礫の出土がある場合には、足場の方向や推定範囲を入れている。また今回は紙面の都合上、埋土状況については一部のみ掲載し、切り合い関係が認められるものうち切り合いが確認できたものについては、断面図にその立ち上がりを実線で付け加え、破線で立ち上がりを入れた部分については別の部分で確認したものを投影させている。また併せて略図を掲載し、切り合い関係を示した(数字は遺構番号を示し、矢印のほうが新しく構築されている)。切り合い関係については、埋土の色調の違いはもとより、焼土粒や炭化物、礫等の有無や含有量の違いにより新旧関係を決定している。

炉穴にはブリッジを有するものと有しないものが確認されている。そのうち、ブリッジを有するものについては、ブリッジが完全もしくは完全に近い状態のもの(SP48-1、SP56-4、SP64-3、SP67-17・29、SP68-2、SP70-10、SP73-1、SP74の9基)やブリッジが崩落等の要因で一部残存が認められるもの(SP63-2・6等、約30基)がみられ、その全長は2.13~3.68mを測る。煙出口については円形もしくは楕円形を呈し、底面より斜めに立ち上がるもの(SP56-4等多数)と長軸側もしくは短軸側がオーバーハング状に立ち上がるもの(SP31、SP68-2等)、燃焼部よりも一段高いテラスを持ち、垂直に近い状態でそのまま立ち上がるもの(SP48-1、SP67-17)がみられる。また底面については長楕円形のものが多いが、ブリッジ下や焚き口付近で内側にくびれるもの(SP48-1、SP68-2等)もみられた。またトンネル部分については断面がドーム状を呈するもの(SP56-4・SP68-2等)や隅丸長形状を

呈するもの（S P 48-1、S P 67-17）等がみられる。なお、ブリッジやその残存部分についてはⅥb～Ⅶa層（S P 64-3、S P 67-17・29等）やⅦ層（S P 48-1、S P 56-4、S P 73-1等）、Ⅶc～Ⅷ層（S P 68-2、S P 70-10、S P 74）を基盤にするものが認められた。Ⅶ層については検出面の関係も考えられることから、その多くは重山郁子氏の言うようにⅥb層やⅦ層のような比較的硬質な地山をブリッジとして利用していたものと考えられる³⁾。また残存部を有するものの一部については、その下位の埋土に残存部と同層のものがブロック状に堆積している部分も認められる。

ブリッジを有しないものについては、全長1.27～3.35m（平均約2.3m）を測り、小型のものから大型のものまでみられる。形状は長楕円形や隅丸長方形を呈し、底面も同様に長楕円形や隅丸長方形を呈するものや、炉部付近やその手前（足場側）で内側にくびれるものが認められる等、ブリッジを有するものと類似した傾向が認められる。また炉部側の壁面も同様の傾向が伺える。これらの一部については、埋土に検出面相当やその上層のブロックが堆積している部分も認められることや検出面が低かったということから、ブリッジを有するものが含まれていた可能性がある。

炉部については、煙道壁面に接するもの（S P 3、S P 56-4）や壁面との間に空間がみられるもの（S P 1、S P 63-4等）がブリッジの有無に関係なく認められる。なかには燃焼により硬化する部分もみられ、その多くが足場側にみられる。

切り合いについては特徴的であり、今回の調査ではさまざまなパターンが確認されている。なかには、前後関係を意識するあまり、強引に線引きをしてしまったきらいもあるが、基本的に調査時に判断したものをそのまま報告する。切り合いには古い炉穴の前方に、新しい炉穴を構築する例（S P 40-1・2、S P 62-4・5等）や軸をずらし交差するように新たに炉穴を構築し、古い炉穴の一部を足場とする例（S P 42-1・2、S P 43-1・2等）が多くみられ、また古い炉穴の後方に、新しい炉穴を構築する例（S P 55-1・3、S P 60-2・3等）や古い炉穴の長軸に対して、並列するように構築する例（S P 50-1・2、S P 64-29・38等）等といったいくつかのパターンが認められる。

埋土の状態については堆積のない、もしくは堆積の少ない状態で新しく構築する例と、ある程度自然埋没をした段階で新たに炉穴を構築する例が認められる。

このように観ていくと底面の形状や炉部の位置、その独特な切り合いパターン等を考慮すれば、重山氏らが言うように切り合いがブリッジ崩壊の要因の一つと考えることができ、すべての炉穴にブリッジを有する可能性も考えられる。しかしその一方で、S P 65-5やS P 67-10等のように炉部側が古い炉穴の埋土中に造られるものもみられる。これらについてはブリッジが有するという前提でいけば、古い炉穴の埋土でブリッジが造られることになる。重山氏は椎屋形第2遺跡の報告書中で、炉穴の特徴の一つとして埋土が非常に硬いという報告をしている。本遺跡のものも該当し、硬さからいえばブリッジに利用できそうである。しかし、これらの埋土は乾燥するとクラックが起りやすく、どれだけの耐久性があるか疑問である。調査においてこれらのブリッジの確認を行ったが、結局のところ確認できなかった。今後、そのような視点から調査していく必要が感じられる。

出土遺物については貝殻条痕を器面に施す一群や貝殻を連続的に刺突する一群等の土器や石鏃やスクレイパー、楔形石器、石斧等の石器が確認されている。そのうち土器については破片が多く、完形もしくは完形に近い状態のものは確認されておらず、またその多くが埋土中位～上位にかけて確認されてお

り、底面直上もしくは底面に近い位置で出土しているものはほんの一部にすぎない。

また今回の調査では、 ^{14}C 年代測定をはじめ、熱ルミネッセンス年代測定、植物珪酸体分析、炭化物同定、残存脂肪酸分析等の分析を行った。そのうち紙面の関係上、植物珪酸体分析、残存脂肪酸分析以外のものについては第4節に掲載しているのもので、詳しい内容については参照していただきたい。

^{14}C 年代測定では5基（SP1、SP39、SP48-5、SP63、SP65-3、SP81）で確認されている炭化物について分析を行い、 $9,700\pm 100\sim 8,950\pm 60$ y.B.Pの年代を得た。これは縄文時代早期前半に位置づけられる。また熱ルミネッセンス年代測定では $10,800\pm 1300$ y.B.P（SP67-29）を示し、これも誤差の範囲を考慮にいれば、縄文時代早期前半に含まれる。

植物珪酸体分析では、焼土の分析を行い、その上下層と比較してミヤコザサ節や棒状珪酸体が比較的多く検出されており、燃料の一部としてササ類などが利用されていた可能性が考えられるという分析結果が得られている。

また焼土中や埋土中で確認された炭化物や炭化種子については、クリ材（SP1等）やブナ科コナラ属の子葉（SP18）やユリ科の鱗茎（SP48-5）の分析結果を得ている。そのうちユリ科の鱗茎については炉部上で大量に確認されている。それらは焼土面より若干上位にある黒色土中にあり、その部分でのみ確認されている。このことについて、ユリ科には食用になるものも多く、アク抜きを必要とする種類も含まれることから余熱を利用してアク抜き途中だったものが、何らかの理由によりそのまま残されていた可能性や炉穴が廃棄された後、早い段階で一時的に備蓄された可能性等が考えられるが、炉部上で確認されていることや鱗茎類等はそのままでと発芽が早く、備蓄に向かないことから、むしろ前者の可能性が高いと考えられる。しかし、これらについては植物名までは特定できていないため、推測の域を出ないが炉穴の用途を考える上でも重要な資料と考えられる。

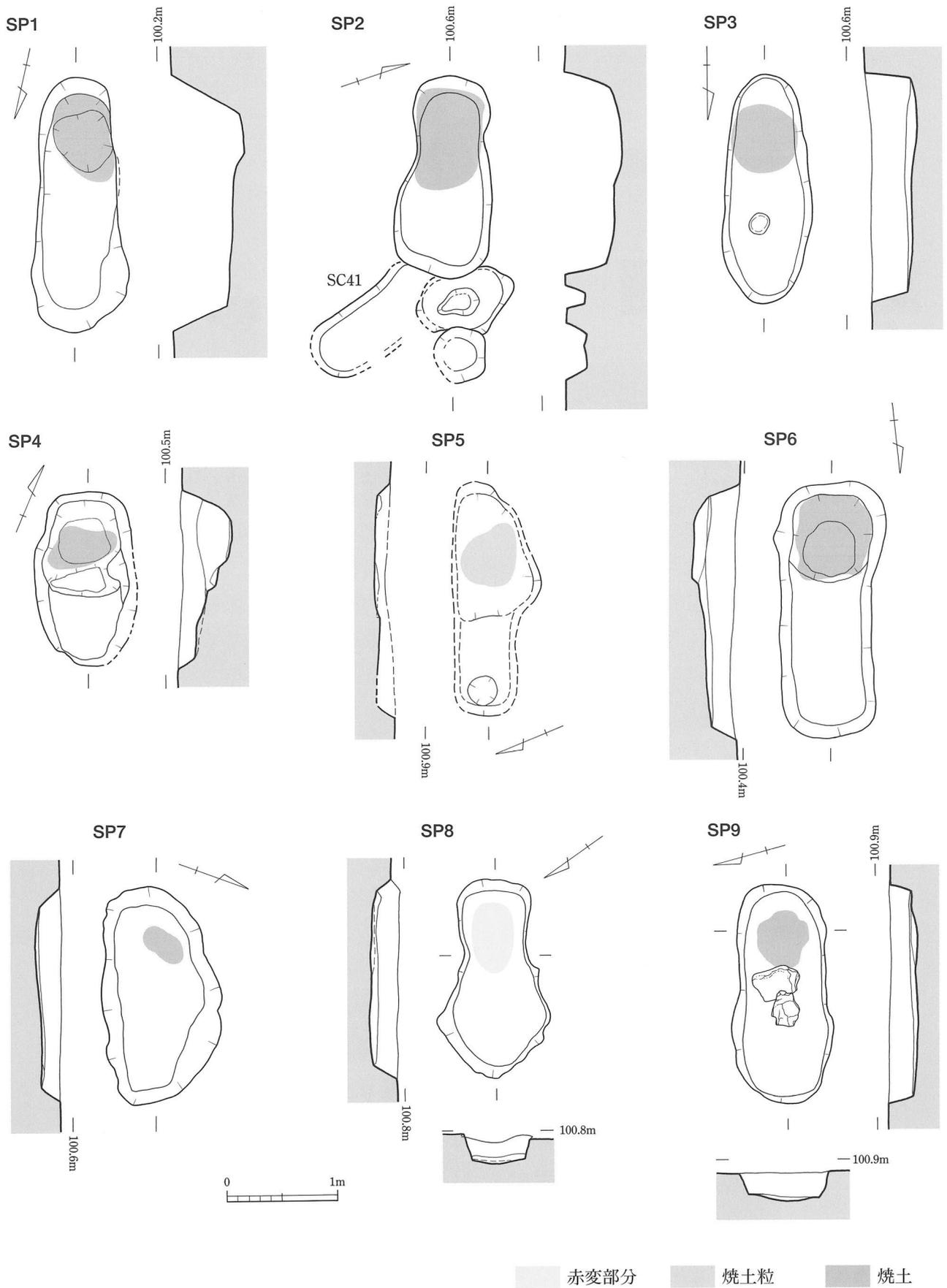
残存脂肪酸分析は、SP67-24・29・30・38、SP65-3、SP63の6基について炉部と足場の床上の埋土および床下の土と炉穴外で床面に相当する地山の試料を分析に委託した。残存脂肪酸分析については分析した試料が土であったため必ずしも良好な成果は得られなかったが、参考までに結果のみ報告すると、「6基について残存する脂肪は主としてイノシシやニホンジカのような動物の脂肪と類似しており、他にイヌ、オットセイ、イルカ、アユのような動物の試料とも若干類似していると推定される。今回の試料は炉穴内でも焼土ではない足場部分と炉部に当たる床上、床下部分の試料で傾向に差がなく、また炉穴外の対照試料も炉穴内の試料とほぼ同じ傾向を示していた。これはすべての炉穴試料中に残存する脂肪が非常に微量のため、地域一帯の腐植土が持つ脂肪酸組成の影響を強く受けているためと考えられる。」という分析結果をいただいている。

(註)

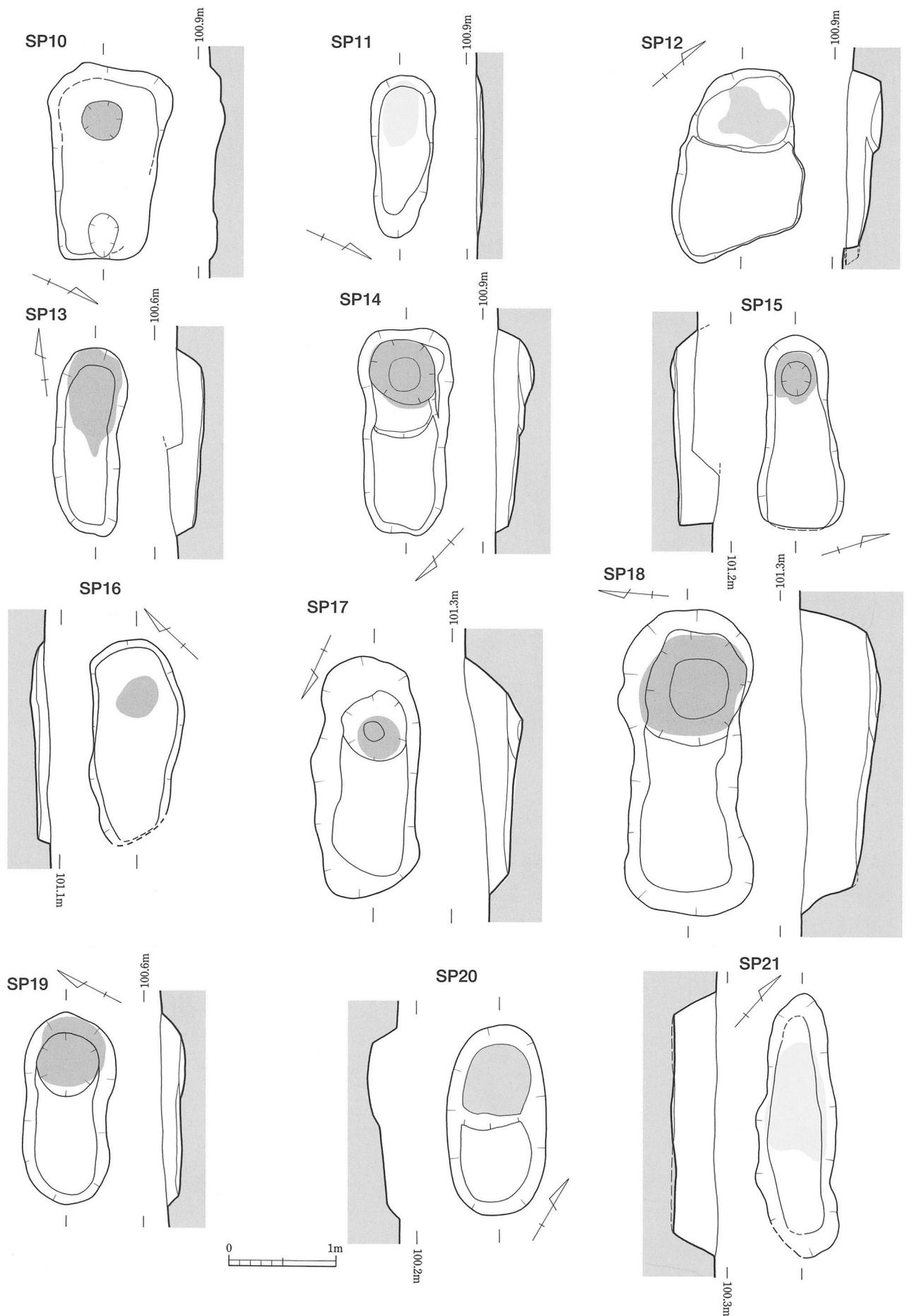
- 1) 炉穴については関東の炉穴と同一系統のものかどうかの問題もあるが、本遺跡で確認されている長楕円形や隅丸長方形を呈する土坑で一端に焼土（炉部）をもち、向かいあう部分に空間（足場）をもつものが「炉穴の基本形態は炉部と足場からなる。足場とは燃焼部である炉に対処する人間の座居する空間である」（十菱・鈴木1984）という定義に当てはまることから、ここではこの名称を用いた。
- 2) ここでは最低2基の切り合いでも群としている。
- 3) 重山郁子他 1996「榎屋形第1遺跡・榎屋形第2遺跡・上の原遺跡」宮崎市教育委員会

参考文献

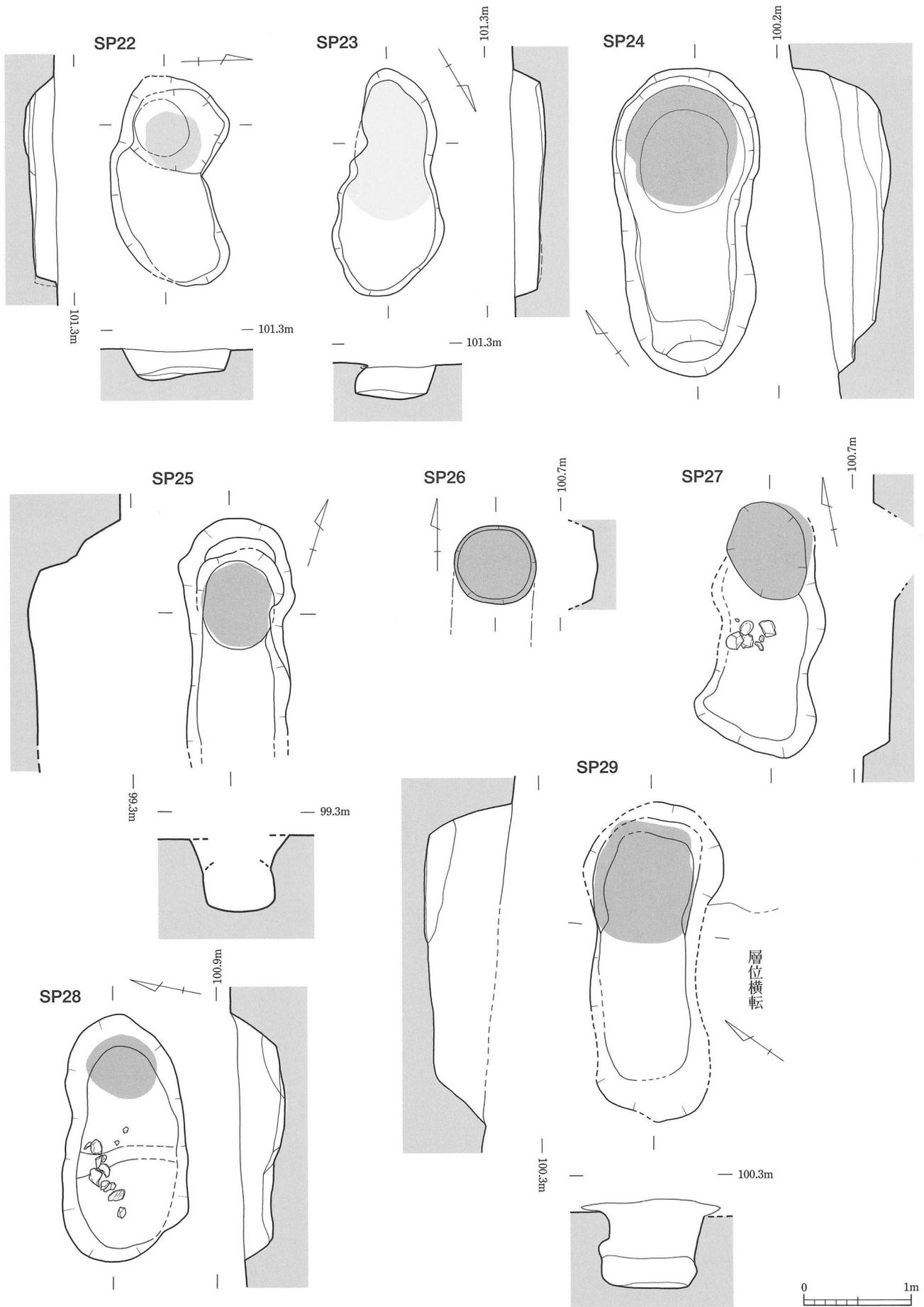
十菱駿武・鈴木克彦1984「炉穴の研究」『考古風土記』第9号



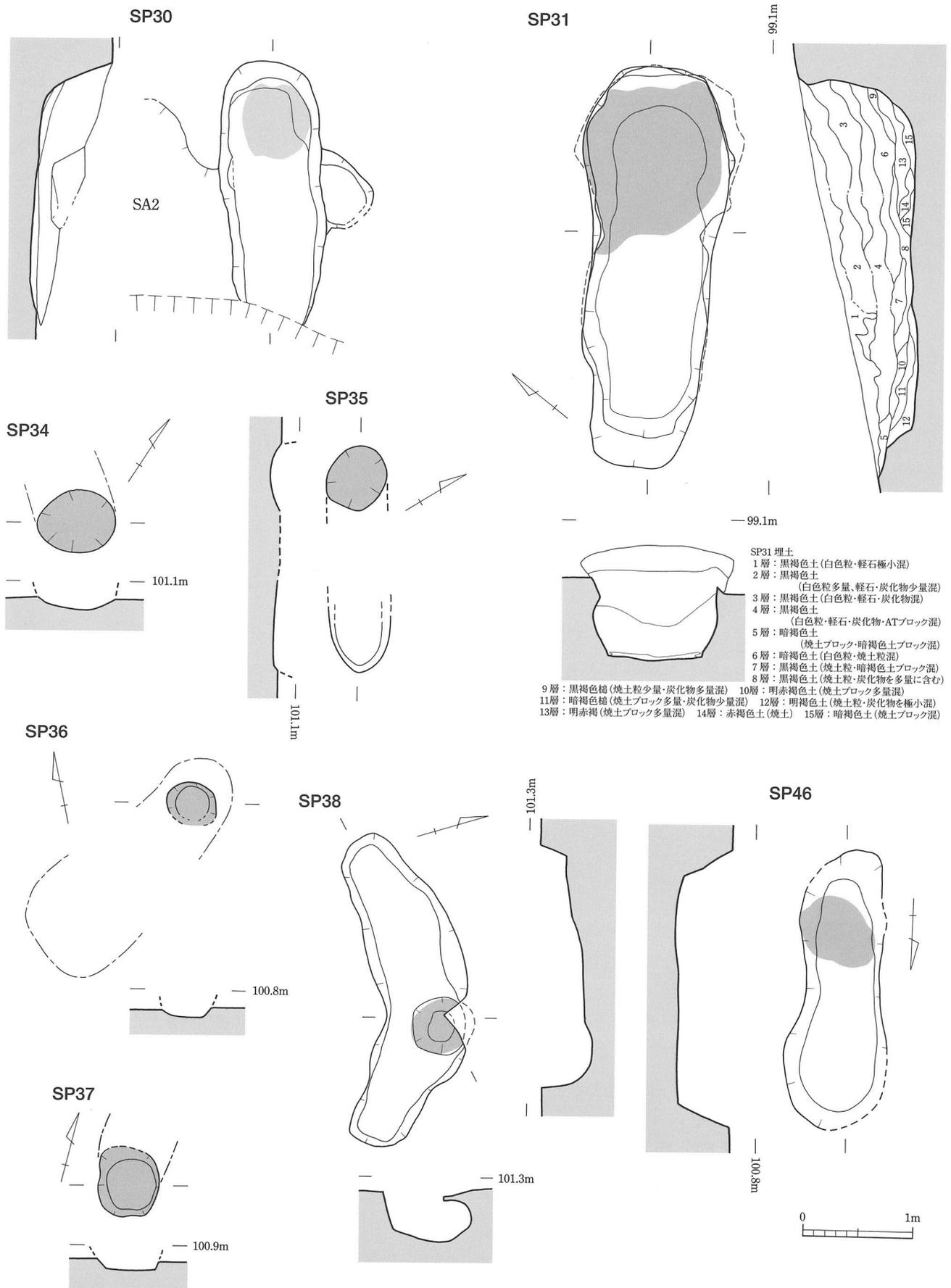
第22図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(1) [S=1/50]



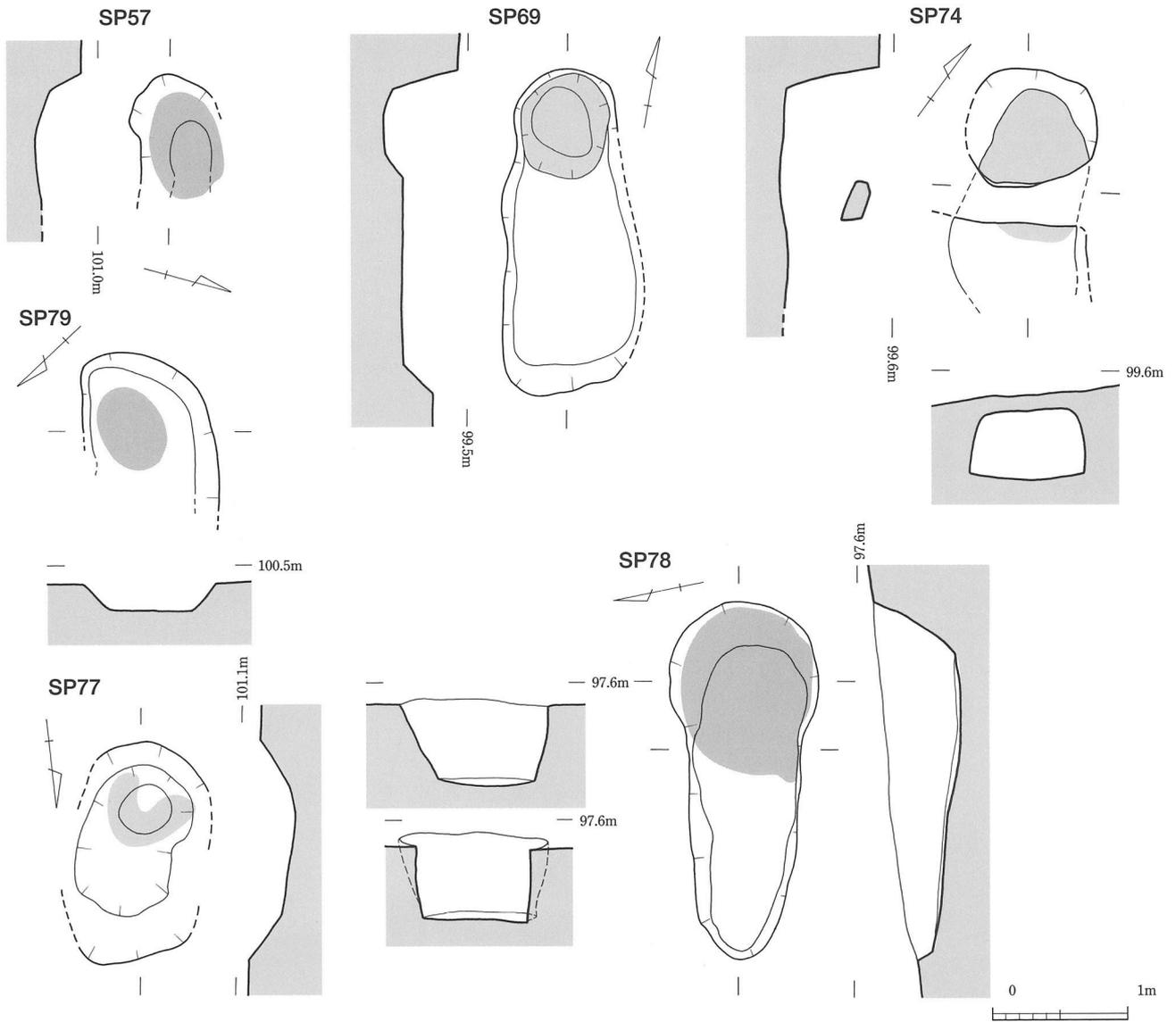
第23図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (2) [S=1/50]



第24図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(3) [S=1/50]



第25図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(4) [S=1/50]

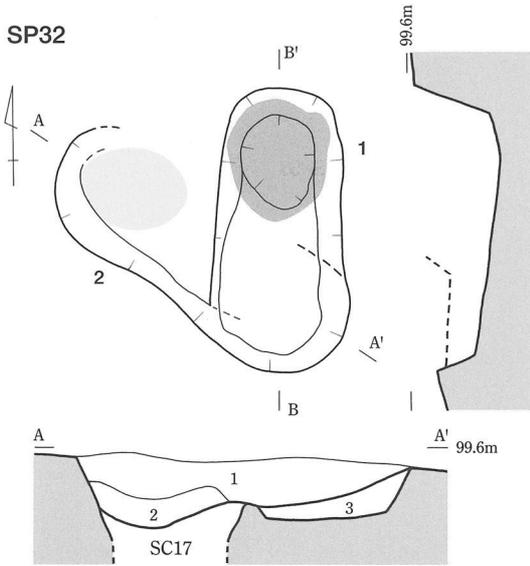


※ 切り合いのある炉穴については個別に遺構番号を付すべきであったが、検討する部分も多く、整理作業の進展上、遺物の注記には切り合っている炉穴群にまとめて遺構番号をふり、その中で1基ずつ枝番号を付している（例：SP32-1、SP32-2）。そのため本報告では、そのままそれを用いることにし、遺構図では個別に枝番号（ゴシック体）を付している。

また炉穴の切り合いについては切り合い関係図を掲載し、数字は枝番号を表し、矢印方向（→）に向かって新しくなる。

第26図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (5) [S=1/50]

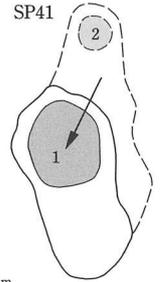
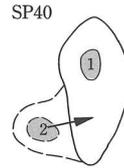
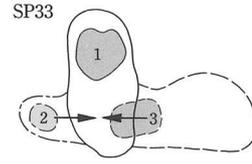
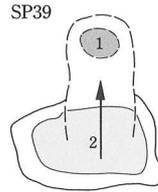
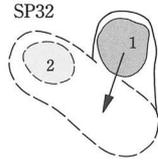
SP32



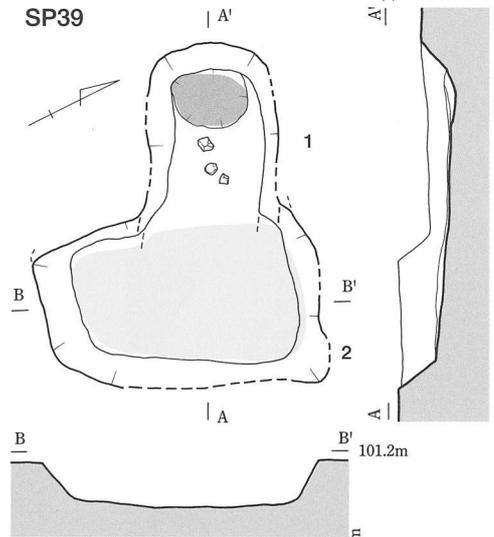
SP32埋土

- 1層：黒褐色土(白色粒・青灰色粒・軽石少量混)
- 2層：黒褐色土(焼土粒・褐色土ブロック少量混、炭化物多量混)
- 3層：黒褐色土(白色粒・青灰色粒・炭化物少量混)

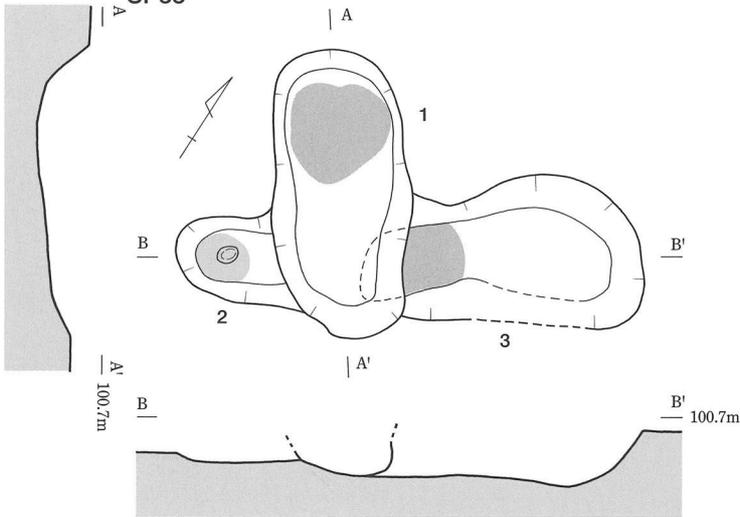
炉穴切り合い関係図



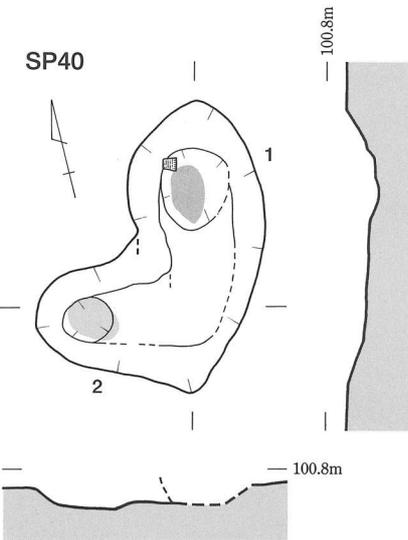
SP39



SP33



SP40

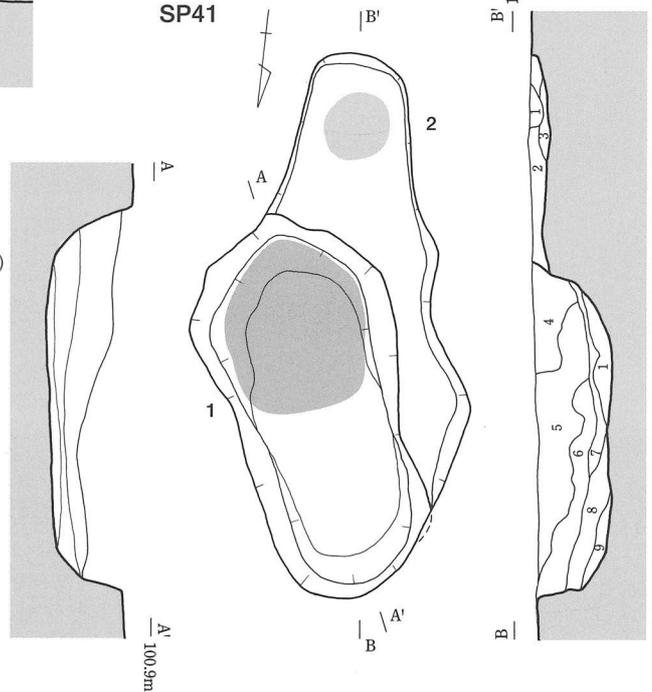


SP41埋土

- 1層：黒褐色土(白色粒・炭化物混)
- 2層：暗褐色土(焼土粒・炭化物混)
- 3層：暗褐色土(焼土粒混)
- 4層：黒褐色土(白色粒多量混、軽石少量混)
- 5層：黒褐色土(白色粒・Ⅷ層ブロック混)
- 6層：黒色土(炭化物・Ⅷ層ブロック多量混)
- 7層：黒褐色土(焼土粒・炭化物混)
- 8層：暗褐色土(焼土粒・焼土ブロック・炭化物多量混)
- 9層：黒色土
- 10層：明褐色土(焼土)

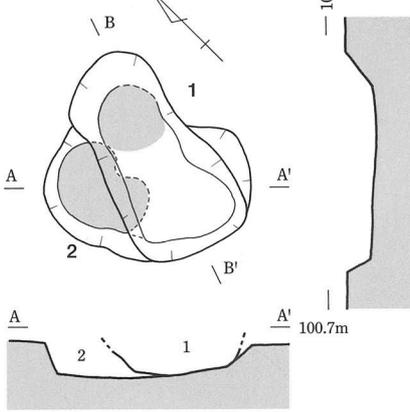


SP41

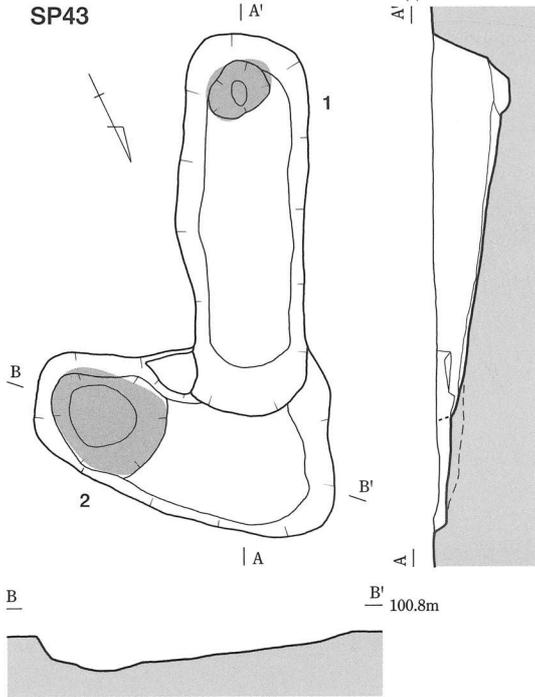


第27図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(6) [S=1/50]

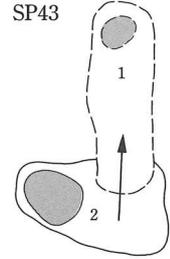
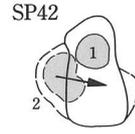
SP42



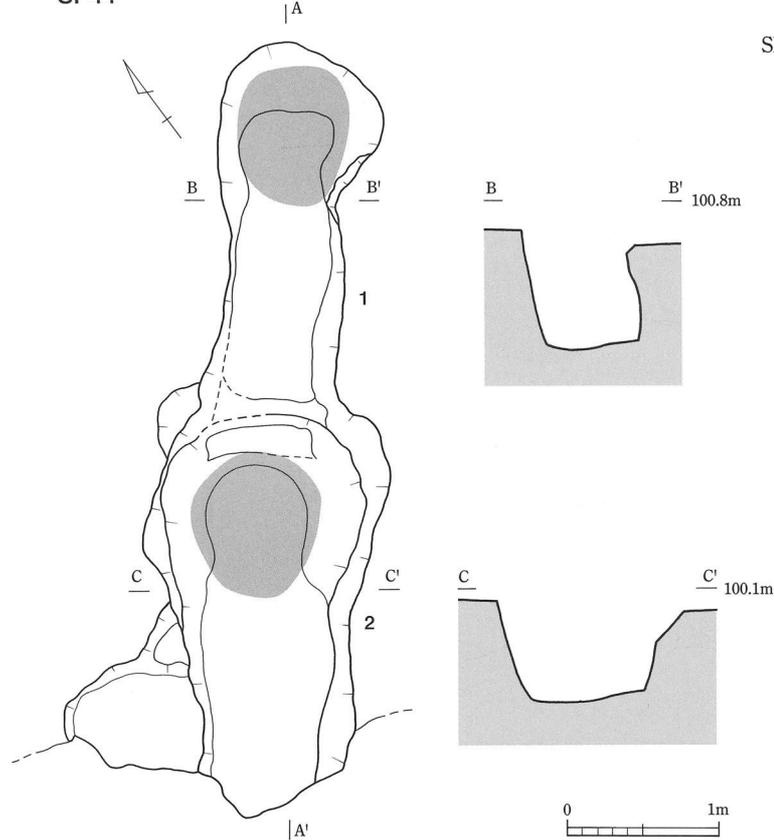
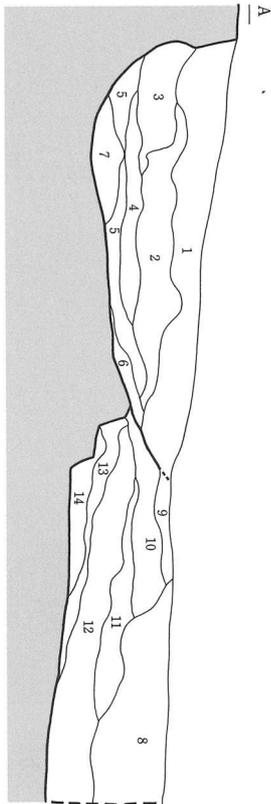
SP43



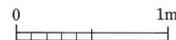
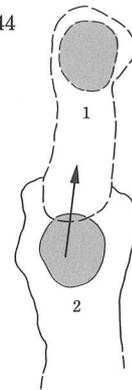
炉穴切り合い関係図



SP44



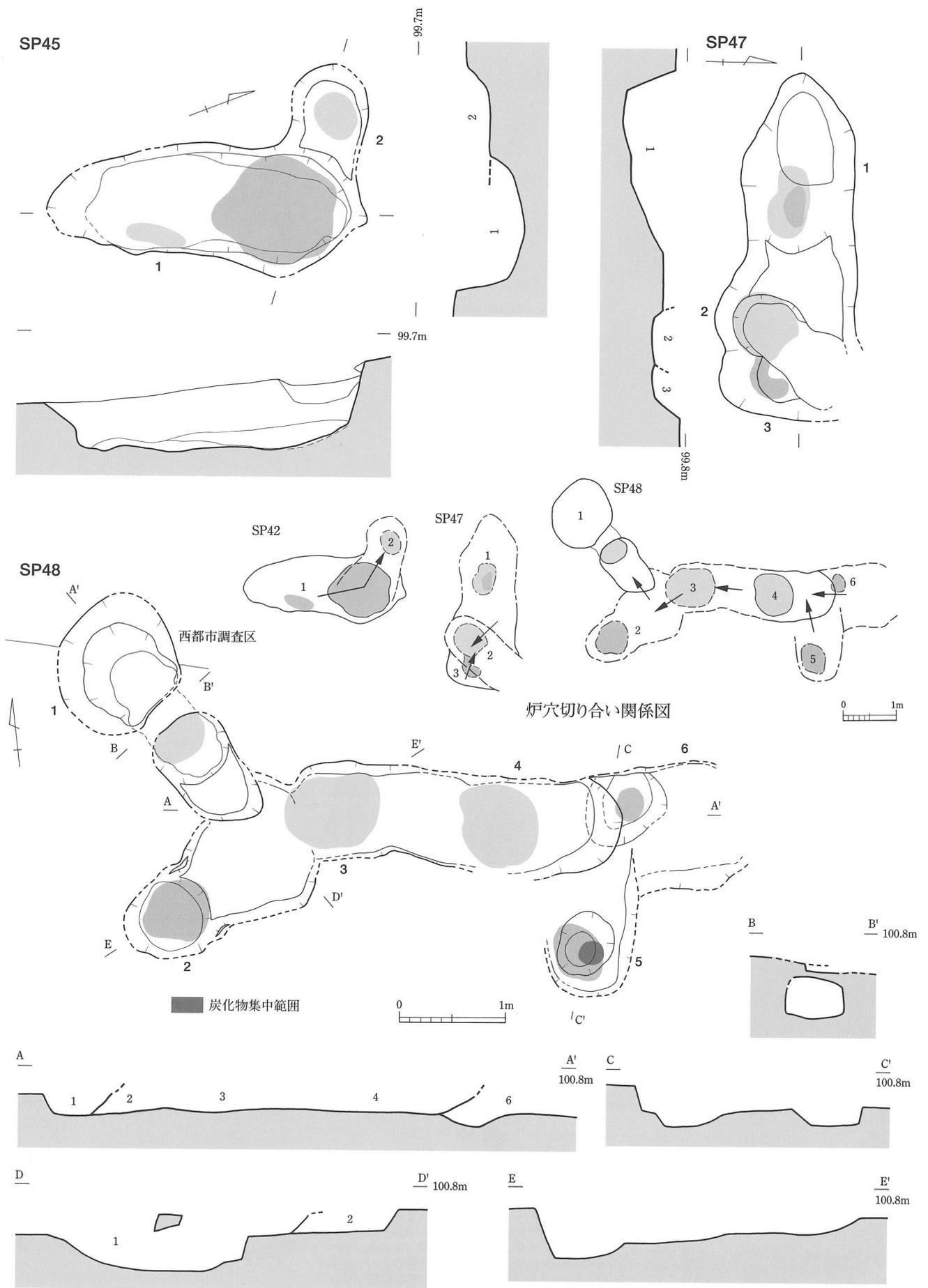
SP44



SP40埋土

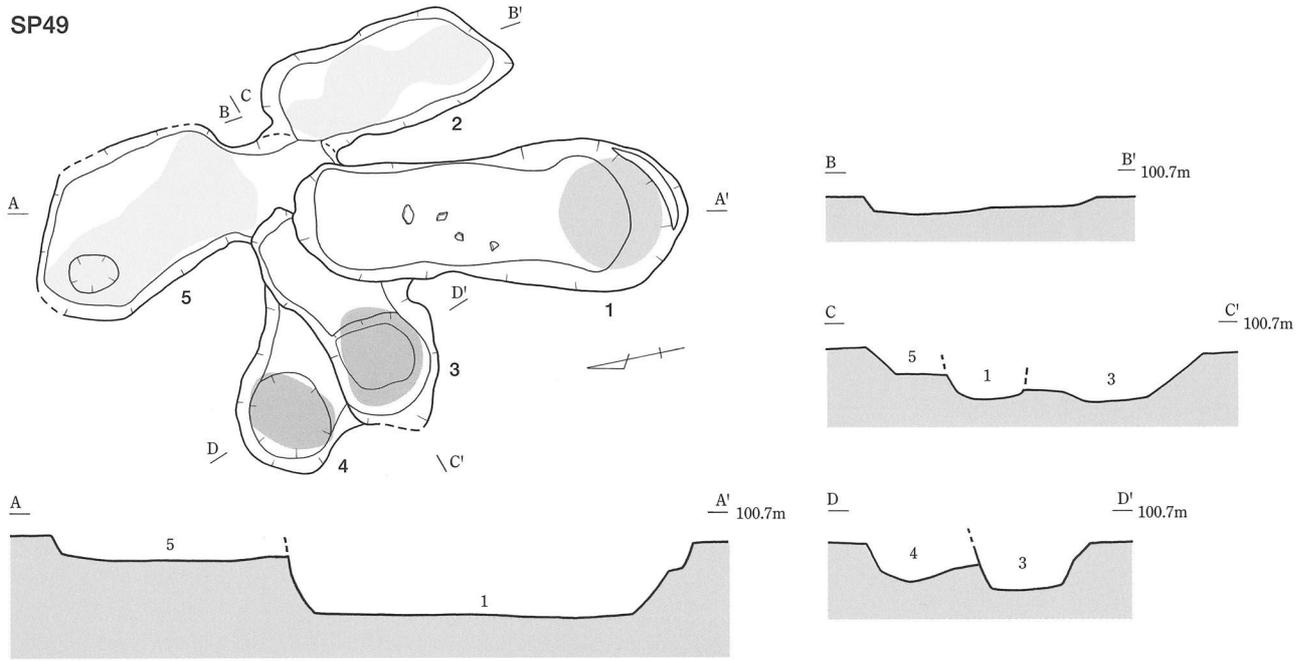
- 1層：黒褐色土(白色粒多量混) 2層：黒褐色土(焼土粒・白色粒・青灰色粒混) 3層：黒褐色土(焼土粒少量混)
- 4層：黒褐色土(焼土粒・Ⅶ層ブロック混) 5層：暗褐色土(焼土粒多量混) 6層：褐色土(Ⅶ層ブロック多量混)
- 7層：明赤褐色土(焼土) 8層：黒色土 9層：暗褐色土(白色粒少量混) 10層：暗褐色土(Ⅶ層ブロック・炭化物混)
- 11層：黒褐色土(Ⅶ層ブロック多量混) 12層：黒褐色土(白色粒混・焼土粒・炭化物粒混)
- 13層：黒褐色土(焼土粒・炭化物粒多量混) 14層：明赤褐色土(焼土)

第28図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(7) [S=1/50]

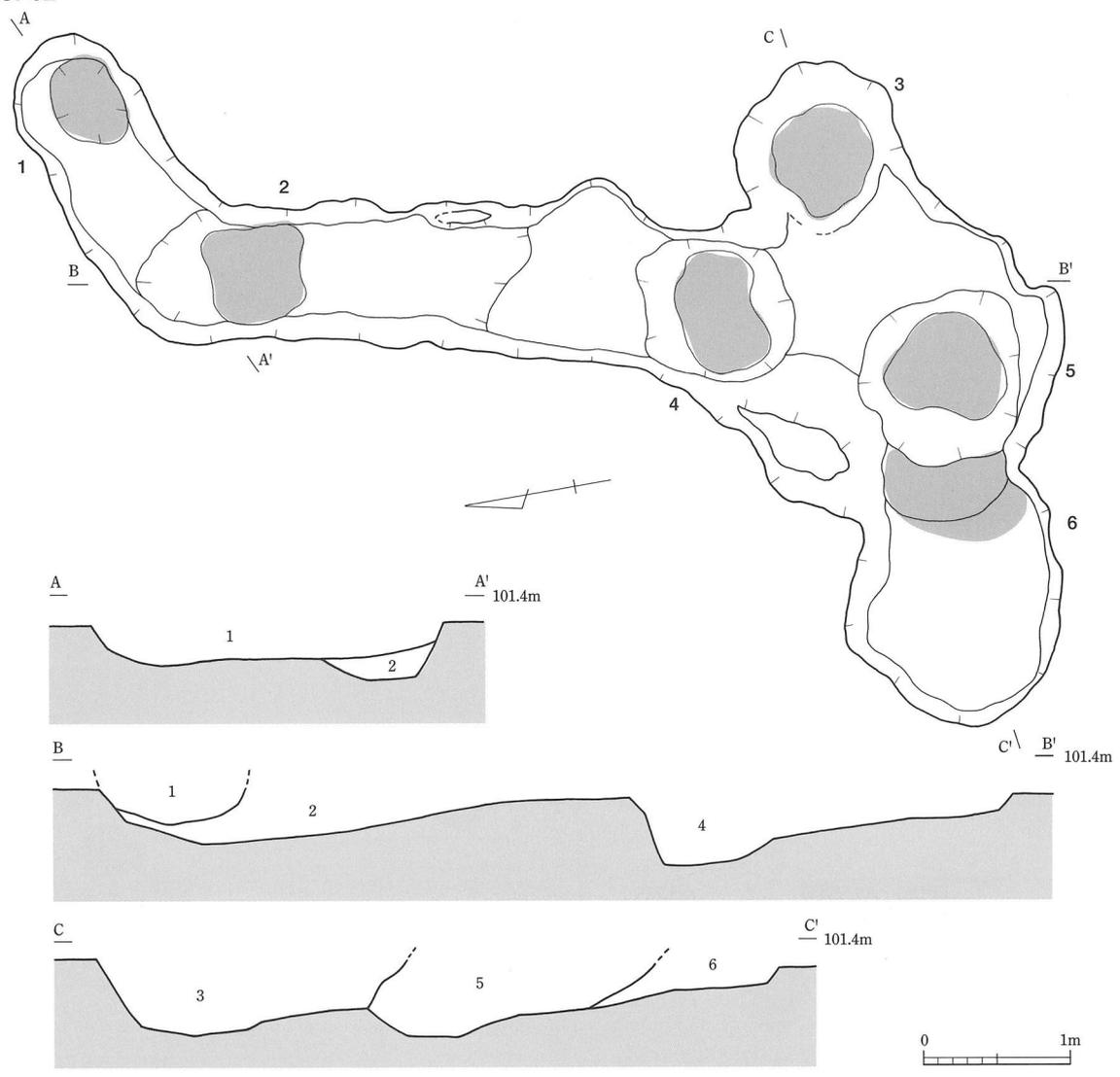


第29図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (8) [S=1/50]

SP49

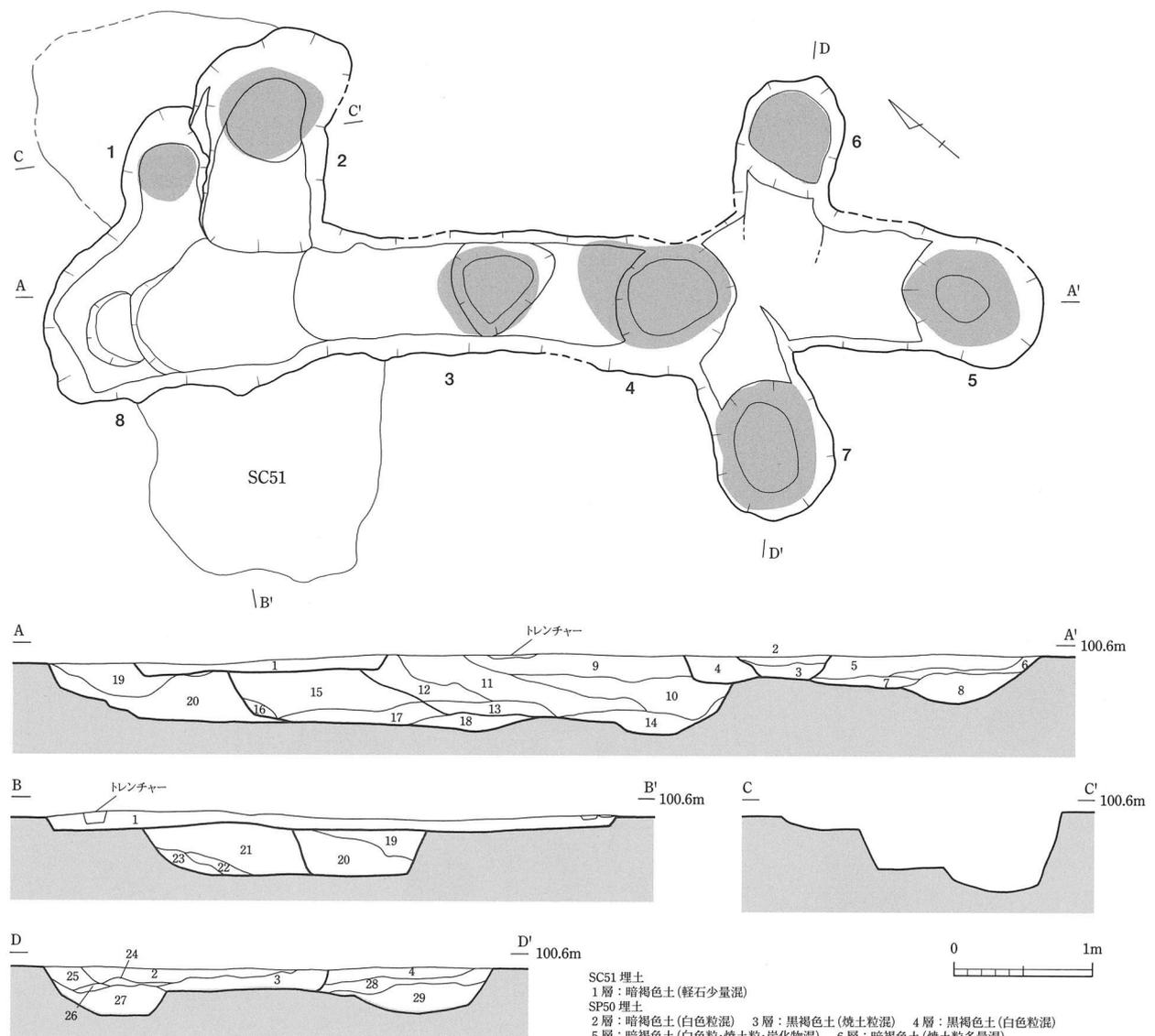


SP52



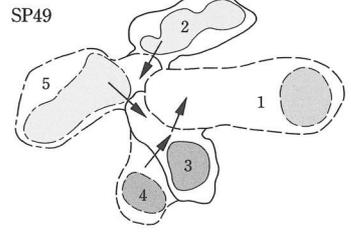
第30図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (9) [S=1/50]

SP50

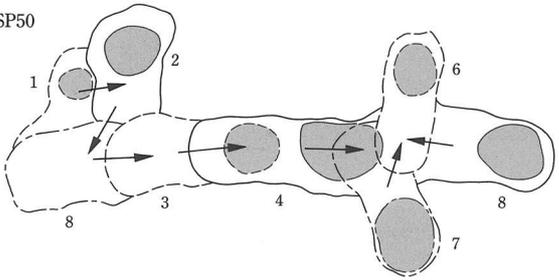


炉穴切り合い関係図

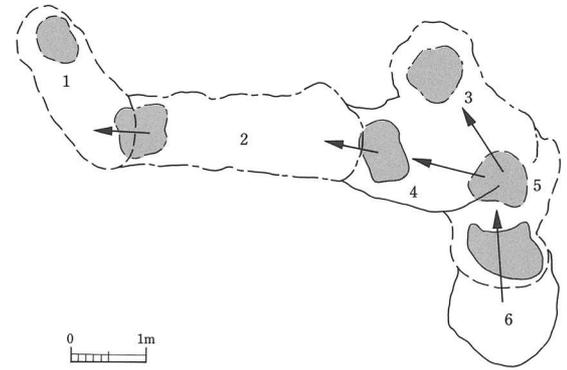
SP49



SP50



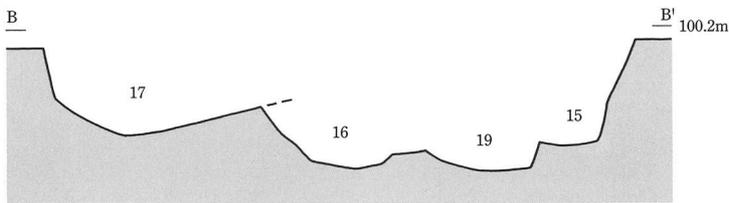
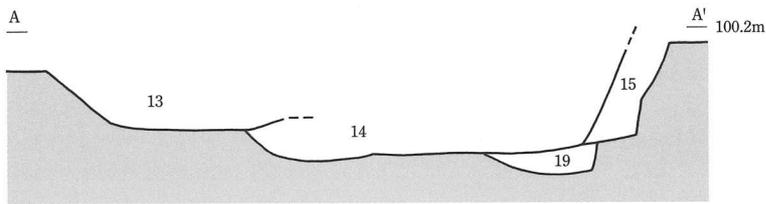
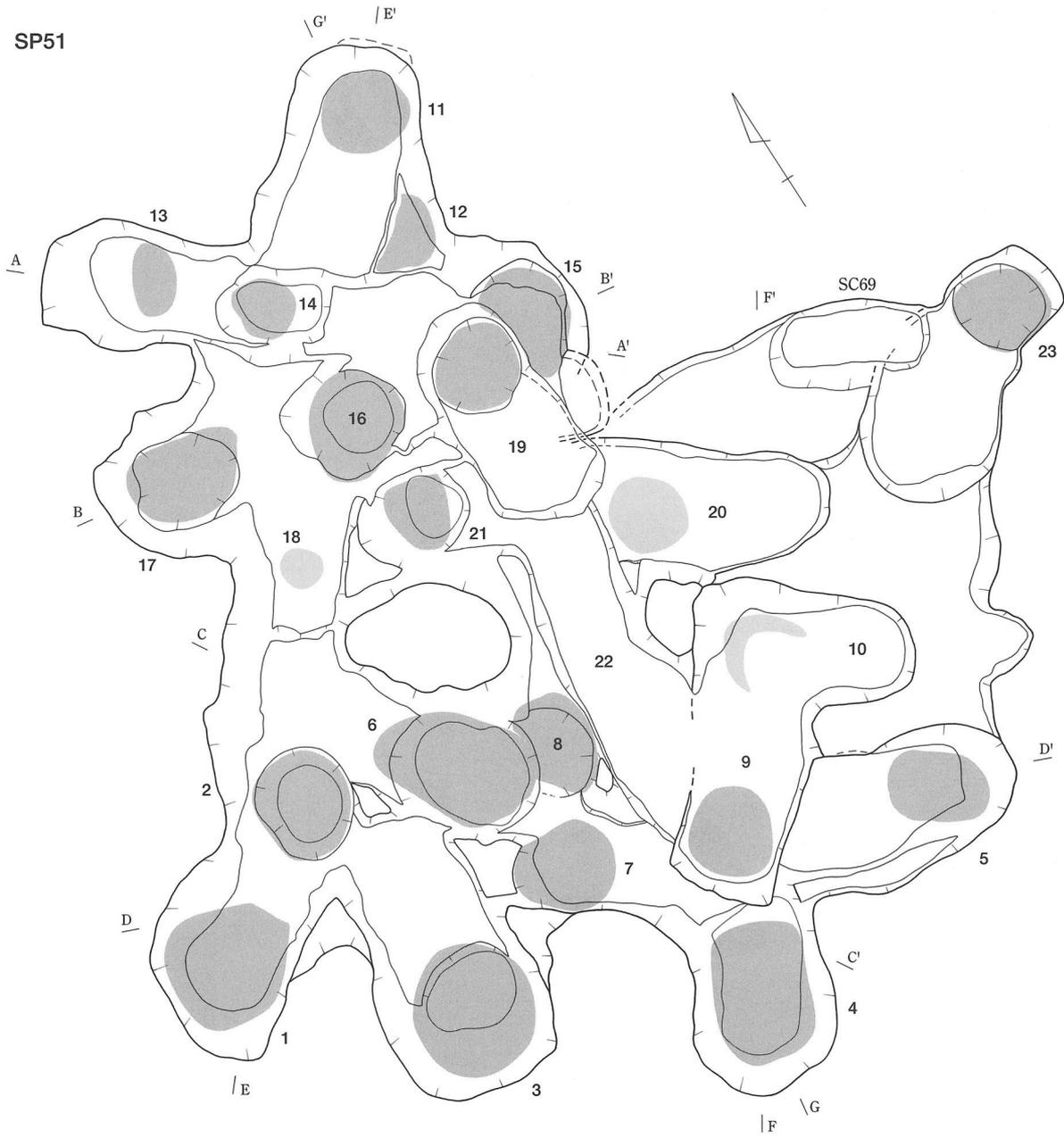
SP52



- SC51 埋土
 1層：暗褐色土(軽石少量混)
 SP50 埋土
 2層：暗褐色土(白色粒混) 3層：黒褐色土(焼土粒混) 4層：黒褐色土(白色粒混)
 5層：暗褐色土(白色粒・焼土粒・炭化物混) 6層：暗褐色土(焼土粒多量混)
 7層：暗褐色土(焼土ブロック・炭化物多量混) 8層：明褐色土(焼土)
 9層：黒褐色土(白色粒多量・炭化物混) 10層：黒褐色土(焼土粒・炭化物多量混) 11層：黒褐色土(焼土ブロック・炭化物多量混)
 12層：黒褐色土(白色粒・Ⅱ層ブロック多量混) 13層：黒褐色土(焼土粒・Ⅱ層部録混) 14層：明褐色土(焼土)
 15層：黒褐色土(白色粒・軽石混) 16層：黒褐色土(焼土粒・炭化物混) 17層：暗褐色土(焼土粒・Ⅲ層ブロック少量混)
 18層：明褐色土(焼土) 19層：黒褐色土(白色粒・炭化物混) 20層：黒褐色土(白色粒少量・炭化物多量混)
 21層：黒褐色土(軽石・炭化物少量混) 22層：暗褐色土(焼土粒・炭化物混) 23層：赤褐色(焼土) 24層：暗褐色土(焼土粒・炭化物混)
 25層：暗褐色土(炭化物多量混) 26層：暗褐色土(焼土ブロック多量混) 27層：明褐色土(焼土) 28層：黒色土(焼土粒・炭化物混)
 29層：明褐色土(焼土)

第31図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(10) [S=1/50]

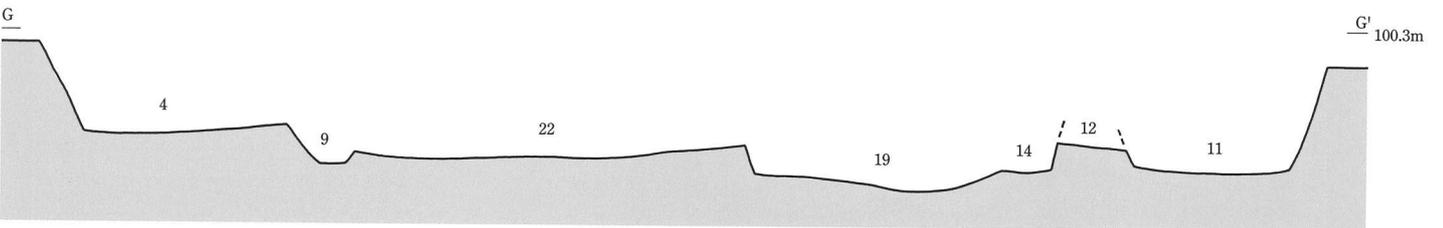
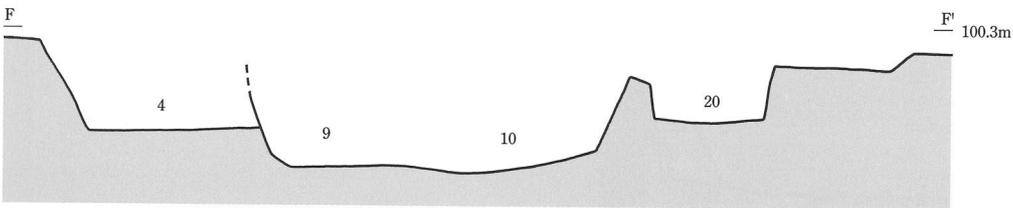
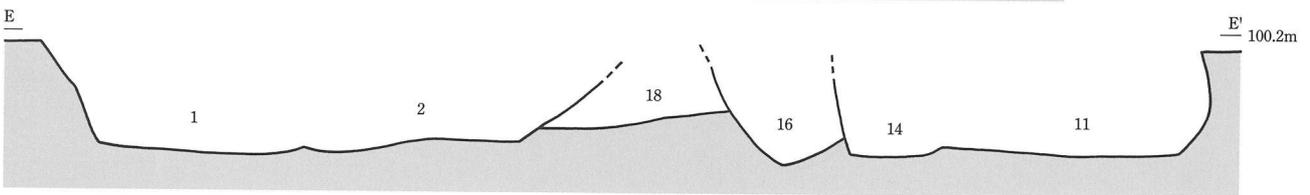
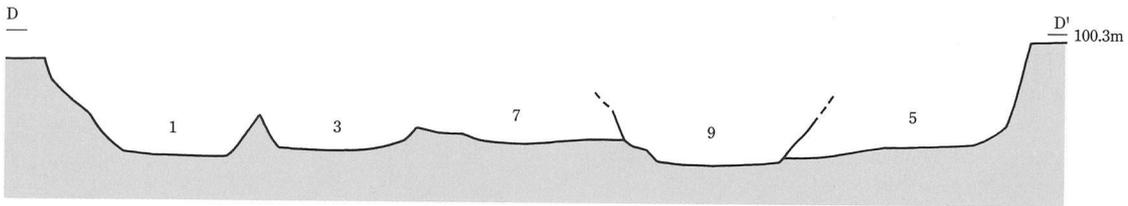
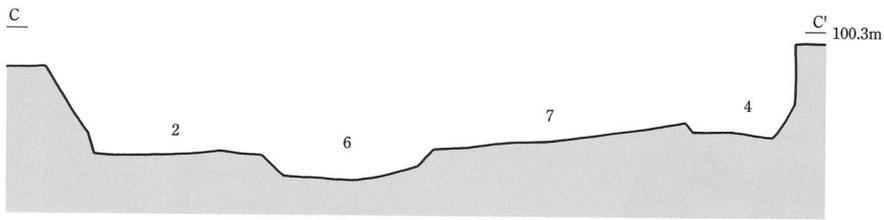
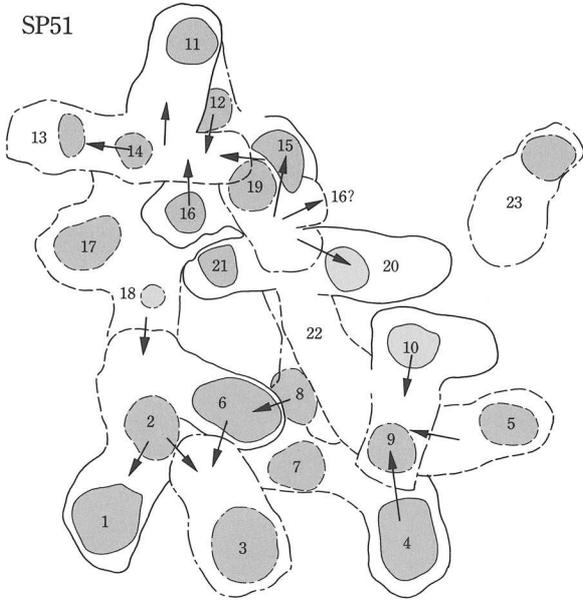
SP51



第32図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(11) [S=1/50]

炉穴切り合い関係図

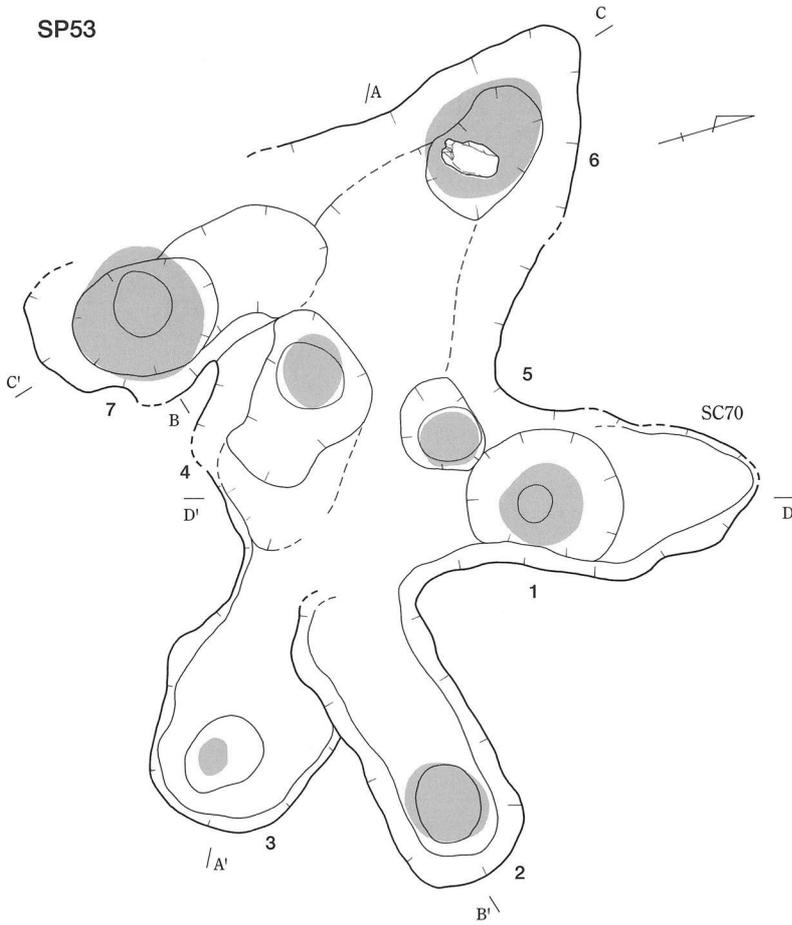
SP51



0 1m

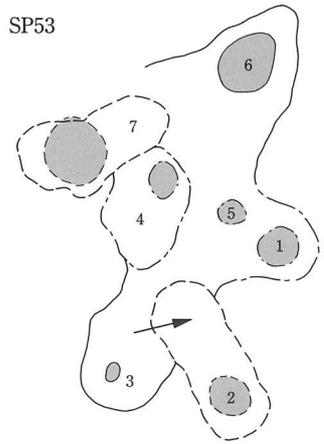
第33図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(12) [S=1/50]

SP53

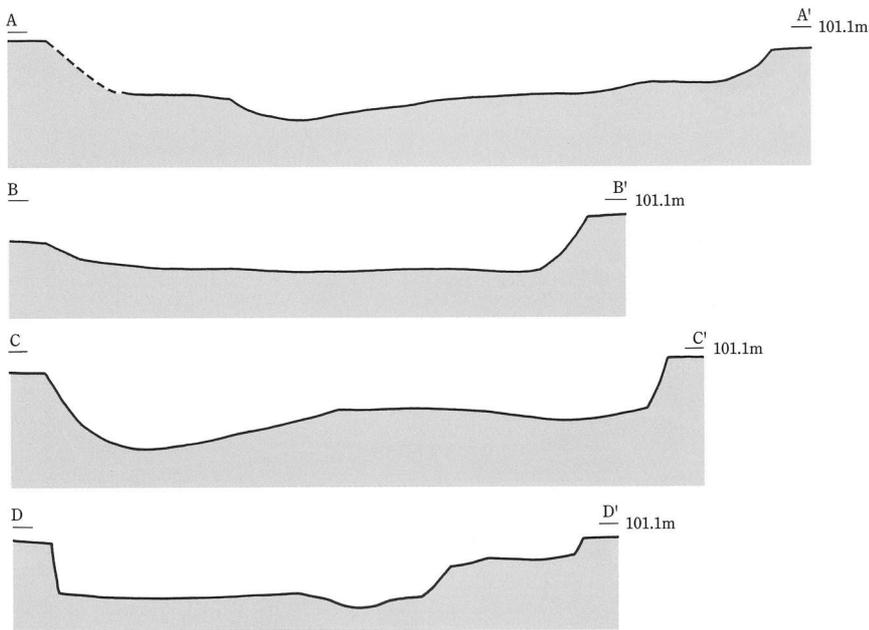
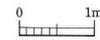
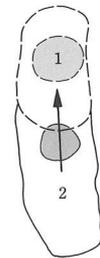


炉穴切り合い関係図

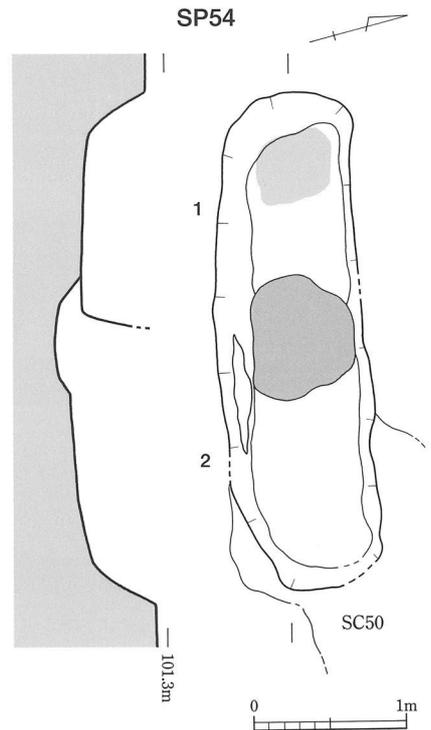
SP53



SP54

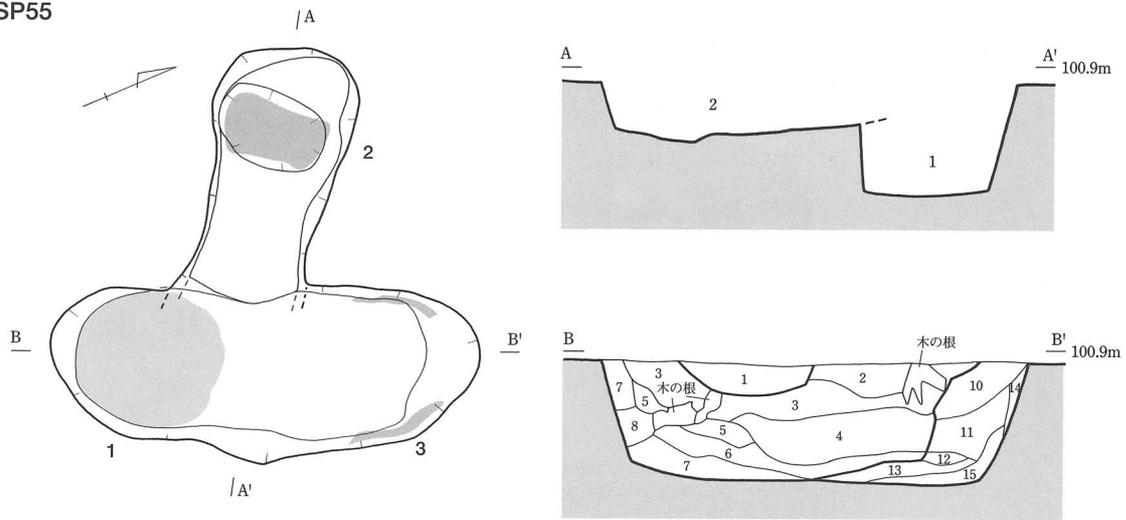


SP54



第34図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(13) [S=1/50]

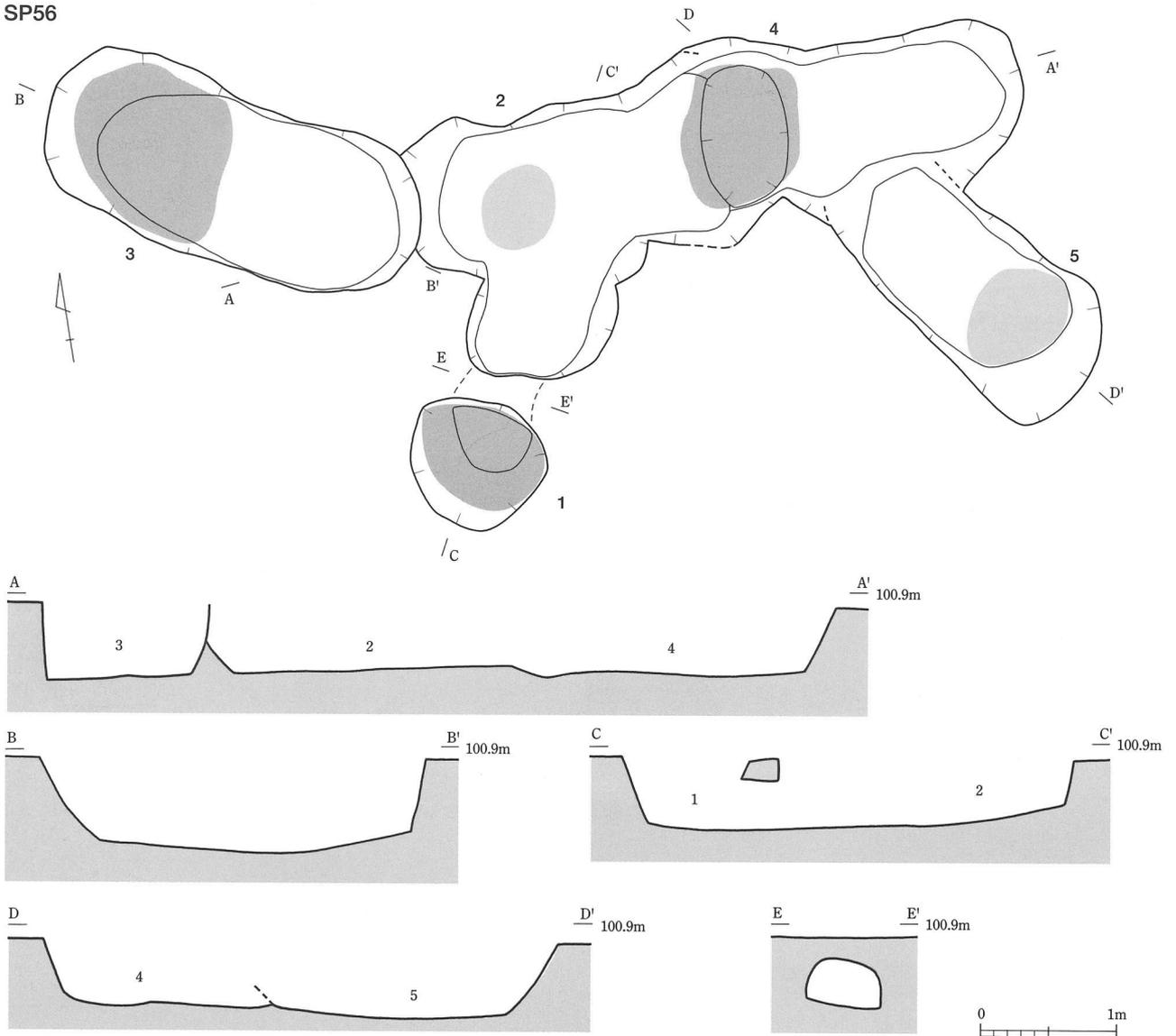
SP55



SP55 埋土

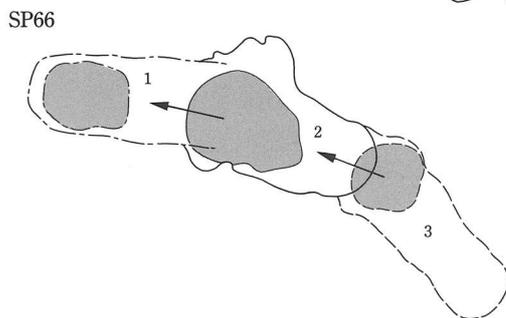
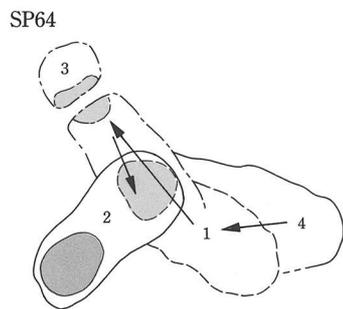
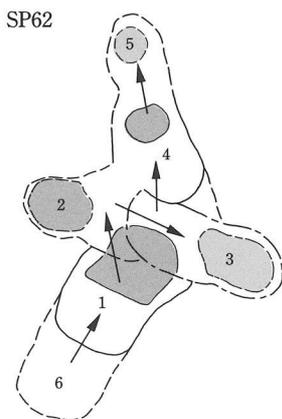
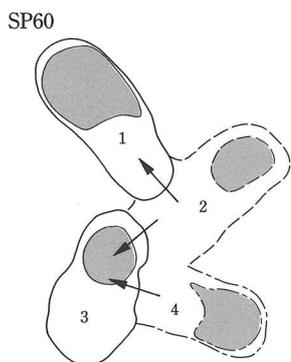
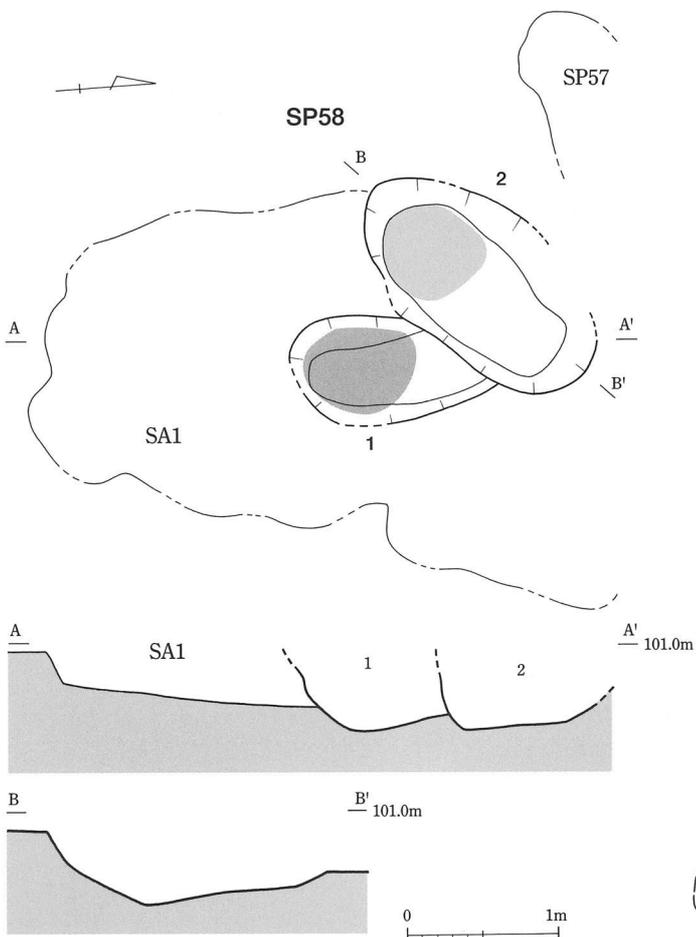
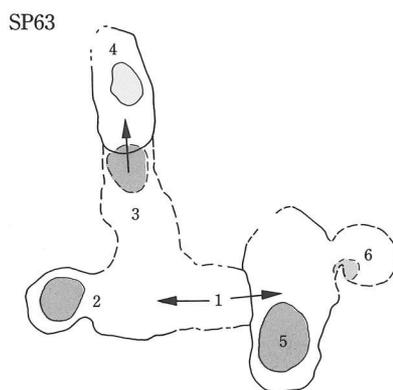
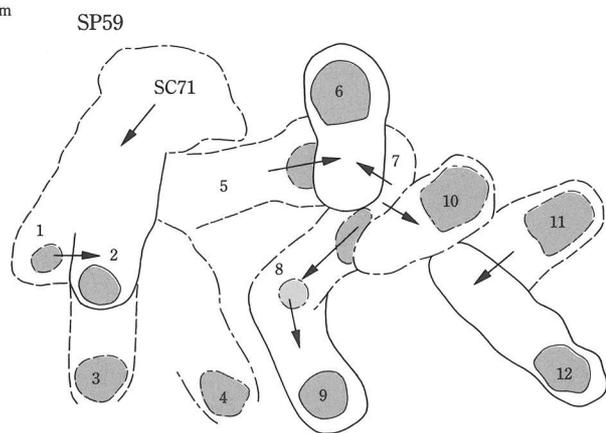
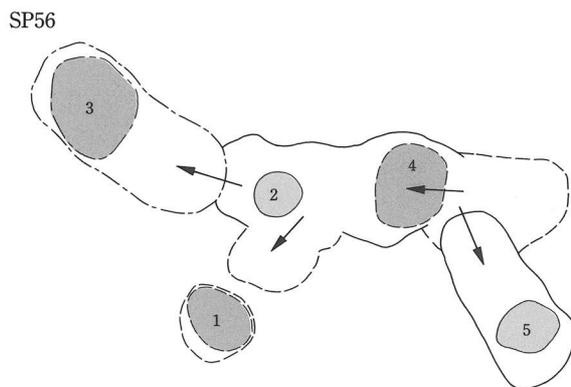
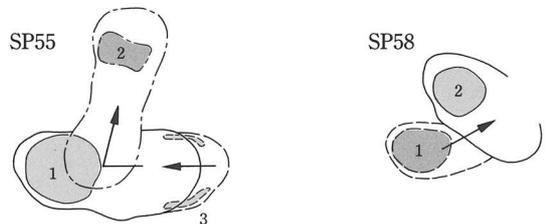
- 1層：黒褐色土(白色粒・軽石混) 2層：暗褐色土(白色粒混) 3層：黒褐色土(軽石少量混) 4層：黒褐色土(粘性) 5層：極暗褐色土(粘性強) 6層：暗褐色土(軽石少量混・粘性)
 7層：黒褐色土(軽石少量混・粘性) 8層：黒褐色土(焼土粒混) 9層：褐色土(焼土粒多量混) 10層：黒褐色土(白色粒多量混) 11層：黒褐色土(白色粒・軽石少量混)
 12層：暗褐色土(焼土粒少量混・粘性) 13層：暗褐色土(焼土粒多量混) 14層：暗褐色土(焼土粒少量混・粘性強) 15層：暗褐色土(焼土粒・Ⅷ層ブロック多量混)

SP56

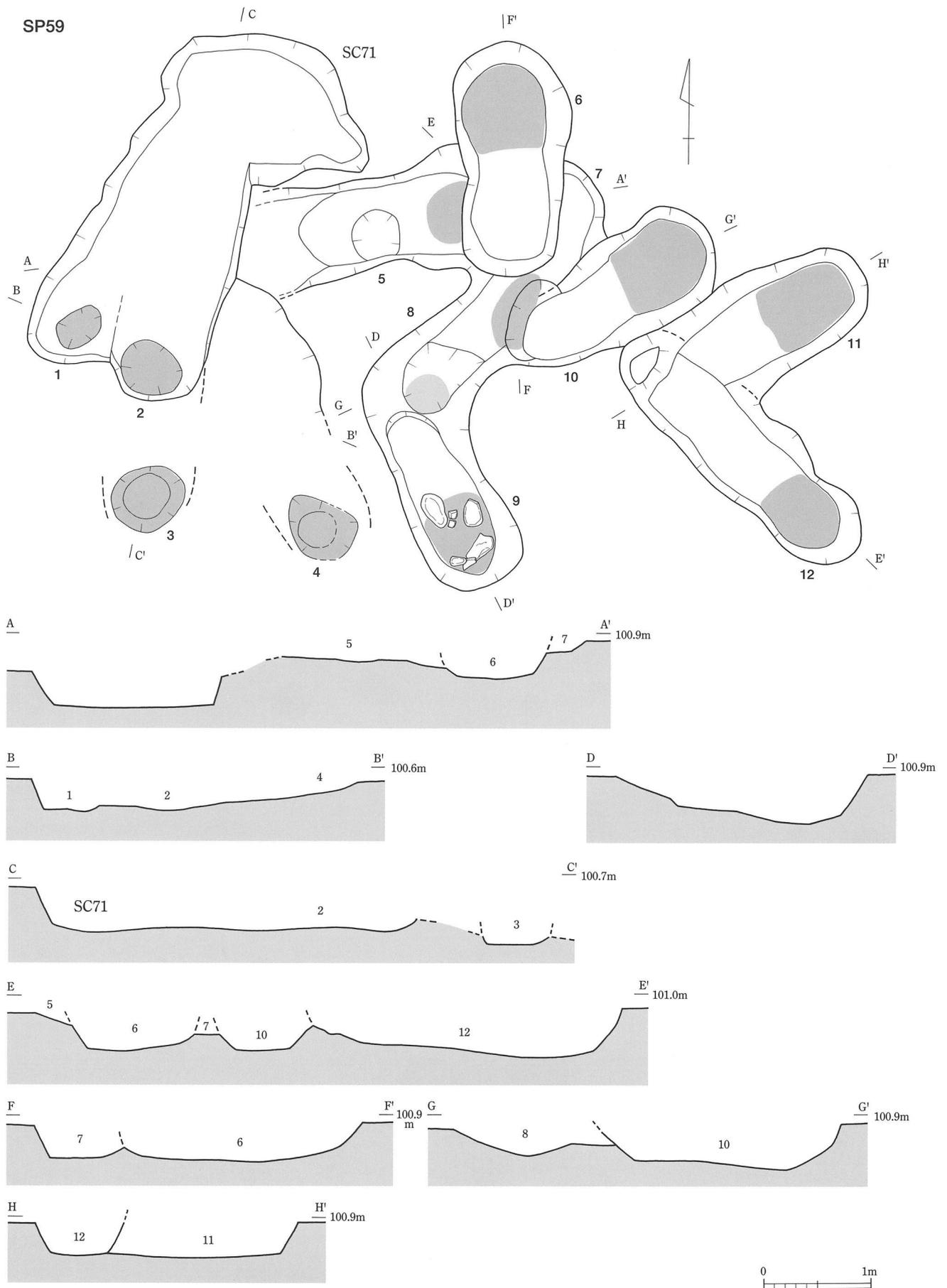


第35図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(14) [S=1/50]

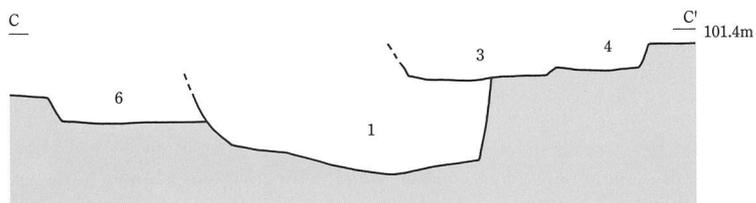
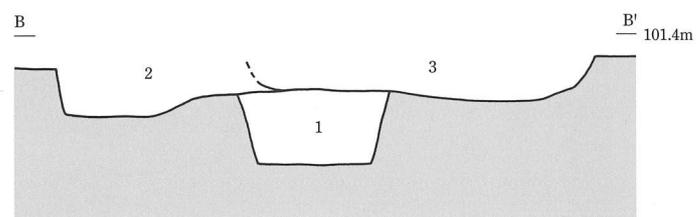
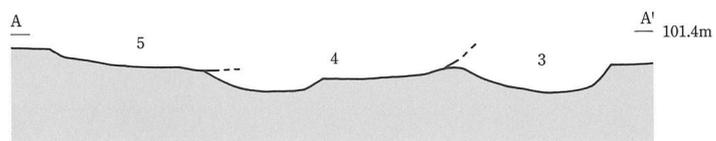
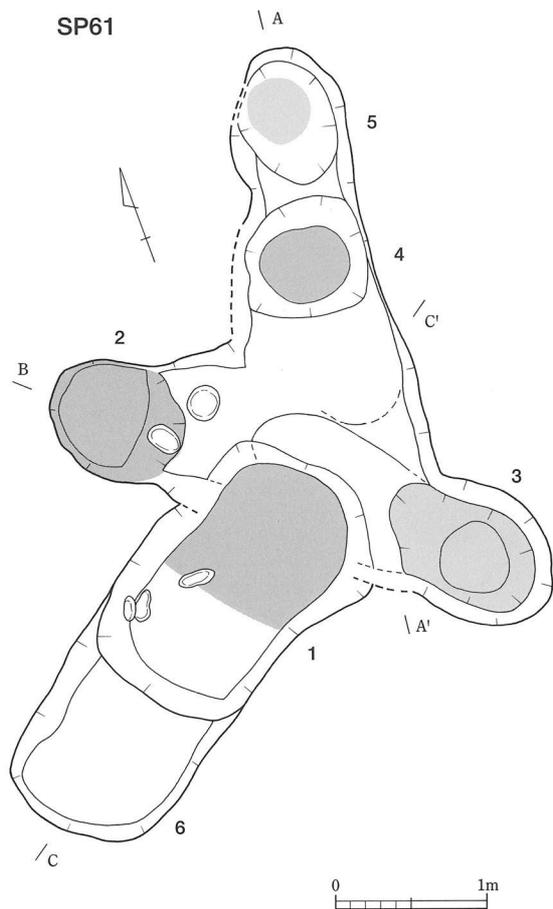
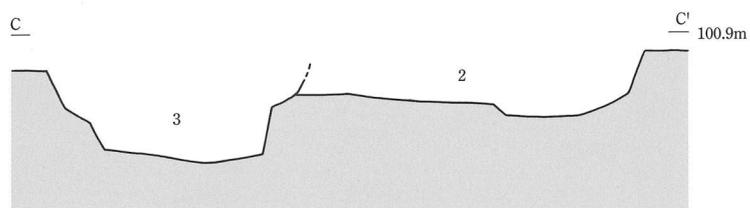
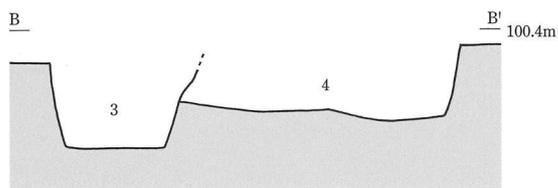
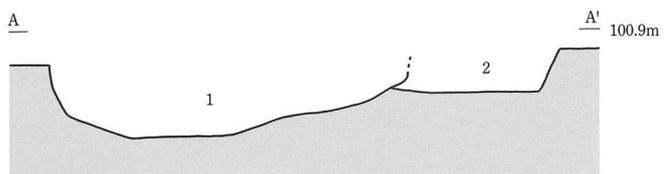
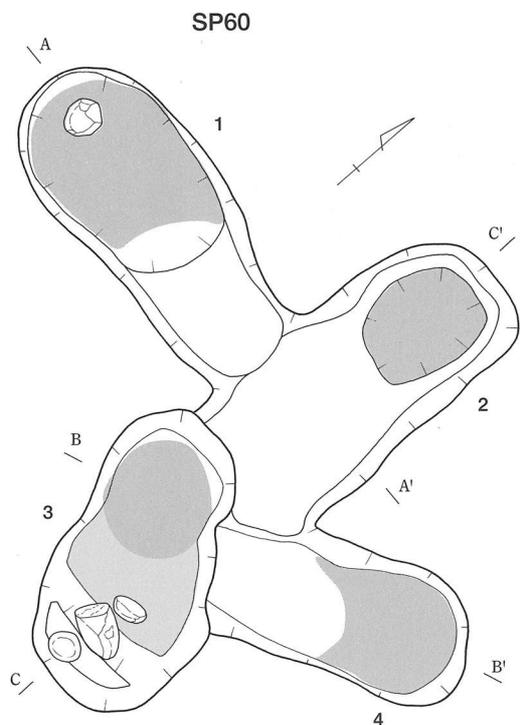
炉穴切り合い関係図



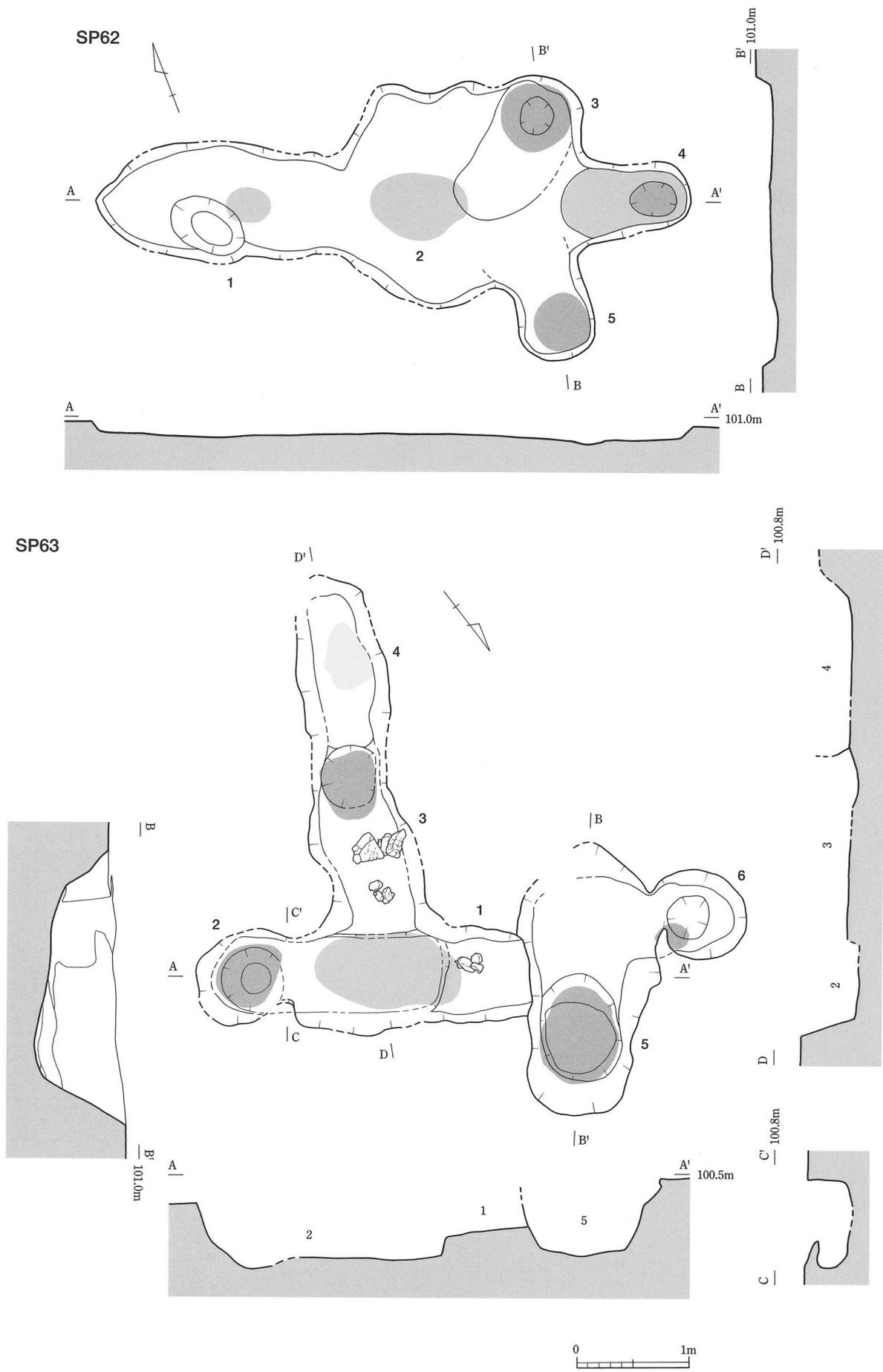
第36図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (15) [S=1/50]



第37図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(16) [S=1/50]

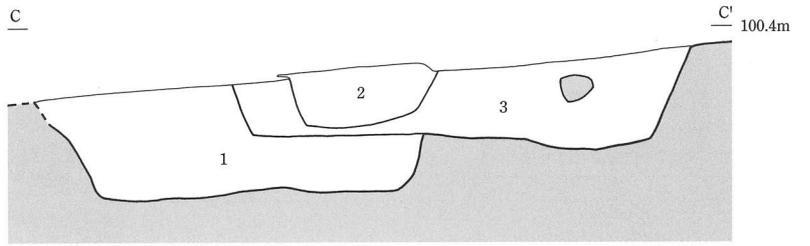
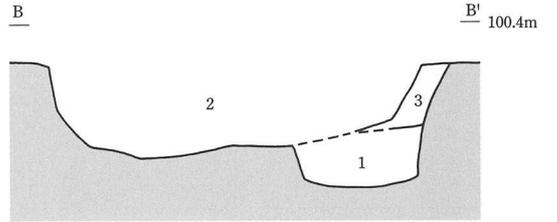
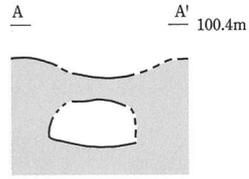
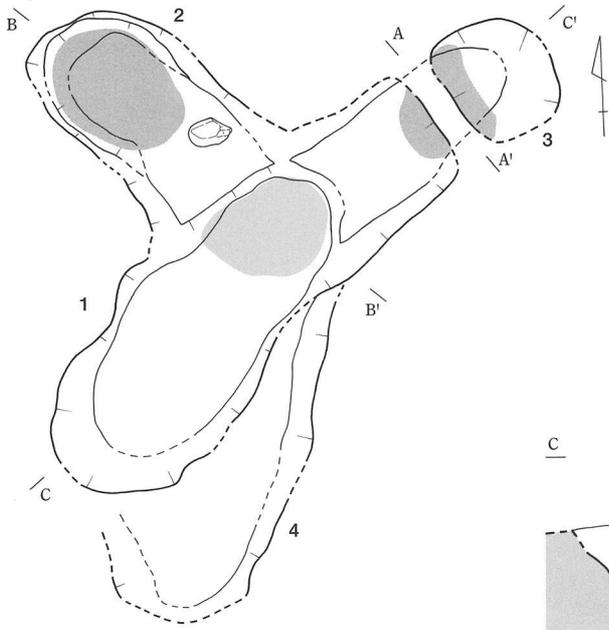


第38图 别府原遺跡 炉穴(SP)実測図(17) [S=1/50]

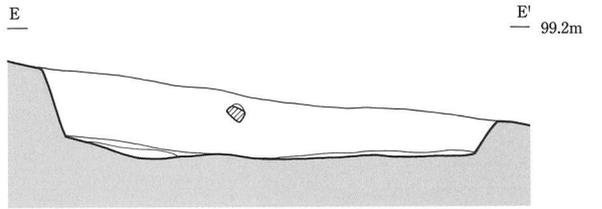
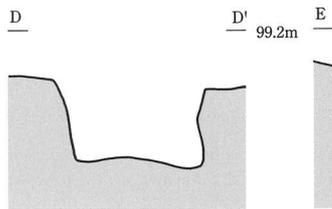
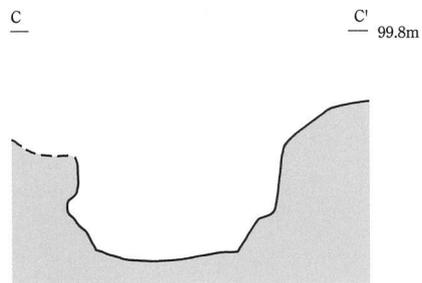
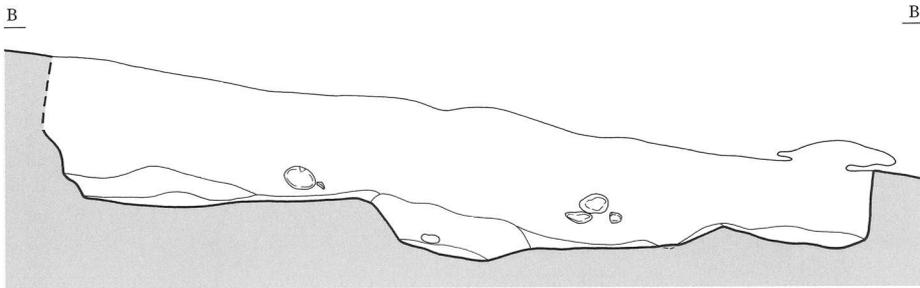
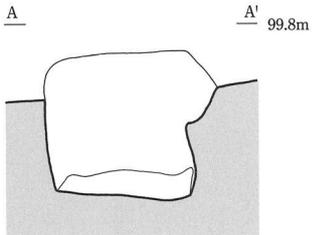
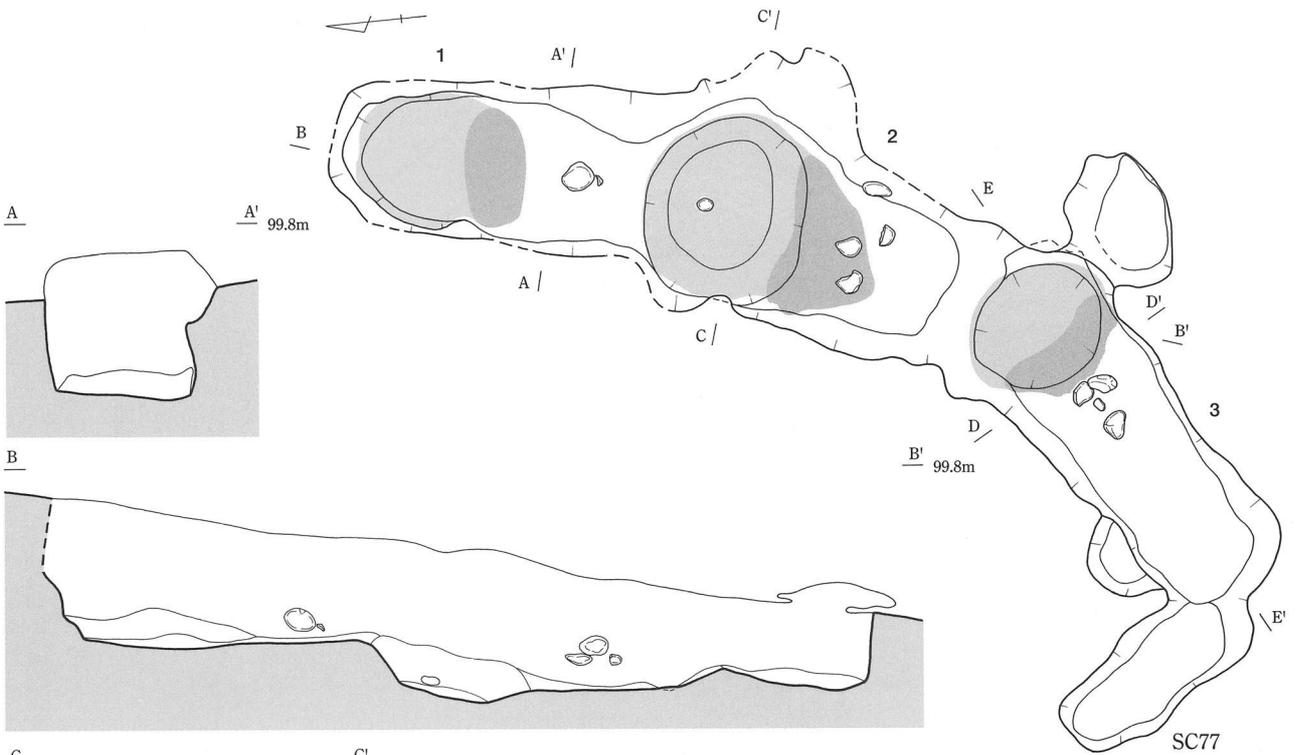


第39図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(18) [S=1/50]

SP64



SP66

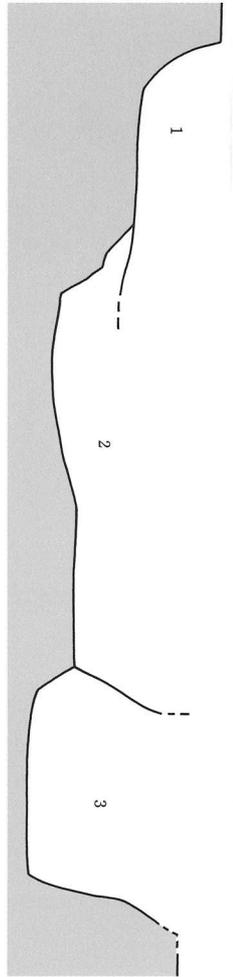


SC77

第40图 别府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (19) [S=1/50]

SP65

A

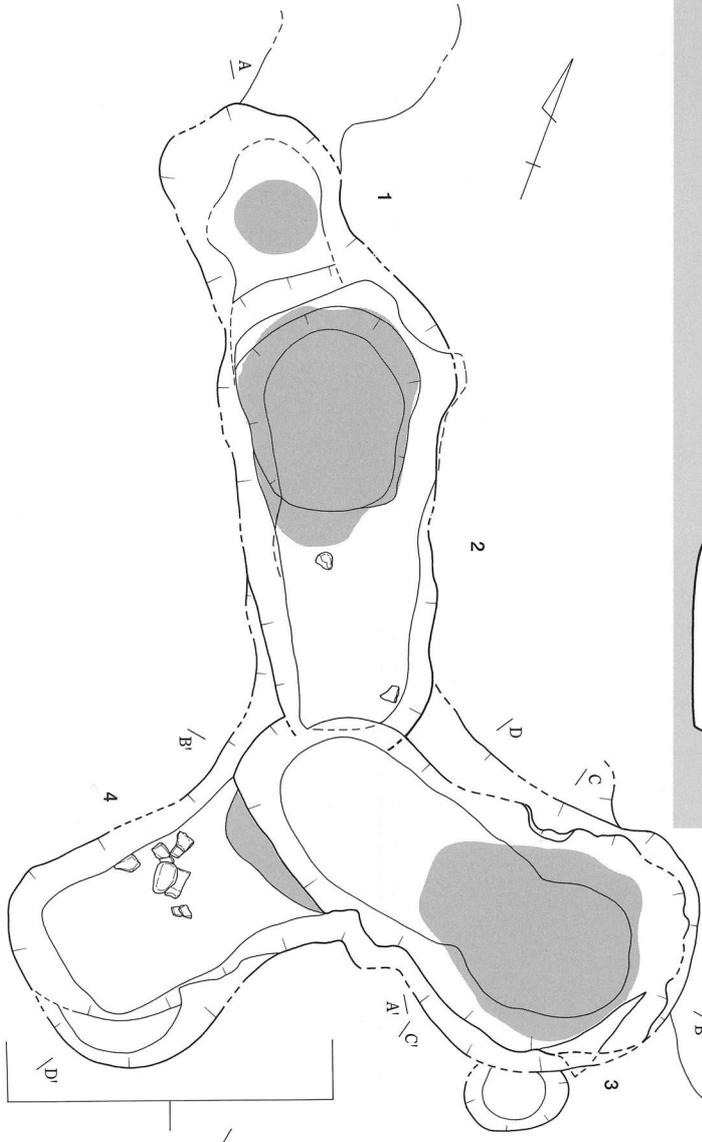
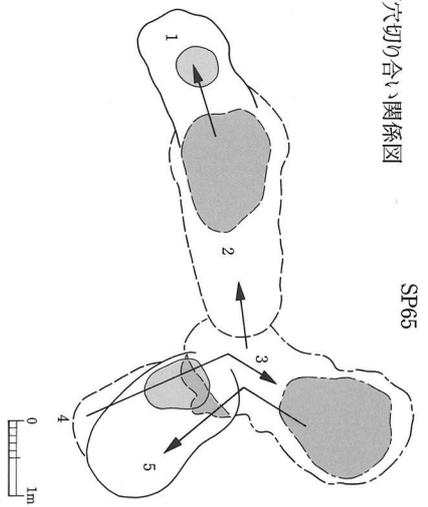


A' 100.0m

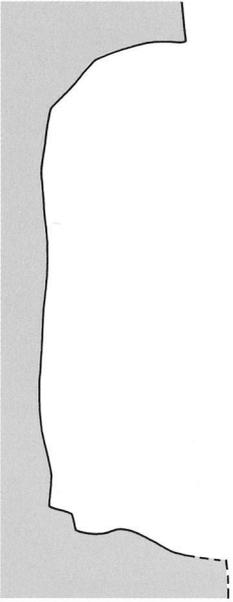
層位横斬

炉穴切り合い関係図

SP65

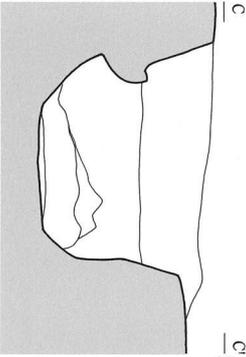


B



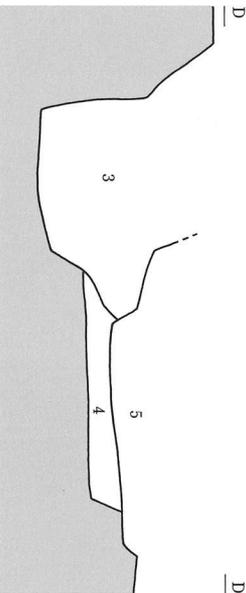
B' 100.0m

C



C' 100.0m

D



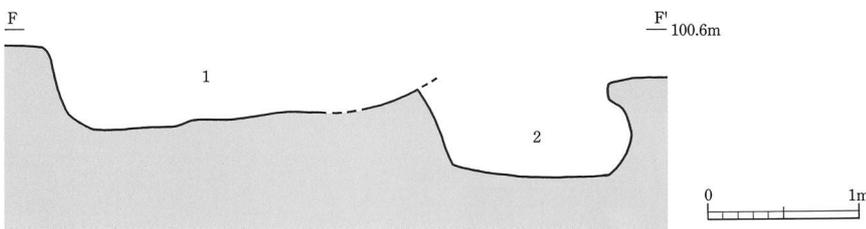
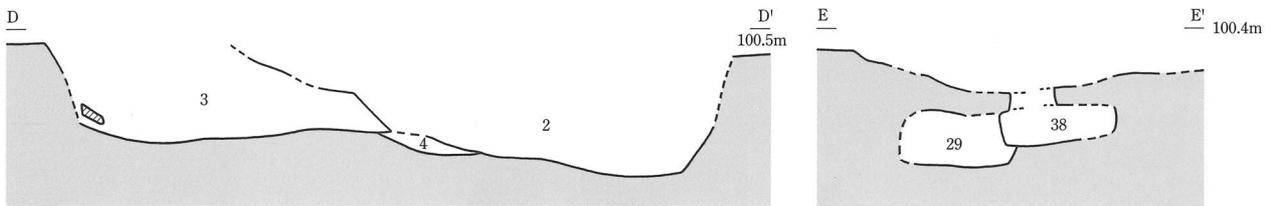
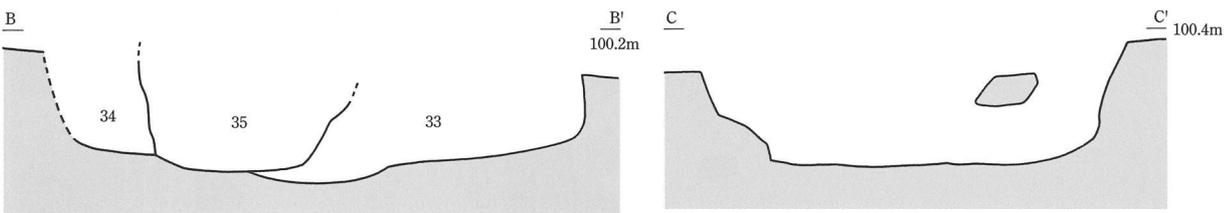
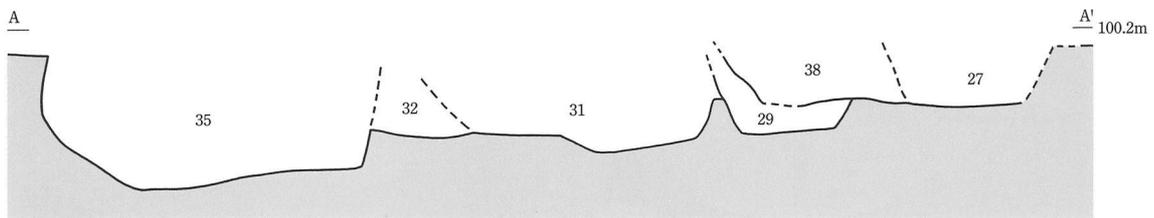
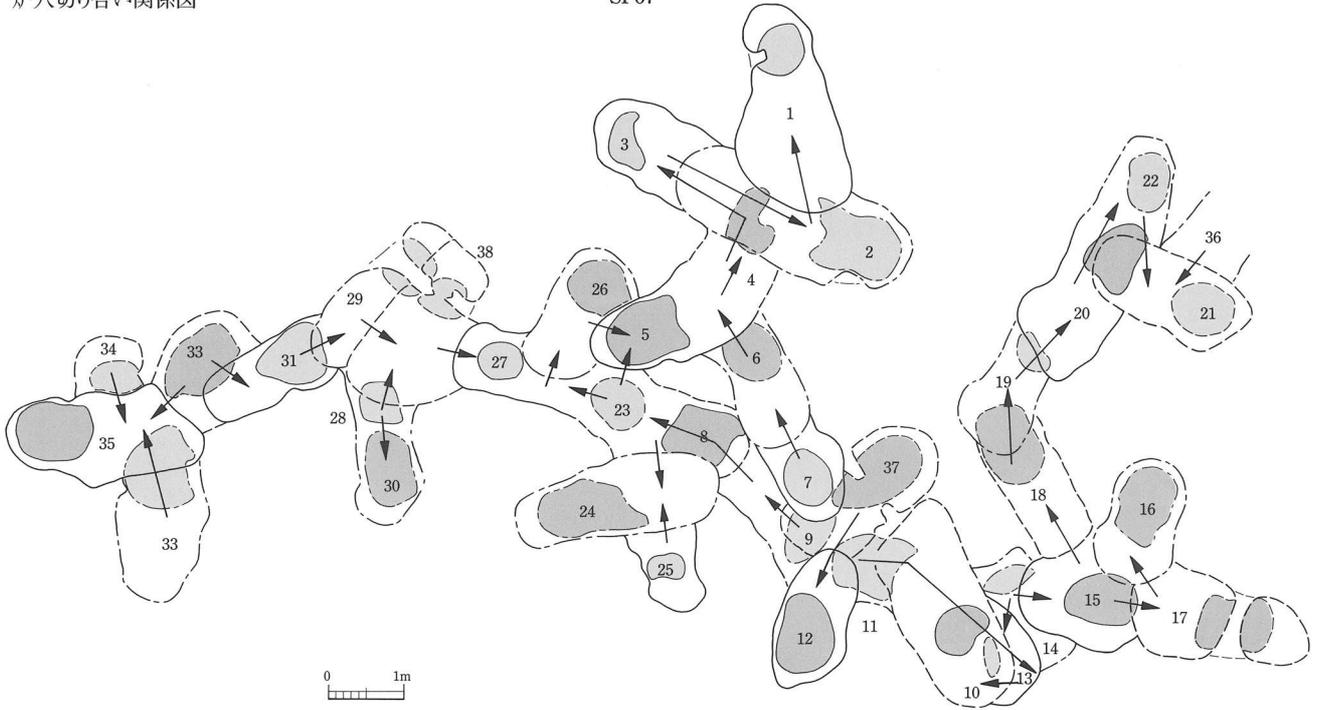
D' 100.0m



第41図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(20) [S=1/50]

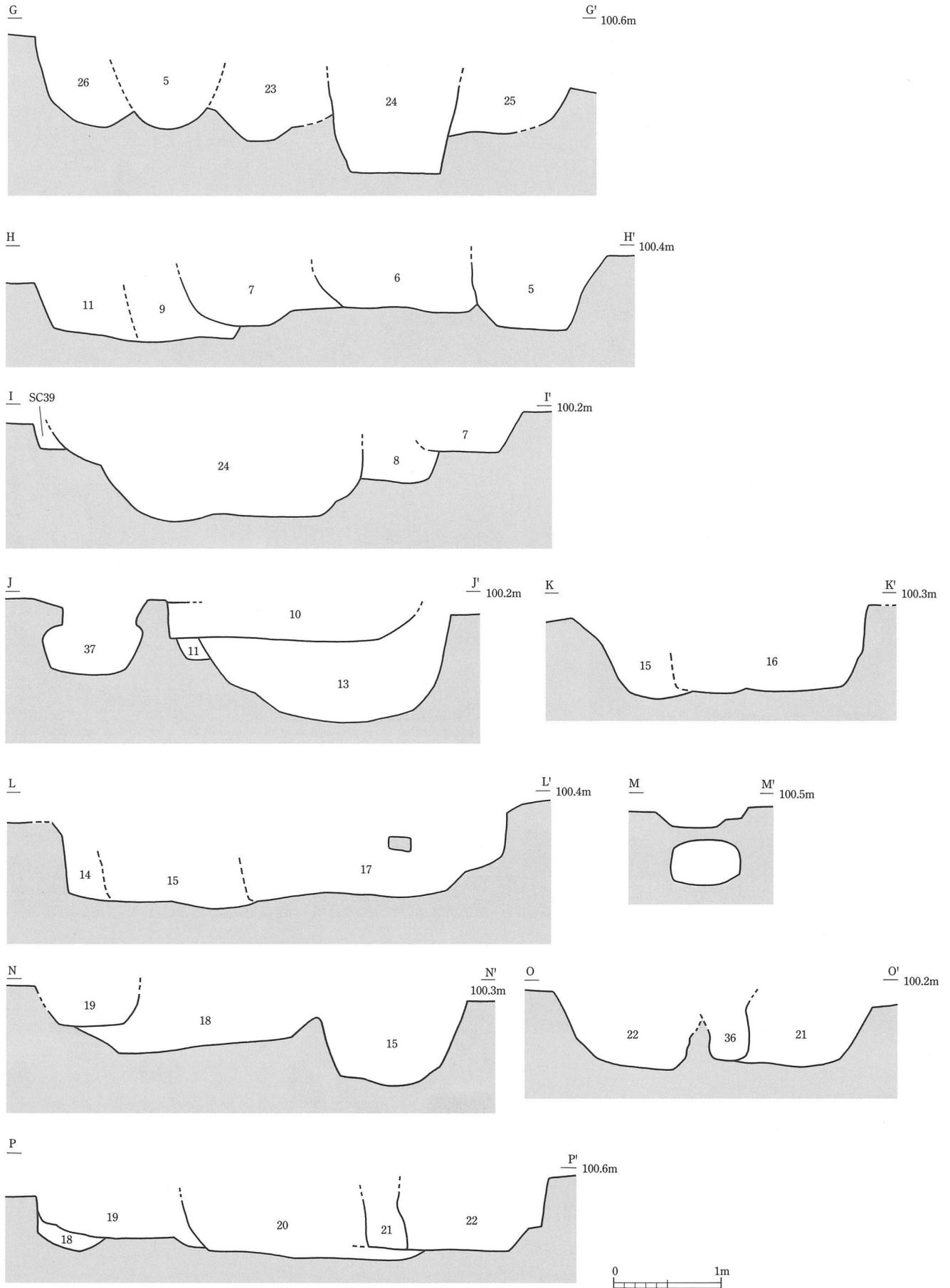


第42図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (21) [S=1/50]

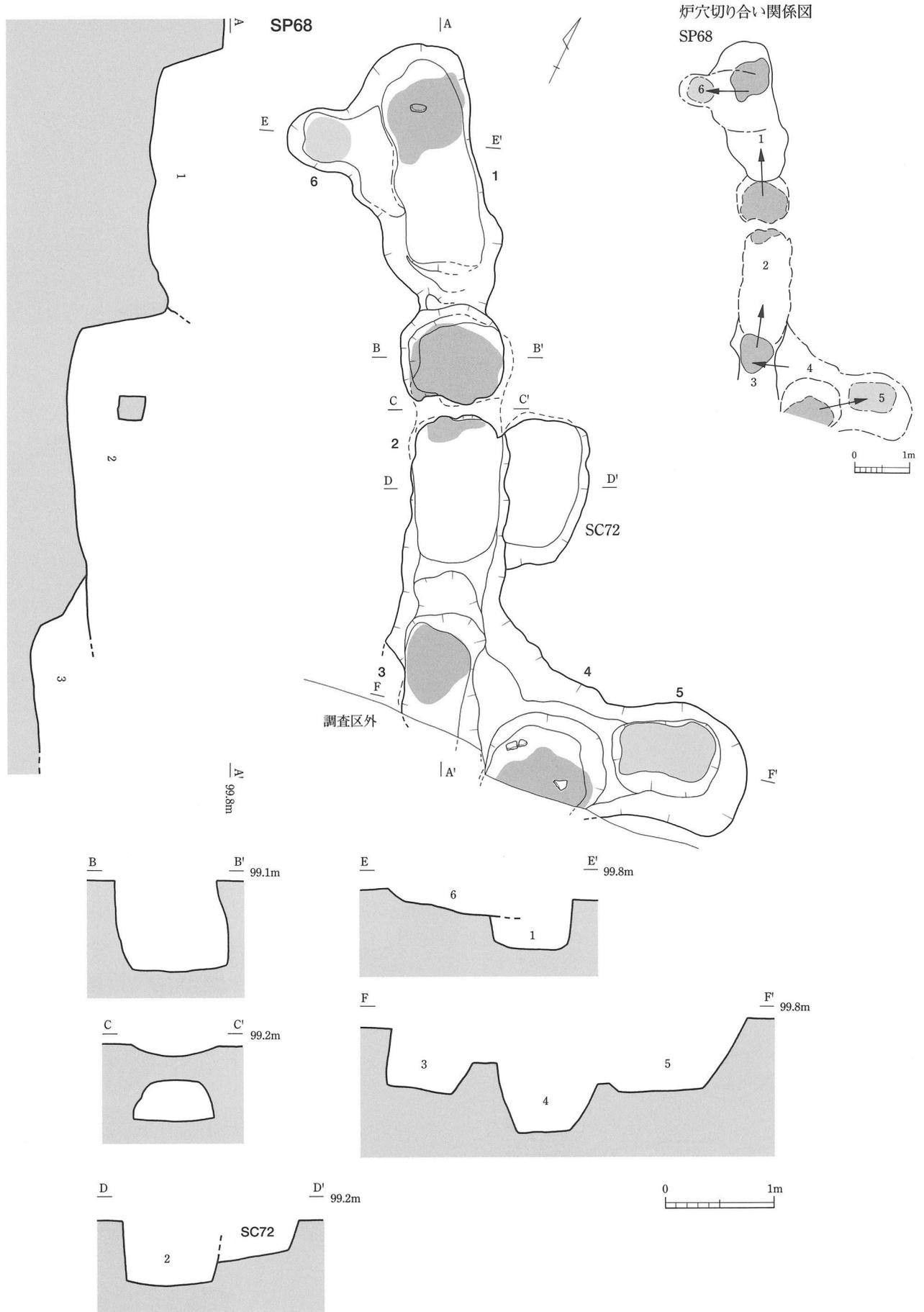


第43図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(22) [S=1/50]

SP67



第44図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (23) [S=1/50]



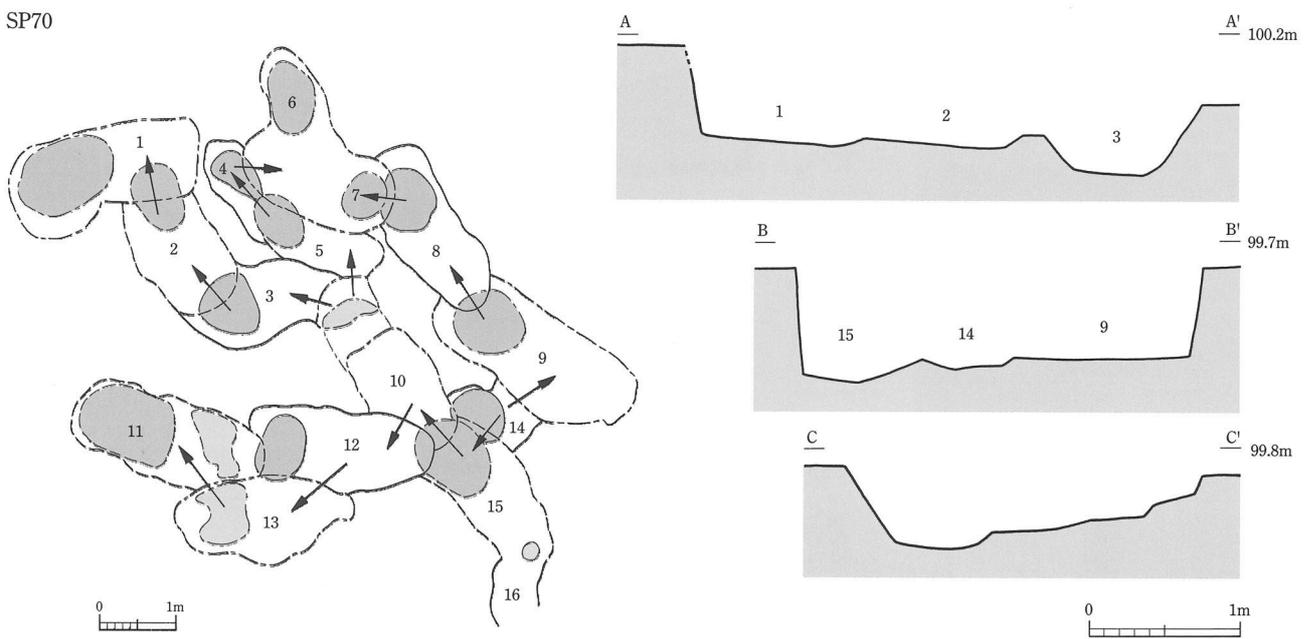
第45図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (24) [S=1/50]

SP70

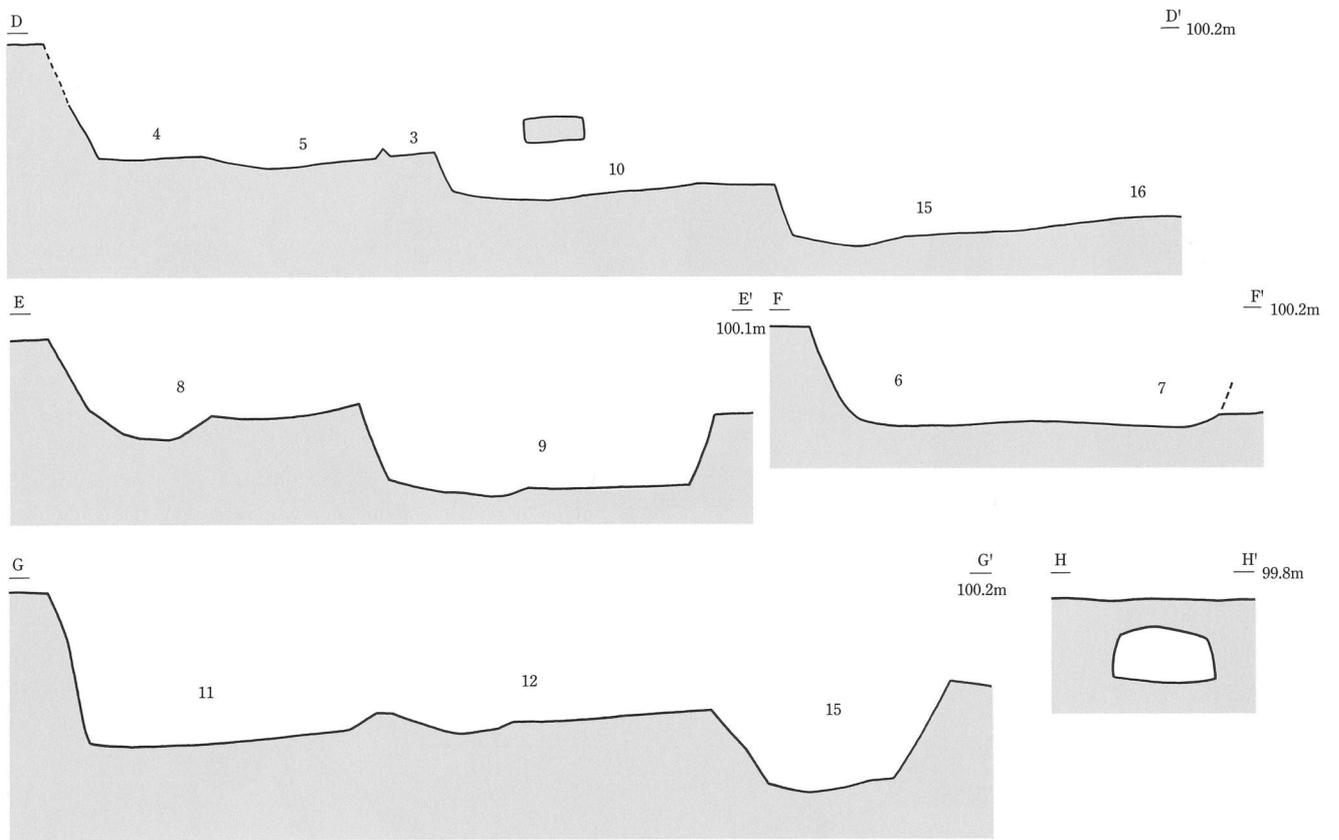


炉穴切り合い関係図

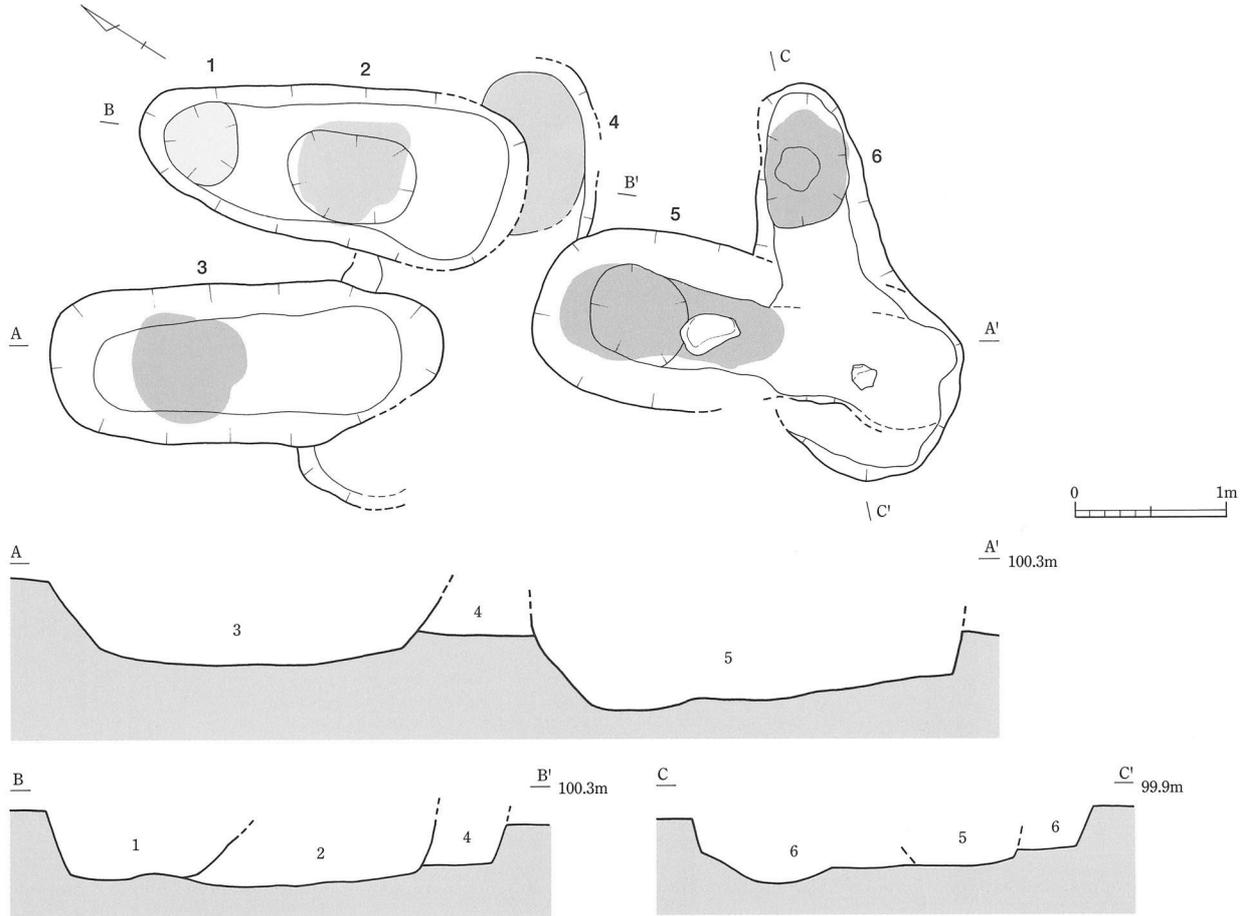
SP70



第46図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(25) [S=1/50]



SP71



第47图 别府原遺跡 炉穴(SP)実測図(26) [S=1/50]

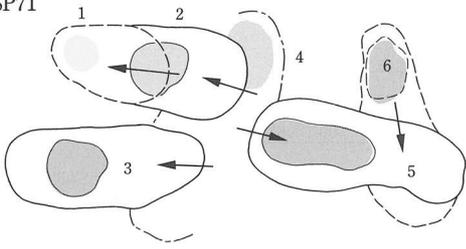
SP72



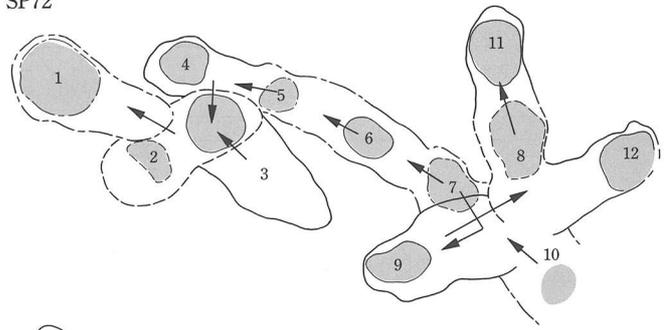
第48図 別府原遺跡 炉穴 (SP) 実測図 (27) [S=1/50]

炉穴切り合い関係図

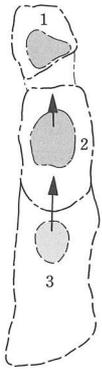
SP71



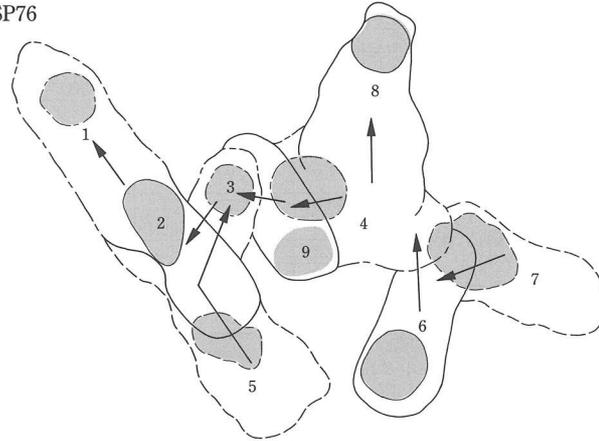
SP72



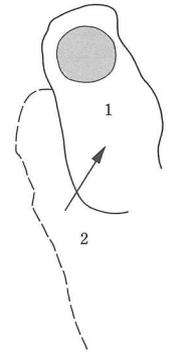
SP73



SP76

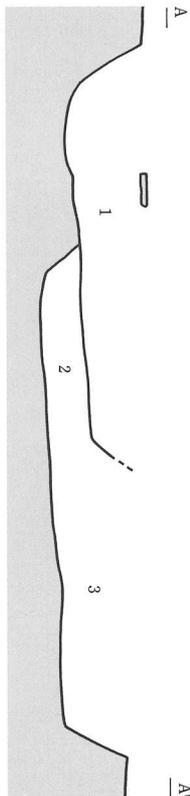


SP81

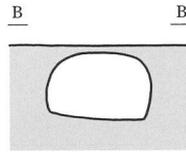
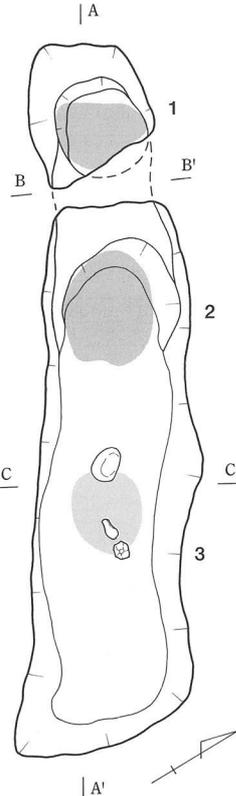


0 1m

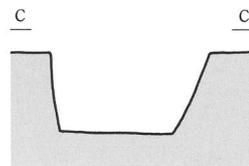
SP73



0 100.9m

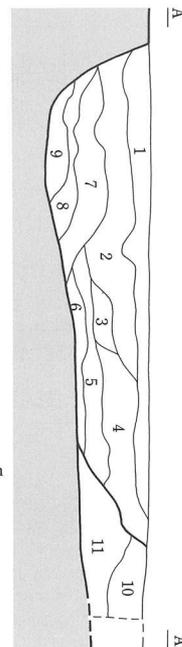


100.9m

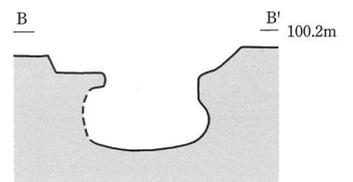
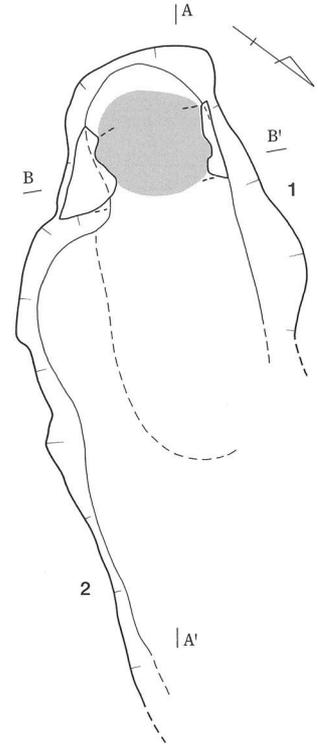


100.9m

SP81



100.2m



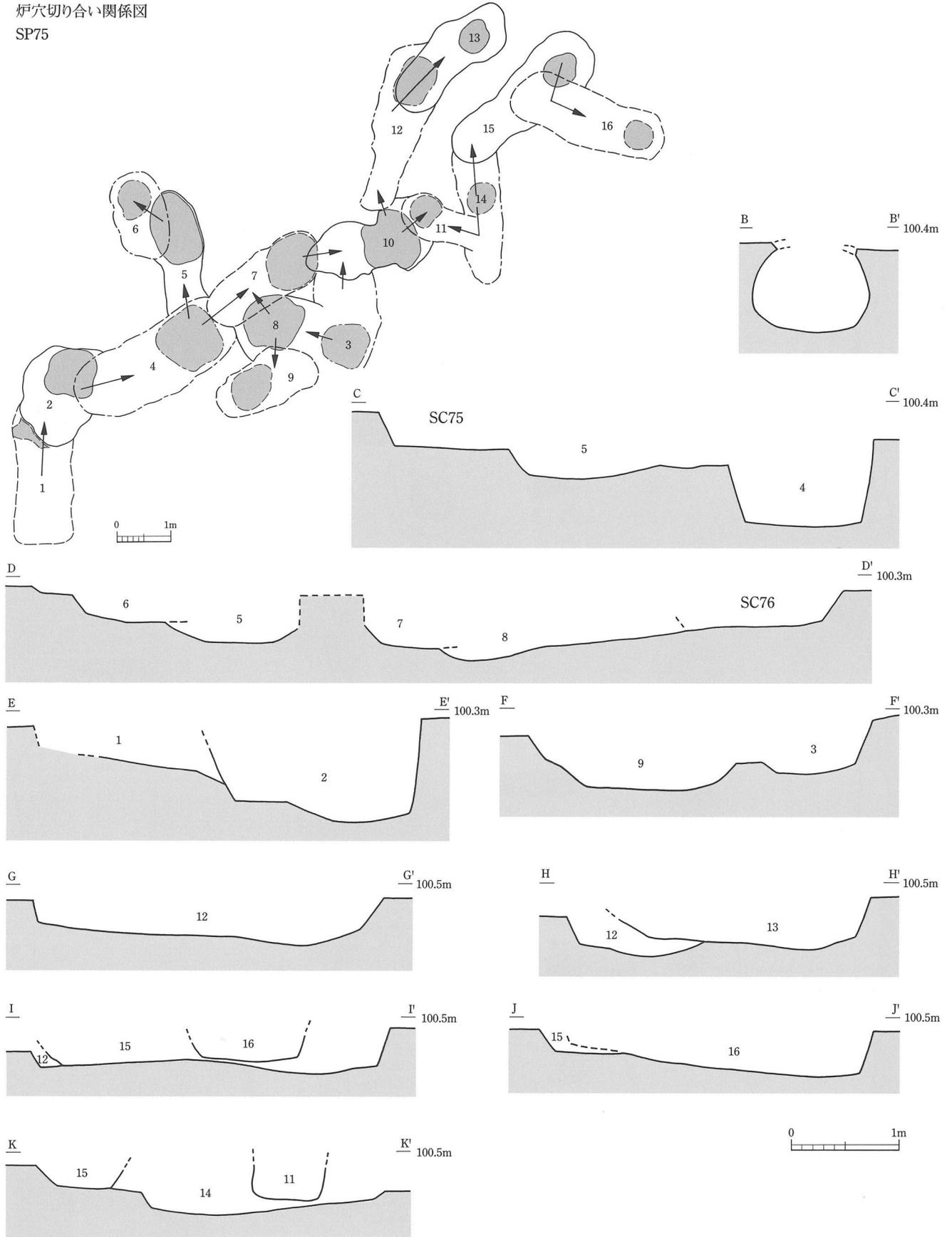
100.2m

SP81埋土

- 1層：黒褐色土(白色粒多量混・青灰色粒混)
- 2層：黒褐色土(Ⅷ層ブロック混)
- 3層：暗褐色土(焼土粒少量混)
- 4層：黒褐色土(焼土粒・炭化物少量混)
- 5層：黒褐色土(焼土粒混)
- 6層：暗褐色土(焼土粒・Ⅷ層ブロック混)
- 7層：暗褐色土(焼土粒・炭化物多量混)
- 8層：褐色土(焼土粒多量混)
- 9層：明褐色土(焼土)
- 10層：暗褐色土(Ⅷ層ブロック少量混)
- 11層：暗褐色土(焼土粒少量混・Ⅷ層ブロック多量混)

第49図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(28) [S=1/50]

炉穴切り合い関係図
SP75

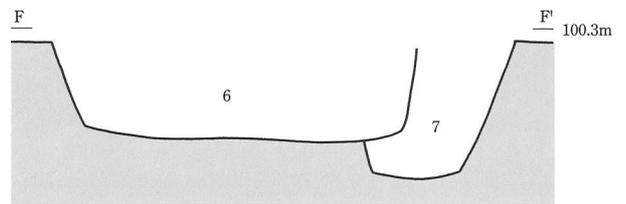
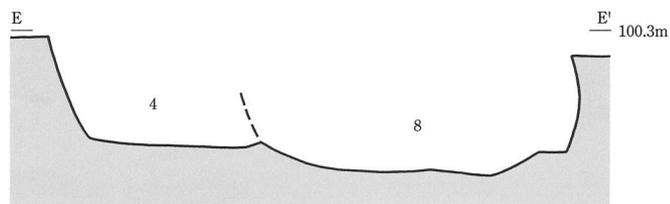
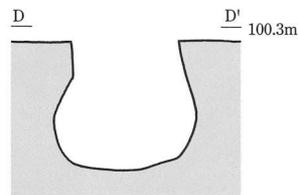
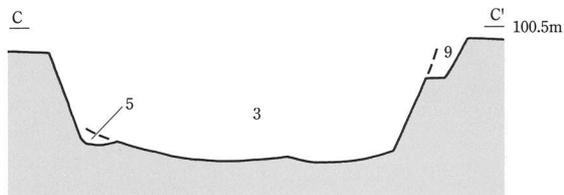
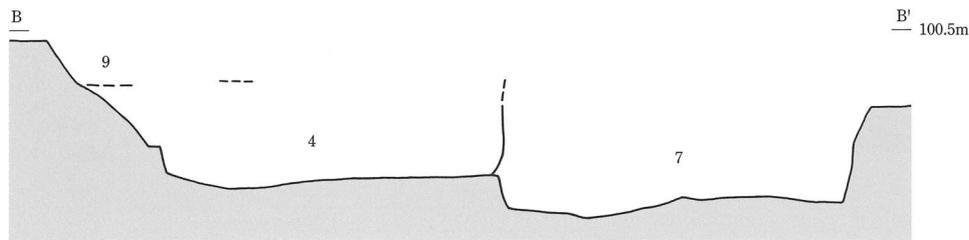
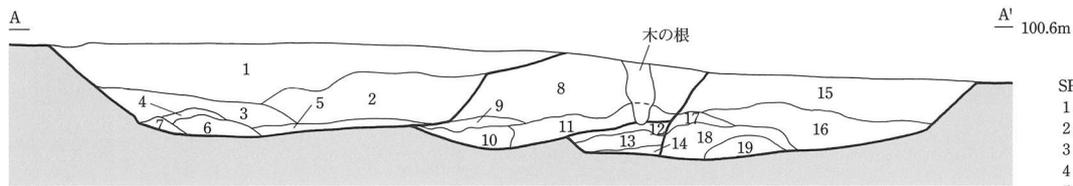
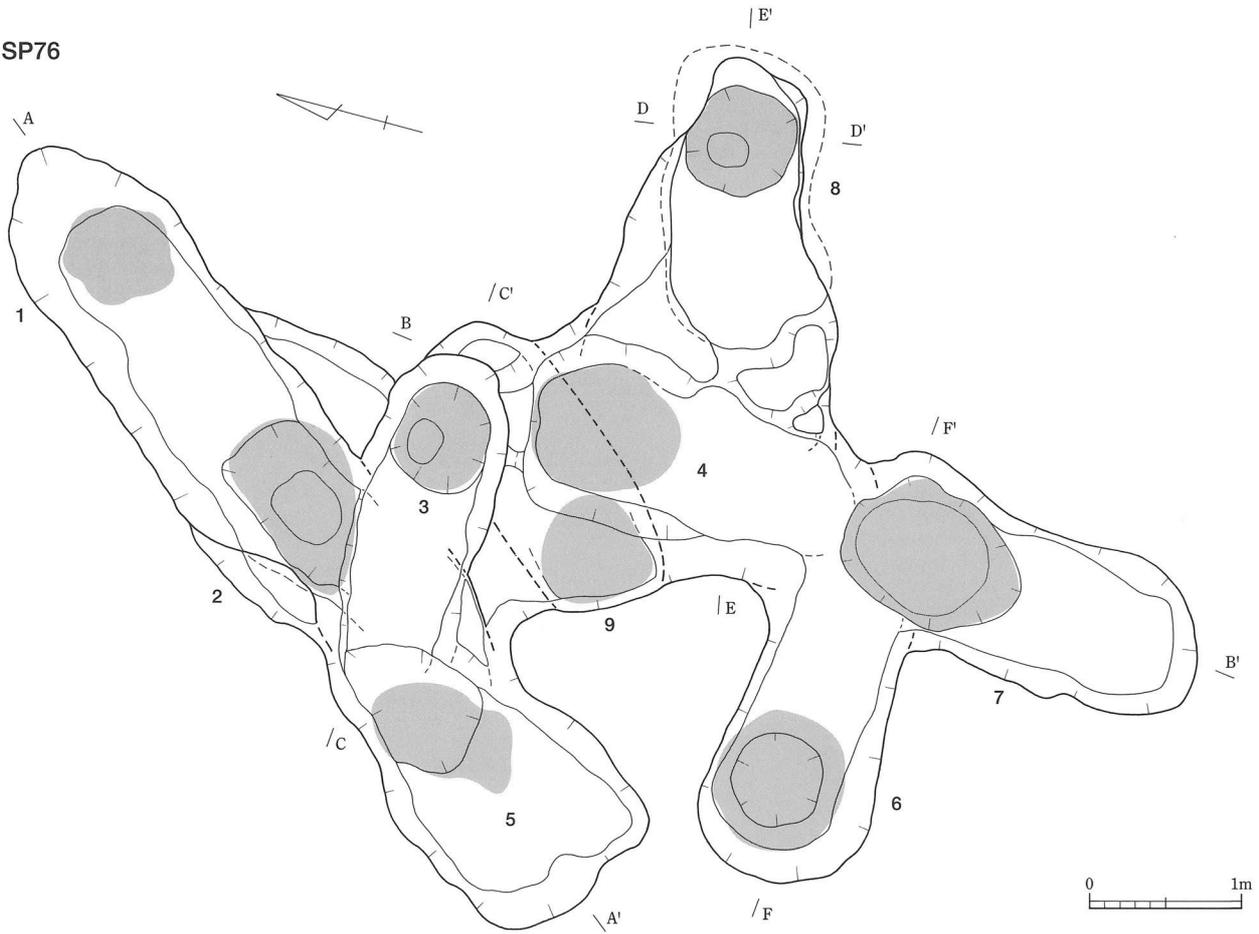


第50図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(29) [S=1/50]



第51図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(30) [S=1/50]

SP76



- SP76埋土
- 1層：黒褐色土(白色粒・軽石混)
 - 2層：暗褐色土(白色粒混)
 - 3層：暗褐色土(焼土粒少量混)
 - 4層：暗褐色土(焼土ブロック混)
 - 5層：暗褐色土(炭化物混)
 - 6層：明褐色土(焼土)
 - 7層：黒褐色土
(焼土粒・炭化物多量混)
 - 8層：黒褐色土(白色粒多量混)
 - 9層：黒褐色土(焼土粒混)
 - 10層：明褐色土(焼土)
 - 11層：暗褐色土(焼土ブロック混)
 - 12層：暗褐色土
 - 13層：暗褐色土
(焼土粒・炭化物多量混)
 - 14層：明褐色土(焼土)
 - 15層：黒褐色土(白色粒少量混)
 - 16層：黒色土
 - 17層：黒褐色土(焼土粒少量混)
 - 18層：黒褐色土
(焼土粒・炭化物多量混)
 - 19層：明褐色土(焼土)

第52図 別府原遺跡 炉穴(SP)実測図(31) [S=1/50]